

頑張って魔法剣士になりたい元男に祝福を！

狭霧 蓮

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

異世界転生……そんなのがあるとは知らなかった。

俺はモンスターがかなりたくましい世界に転生したが……いざ転生したらさ……女になってたんだ……主に契約した星霊のデメリツトのせいで

これは星霊の導きで、ポンコツな仲間とともに女体化した俺が歩む英雄譚出ないただの冒険譚？

※星霊についてはこの小説オリジナルキャラでになります。新タイトルからは、別小説のキャラのタグが消滅しますのであしからず旧タイトルを再構成しながらまずは主人公1人パートである0章を追加します。

注意（旧タイトルまで

この小説には他の小説のキャラが出現します。

時間軸は他の小説のキャラたちの完結後を想定してますので軒並みチート級の存在たちです（汗

出てくるキャラのヒント

ISの主人公（天然精霊王

緋弾の赤金髪の貴公子（キャラ崩壊してるかも

その辺を踏まえてお読みください。

※ この小説に評価をくださる場合、10文字以上の一言をお願いします。

荒らし対策でもありますが、作者としては読者様方の声を聞きたい

のであしからず。

# 目次

0章 くはじまりの日く

プロローグ

冒険者登録と現状の確認を！

近況と初めての戦闘を！

この巡り合いに祝福を！ 強敵からの逃走を！

合流と冒険の準備を！

悪魔との会敵を！

この暴龍からの逃走を！

暴龍と決着を！ そして新たな始まりを！

主人公設定

第1章 出会いの秋！（ああ駄女神さま）

この出会いに祝福を！ ようこそ異世界へ！

カズマ達の付き添いを！

中二魔女っ子とあの忌まわしいカエルに爆裂を！

鋼の女騎士とキャベツとの乱戦を！

旧タイトル版 追いつき次第削除

プロローグ

冒険者登録と工事現場のお仕事を！

武器鍛製とカエルとの死闘を！

中二魔女っ子とあの忌まわしいカエルに爆裂を！

鋼の女騎士とキャベツとの乱戦を！

擬似無双の代償とある魔剣使いのお誘いと！

交流とドラゴンとの激闘を！

勇者（笑）卒業とあの暴龍に永遠の眠りを！

186 173 163 149 137 127 115 104 88 76 68 62 58 52 46 39 33 25 18 12 1

報酬とご近所さんの襲来と！

精霊の説教と冒険の交渉と！

## 0章 くはじまりの日々 プロローグ

「剣無春人さんけんなしはるひと、ようこそ死後の世界へ。あなたはつい先ほど、不幸にも亡くなりました。若くして短い人生に終止符を打ったわけで……」

真つ白な部屋の中で告げられるその宣告に俺は「死んだ」と認識する。

事務的な配置の椅子にいつの間にか腰掛けていた俺は何かを思い出すようにぼうつとしていた。

向かい合わせに座る一人の女性……いや、人間じゃないこの人は。

自ら光るような艶を持つ柔らかな印象の透き通った腰までの長さ  
はありそうな水色の髪。

年は俺とあまり変わらなさそうで同い年だろうか。

出るところはしっかりと出て無駄のない健康的で完璧な造形美の  
体は淡い紫色の羽衣に包まれていて神々しさを感じさせてくる。

……女神。

そのワードが頭に浮かんだのは無理もない……そうに違いないだ  
ろう？

透き通った髪と同じ色の瞳をパチパチとさせながら俺を凝視する  
美少女をよそに、記憶を手繰り寄せた。

□

俺は毎日の日課である模造刀だが日本刀の素振りを終わらせて、家  
の母屋で寛いでいた。

時刻は昼下がりとなったこの日、俺は学校を休んでいた。

理由としては付き合っていた女子との破局が原因で元カノと顔を  
合わせづらかったこともあり、仮病を使って休んだのだ。

女々しいと笑うのならば笑え。まあ、己の心の中にぼっかりと空い  
た穴をふさぐのには少しばかりの充電期間は必要だと思うのだ。

明日からは気分を変えて心機一転、明るく前向きに学校に登校しよ

う……そう決意しながら俺は近くの河川敷にてランニングをこなそうと家から出た。

この選択が間違いだったのかもしれない……少なくともこの時はあんな事態に遭遇するとは思ってもいなかったが。

川端まで徒歩でそこまでの時間はかからないのだが、足取りは重い。

河川敷で始まったあの恋を引きずるように、歩いていたら無理も無いか？

「あ……春人!？」

「……な、夏海」

いつの間にか俺は未練の残る恋に引き摺られてきてしまった場所には、元カノの……西蓮寺夏海がいた。

何故ここにいるのかを聞いたら夏海も仮病を使って学校を休んだらしい……同じ行動に驚き戸惑ったが……俺たちは自然と笑いあっていた。

「皆勤の春人が仮病ねえ……」

「うるせえよ……大体誰のせいで休んだと……」

「プークスクス！ 女々しすぎよ、春人は」

「わ、笑うな！ 女々しいのは理解してるよ！」

そんな会話から始まり。結局、長電話しているみたいに話し込んでしまい……

「もう4時か……」

「そうね……楽しい時間で本当にすぐ終わるよね」

「あ、ああ。 そうだな……」

楽しい談笑から急降下して通夜かよ、今日は。

「あの、さ。 夏海」

「何？ 春人」

恐る恐る切り出す俺……

「今回の恋は俺と君の価値観のすれ違いが原因で終わったよな」

「う、うん。 そだね」

「だからさ、もしなんだが……俺がもう少し大人になったら……また

「一緒に……」

俺の決意を話そうとした時……

「おいそこのガキ！ どけえ！」

後ろから大声が聞こえて来たと思っただら直後に俺は何者かによって殴り飛ばされた。

「いつてえ……」

俺が起き上がるとすぐに悲鳴が聞こえた

「い、いや！ やめて！」

「いいじゃねえか、よおな？」

服を裂かれた夏海の下着、その上の白い肌の眩しい鎖骨あたりを見知らぬ男が舌を這わせていた。

よく見ると、その右手には刃渡が12センチほどのナイフが握られている。

最近、町では少女を狙った強姦惨殺事件がよく起きていた……俺と同年代の女子を狙う卑劣で残忍な行為……幾人かの被害者を出しながらも犯人は捕まっていなかった。

目の前のこいつが件の強姦魔……！

刹那に、どす黒い感情が俺の中に芽生えた……ああ、これが「殺意」か……そして並行して……湧き上がってくる勇気と「護る」という意思。

俺の手元に転がっていた親指ほどの大きさの石つぶてを幾つか拾うと、そのうちの一つを強姦魔のこめかみに目掛けて投げる。

「あ、だ!! いてえ……ぎやつ!!」

コントロールには自信があつてね……子気味のいい音がなり、遅れて男が夏海から離れて側頭部を押さえながら俺を睨みつけてきた。

「逃げる、夏海！」

立ち上がった男の脛に尖った石つぶてを投げつけてダメージを与えると俺は拾った太めの木の枝を上段に構えて、微動だにしない。

目をつむり、精神を集中させる。

「死ねクソガキがあああア！」



ナイフを両手保持で突き出し突進してくる男……引きつけて……枝を袈裟斬りのように振り下ろした。

バキッ!

枝が折れ、肩口を強打された男がナイフを落としながら悶えるのを確認した。折れた枝を放り、足元に転がっていたナイフを傍に蹴飛ばす。

「大丈夫か、君たち!？」

「ん? あ、警察を呼んでもらってもいいですかね? あと、救急車」  
駆け寄ってきた近所のおじさんに110当番を頼み、男に気を緩めて背を見せてしまう。

実は、感触的になんだが男の鎖骨を折ってしまった気がする……こりや傷害罪も覚悟しないとな……

「救急車に乗るのは……お前だよクソガキ……!」

どすっ……どっ

鈍い音がした……どうやら……

そして直後に押し寄せてくる、焼け付くような激しい痛みと「何か」が体から抜けていく感覚を精神論の「ガマン」で押しこらえて俺は最期のチカラを振り絞ながら、夏海を守るために、振り向いた……火事場のクソ力とはこのことを言うのだろうか。

ナイフを俺の体から抜いて、後ろに下がった男は再び俺にその血に染まった凶刃を向けて心臓を狙うようにフラフラと歩み寄ってきた。

「死ね、クソガキッ!!」

「往生際が悪いんだよ、クソ野郎が!」

俺の激昂と思い、重心と体重をすべて乗せて振り抜いた拳がダメージが抜けきっていなかったのか、フラついていた男の顎にクリーンヒット。

その体を宙に浮かせた野郎は吹っ飛んだ。

「は、春人!」

足元を見ると、そこには血溜まりができていた……それと同時に……力が抜けた……膝をつき、地に伏せる。

当たり前か、二回も刺された、場所的には急所の、太めの血管が通

る場所のようだし……

朦朧とする意識、遠くから聞こえる夏海の声……

救急車とパトカーのサイレンが近づいてくる……

俺の体の感覚はもうない……瀕死なのだろうな……

「春人！ 死なないでよ、春人！」

「バーロー……死ぬわけねえだろうが……この俺が……」

気休めと我ながら死にかけのくせにとんでもないデマカセを言ったもんだよな……血溜まりに沈む俺の体に抱きつく夏海の体は血塗れなのは、当たり前か。

「なあ、夏海。こんな別れになっちまうのは……申し訳ないんだがよお……最期ぐらい笑って過ごそうや……」

「春人……？」

閉じる人生に未練はない……

「ロクな取り柄のない……俺でも……好きな女ヒトを護れるんだな……夏海……今生の別れ故にさ……ひと言だけ……こんな終わりの恋にぬげない……幸せを……掴んでくれよな……」

「こんな時に何言ってるのよ、春人！ もうちよつとで救護隊の人が来るからあきらめたらだめ！」

「君！ 諦めてはだめだ！」

応急処置でハンカチと付けていたベルトで止血してくれたオツサに力ない笑みで礼を言うと、そろそろ限界が近くなってきた……この程度の応急手当てで俺が生き残れる可能性は0%だ。

失った血の量が多すぎるから、どうせこのまま死ぬ……ならせめて……

「ありがとな、夏海……少し休ませてくれ……」

人生に辛い山道あれば楽な下りの坂道がある。

俺の峠越えはその道半ばで終わったそれまでのこと……だが、夏海のそれはここで終わりじゃない……

鉛よりも重くなった瞼を閉じて俺は眠る……思い女ヒトの、その胸の中で……永遠の眠りについた。

「春……人……？ 春人、ねえ。 春人！ 春人オオオオ！」

最期に、夏海の絶叫が聞こえた気がした。

「あいつはどうなったんだ？」

「もちろん、あなたとの約束を守って幸せになることを誓ったわ。

彼女の人生は薔薇色を超えた黄金色の人生だから安心してあげて。

■ 「これが未来予想図だけど……」

少女が1枚の写真を俺に手渡してくる……それは——見知らぬイケメンが彼女の手を取り、ウエディングケーキにナイフを差し込んでいるところを写した写真だった。

そうか、幸せになってくれたのか。

「改めまして、私の名前はアクア。日本において若くして死んだ人間を導く女神よ」

とまあ、俺はいろいろな説明をアクア様から受けたのだが、あまり興味のないことだったので割愛。簡単にまとめると、天国という名の無間地獄に行くか、赤ん坊に転生するか……もしくは……

「異世界に転生してみない？」

と言われた……

「もちろん私たち神々の親切丁寧なサポートによってなんのリスクもなくその行く世界で読み書きができるようにしてあげるし、財宝でも特殊能力でも、神器クラスの武具でも一つだけあげるわ！」

「勇者候補になれってことか」

異世界転生……生かされる（誤字にあらざ）世界には魔王が存在しており、日々人々はモンスターの脅威に怯えながら生きているそうなので……そこで、俺らのような若者を勇者候補に仕立て上げ、転生させてその地にて生活をさせるとのこと。

……悪い話じゃない。天国が地獄と変わらんのであれば迷うことはないだろう。

「よし、わかった。その異世界とやらに行くことにする」

「じゃあ、この中から持っていきたいと思った能力や神器を一つだけ選んでね」

アクア様はブ厚いカタログを俺に渡す。 お、重？！

しばらく眺めてみたが、数あるチート能力や武器と言うわけあってか、色々と目移りしてしまう。

が、とりあえず一つ目についた項目を見て俺は迷わずコレ、と選んだ。

「ふむむ、じゃあ大精霊との契約でいいのね?」

「ああ、どんなのはわからないんだよな? 精霊が呼びかけに答えるまで」

「そうね、冬将軍とか色々な精霊がいるからそこまでは決めれないわ」「冬将軍? なんだそりゃ……まあいいか、時間も押してるんだろ?」

「ええ、そうなの。話がわかる子って嫌いじゃないわ! き、これが契約書よ! パパッと済ませて旅立ちの準備を済ませましょうか!」

俺は取り敢えず、なんだか神々しすぎる光を放つ羊皮紙っぽい何かに自分の名前を書く。

そして、アクア様が呪文のようなものを唱えると……書かれていた俺の名前が光とともに浮かび上がり、羊皮紙もまた光の粒子になって消えて行く。

光がだんだんと収束していき……ひとつの形を作って行く……人の形になってさらに虹色の光が溢れた、と思ったら何やら赤黒い光まですちらついて火花見たく光った。

「……え? あ、これはまじいかも!」

「な、何が起こってんだよこれは!」

そして、一点に光が収縮すると一気に爆発した。

「うお!」

「わあ!」

閃光に目が眩んだが、慣れてきた……見えるようになったのを確認すると、俺は恐る恐る目を開けた。

そこには闇色のロングヘアに光の粒子をきらめかせるドレスのような何かと重厚かつ壮麗な芸術品のような鎧を身にまとった。…姫騎士のような格好をした小人(体高15センチほど)が翅を羽ばたかせて飛んでいた。

「えーと、あなたが私のマスター君かな? 私はハルナ。 精霊のハ

ルナと申します」

「へえー……これが精霊か」

「……」

「俺が平凡な感想を述べていると、アクア様は硬直していた……なし  
てよ？」

「あ、アレ!? なんで抑止力の救世主様セイウアーが顕現しちゃったの!? ねえ、  
なんで!？」

「抑止力? なんだそりゃ」

「あ、私のステータス公開しときますねー」

疑問に答えるように、ハルナがふわりと飛びながら俺の頭に着地し  
てぺちんと手をついた。

俺の記憶を読んだのが、馴染みのある型月風のデータ紹介だった。

◇

【精霊のステータスが公開されました】

名前 ハルナ

精霊格 大星霊

身長／体重 不明／不明

性別 女性

属性 秩序：中立

特技 人道的救済、世界救世

好きなこと 食べ歩き、世界観光、対話

嫌いなこと 世界を滅ぼす旨の願い

ステータス 筋力 A++ 耐久 A 敏捷 A 魔力 EX

幸運 B+

スキル

対魔力 A+

全ての魔法、呪いが効かないもしくは効果が薄い。 三節以上の大  
魔術ですら手の一振りでも明後日の方向に弾き飛ばす。

カリスマ EX

「全て」を魅了するある一種の呪い。 彼女の人柄により救われた人  
の数、世界の数が多すぎるため得られたスキルで魔の者には効果はな

く、神の子である人へのみ効果が発揮される。

神性 C (A+)

神により創造されたモノ、ゆえに真祖のモノ。次元の旅を続けていた結果救った世界の数が多いことを認められとある世界の人類に認められ、神と崇め讃えられたことから得た神格。そのとある世界が遠くなれば遠くなるほど神格が弱体化する。

千里眼 B (A+)

全てを、見通す眼。過去、現在、未来を見ることが可能で、予知予見、透視はお手の物クラス……だが、ハルナはこれを自身から封印して2段階以上のランクダウンを施している。

所有能力

宝物庫

ハルナの持つ宝物の異空間保管場所。彼女が所有するものは、英雄王の宝物庫にも引けを取らない。

ハルナの許可があれば、宝物庫の宝物を使うことが可能、そして異空間保管場所なのでストレージ容量が無限。

道具作成陣

ありとあらゆるものを加工できる万能の魔法陣。人に作れるものであればなんでも作り出せる。鉄ブロックと火薬で戦闘機を作り出せるMODは入っていません。

重力操作魔法

重力崩壊を引き起こして特異点生成によるマイクロブラックホールを生み出せたり、重力圧を利用した偏光による光学迷彩、超重力による時空間干渉で発生させる次元湾曲シールドなどの多彩な応用方法がある万能魔法。魔法的なエレメンタルは闇に当たる。

元素掌握

四大元素をいとも簡単に扱い、嵐や日照りの天候操作もできる能力。火と水、風、土を容易く扱う。

エクストラエレメンタルの光も扱えるため、洞窟などでも光源を作り出すことができる。光と闇を合わせるのは、法度で、対消滅が起こる。

◆  
「うわお、なんだこのドチート精霊」

「ステータス見ていきなりそれ言いますか!? まあいいですけどねー。アクア様、硬直しないで業務全うしてくださいよ」

いいんかい、と心の内で突っ込みつつ、ハルナはアクア様に手続きを促していた。

「ねえ、なんで顕現しちゃったの?」

「あの契約書、私と繋がってたみたいですよ……私だけと」

「あ、これ星霊の契約書だわ……そりゃ貴女と契約できて当然ね!

じゃあ、まずは身なりよね。血塗れの服装で向こうに送り出すわけにもいかないし……ちよちよいつとね」

俺は殺された時の服装で血塗れの服だった。それが一瞬で綺麗な服装に戻っていた。

「お次は防具とかだけど、最低限のものはこっちで用意してあげる!

初期資金はこんだけね」

そう言いながらアクア様が指を振ると、着ていたパーカーの上に皮の胸当て、ガントレットに腰のベルトには鞘に収まった普通の剣と言う、冒険者風の姿に書き換えられていた。そして俺の手には小袋があり、のぞいて見るとそこには「10000エリス」入っているようだった。

「なるほど、これでとりあえず準備はできたって事か」

「うん、そうなるわ。じゃあ、貴方を異世界に送ります! 魔王を倒した暁には、報酬として、神々よりどんな願いも一つだけ叶えてあげちゃう! だから頑張つてね! (星霊との契約破棄は無理だけど……)」

「わかった。じゃあ、よろしく頼むぞ、ハルナ」

「あ、私を召喚した際のデメリットの説明忘れてました。逆転の因果を背負います」

「ん? なんだそry」

「さあ、勇者よ! 旅立ちなさい!」

アクア様の宣言に俺の視界は光に染まった。

●  
石畳の道を荷馬車が走る。

発展の見えない、中世ヨーロッパを彷彿とさせる街並みに俺はあつげにとられた。

「……マジで異世界だ。……おいおい、本気で異世界だ。え、本当に？ 本当に、俺ってこれからこの世界で魔法とか使ってみたり、冒険とかしちやったりすんの？ ……これ誰の声だよ？」

あれ？ やけに声が高くな立てる気が……いや、待て……身長が下がってる……違う、いやそんなはずは——まさか……！

俺は意を決して、ガシツと自らの胸あたりを掴む。

むにゆうと指が沈む、マシユマロのような柔らかさに対して程よい弾力を感じる夢のように柔らかい感触がそこにあつた……そして……腹の奥が強張るような言いようのない感覚も……！

俺の胸にあるはずのない物があつた——おっばいが！

「なん で 女に なってんだあああああ!？」

俺の絶叫が街に響いたのは言うまでもなかった。

(続く)



## 冒険者登録と現状の確認を！

転生したら女になっていた……意味がまるつきりわからんのだがなつてしまった事実は仕方ないのか？

「はあ、とにかく現状の確認するか」

（そうですね、原因についてをまずは説明……の前に、ちよつと霊脈に潜つてきますね？ この星に馴染まないといけないので）

「わかった、そんじや後でな」

（はい！）

ハルナは現在霊体化していて、契約者の俺と念話でやり取りをしていた。何をしているかと言うと、まずはこの星のmanaに体を馴染ませるため、manaの血管とも言える霊脈に潜り込むらしい。そこで根を張るように境界を組むのだとかスピリチュアルについては門外—俺女だけど、漢でいいのか？—な俺にはサッパリわからんが。

ちよろつと聞いた話だが、星霊という存在は星に関わる精霊の事らしい。

つていうのも、ハルナは星の誕生から消滅と言う死までを見届ける役割を持つ精霊らしい。

この宇宙において星の誕生と消滅はなんだかんだ言つてよく起るものらしいが、一つの宇宙見渡せるレベルの千里眼で全体を見通してこの先10万年ほどは星が生まれたり、死んだらほしくないらしい。創造主のくしやみで起こった全ての始まり、ビックバンが起こつて以来。創造主によつて創られて宇宙の管理を任されたハルナは1人で与えられた使命を全うしてきたらしい……ひとりぼちな環境下で。

そこで、娯楽求めて千里眼を使い見つけたのが人間。興味を持ち、人々の発達を見守りつつ過ごしてきたらしい。創造主の神様に10万年の休暇をもらつて、次元を超えて時代を超えて旅をしていた最中で、今回の契約に応じてこの場に現れたんだとか。

現在の姿は、この広い宇宙のどこかにいるであろう自分の同位体、1人の少女の姿を模したもので、実体は意識あるmanaの塊らしいが、

元ネタデアラの十香だろ？ まあ、あいつの好きにさせとくけども。で、俺はと言うと、冒険者ギルドに赴いていた。

この世界では冒険者……とどのつまり何でも屋と言う職業がある。この世界には、魔王がいる。

その魔王は魔王軍と幹部と思われる強力なモンスターを数体ほど従えているらしい。

冒険者ギルドはそんな魔王に対抗するために人間側が作った組織である。とわそんな旨の話を街のおばちゃんに聞いた。そんなことより、ウチの息子の嫁にならないかい？ とか聞かれた気もしたが、気のせいだ……気のせいだと思いたい。

ギルドの装備売り場にあった姿鏡に映る自分の姿を見て唾然とした？

「はあ……よりによって美少女かよ、俺は」

切れ長の少し鋭い目つきの青い瞳。髪は赤銅色か、これ？

……体型はモデル型で身長高くも出るところは出てる感じかなあ、コレは？

なんとまあ雰囲氣的には赤髪になる前の蒼崎青子っぽいな。

「……はあ」

「おう、ねーちゃん。ため息ばかり吐いてたら幸せが逃げるぜ？」

「ん？ 誰だ？」

「ふっ、名乗るほどの名前は持ち合わせてねえな。まあ見ない顔だったから声をかけたままでよ」

俺に声をかけてきたのはモヒカンに肩パット——ヒヤッハーって言葉が似合いそうな男だった。

「それはどうも。実は冒険者になろうと思ってここにきたわけなんだが……冒険者登録ってどうやればいいんだ？」

「ああそうかい、命知らずめ。ようこそ地獄の入口へ！ギルド加入の受付ならあそこだ」

男が指差す方向には受け付けらしきものが見えた……普通にいい人だった。

で、受付嬢に対応してもらおう。

「確かに1000エリスを頂戴いたしました。では、こちらのカードをお持ちください。」

免許証と同じくらいサイズのカードを手渡してきた受付のお姉さんは俺に説明を続ける。

世界に生きるすべての生物には魂があること、然るべくはそれは魔物にも適応される。

そして冒険者にはレベルがある。レベルとは俺的に解釈すると、  
魂の強さだと思う。

他の何かの生命活動にトドメを刺すと、その存在の魂の記憶、その一部を吸収できるとのことだ。

一つ言えるのは、まんまゲームだなこの世界のシステムはってことか。

どうせなら、初期装備の剣を使える職業ながら剣士系になりたいと思う。

せっかく生前の記憶保持で丸々（体は女になったが）持ち込んだんだ……剣道やってた手前、FEの剣士とかソードマスターとかに憧れてたわけだし。

「この書類に必要な事項を〆記入ください。あ、体重を記されなくても結構ですのぞ」

言われるがままに俺たちは必要事項を書いていく

身長は目測、体重はわからんのでスルーして年は16。赤髪青目などど適当に書いて情報を埋めていく。

「はい、ではこの機械に手をかざしてもらえますか？」

俺は指示されたままに水晶の下にいろいろな歯車が噛み合った機械の水晶の上に手をかざすと。

カタカタカタツ……

とタイプライターを打つような古風な音と共に光が放出されてその下に置かれているカードに文字を刻んでいく。

コピー機とタイプライターの複合機器みたいだな。

「はい、結構ですよ。ではステータスを確認させてもらいますね」

言いながらお姉さんは機器からカードを取り出すとそこに記され

ている数値を確かめている。

「え……う。ええええ!!」

仰天するお姉さん。なしてだよ、驚く要素がどこにある？

「はい？。どうかしましたか？」

「い、いえ。筋力と体力が平均より低いのは目立ちますが、他のステータスが平均以上！特に敏捷、器用さ、知力のステータスが高くて幸運、が平均より少し高いくらいですけど。といいますか、この魔力どうなってるんですか!? 平均以上通り越して異常な数値ですよ!」

ゑ、何それこわい。

と言うか、後ろの酒場まで聞こえたのか酒場の方からちらほらと人がやってきてるのが気になる。

いや、これは俺が転生者だからだろう……と思おう、そうしよう。

「上級職のアークウィザードも夢ではないですよ！　ていうかアークウィザードが天職でしょう!」

「えっと、物理職をお願いします」

「はい、では物理職の希望ですね!　……つて、はい?」

驚いてポロリとカードを落とす受付のお姉さん——俺、なにか変なこと言ったか?

「なにか?」

思わず俺が疑問符を浮かべるとお姉さんは引きつった笑みを浮かべながら俺に

「えっと、この筋力だと魔法剣士か盗賊か……軽装の近接職にしか」

「魔法剣士!」　あるんですか!」「ひえ!!　は、はい!　あります!」

ていうか顔が近いですよお!!」

魔法剣士の職業があると聞いた時俺は思わず興奮してしまい、受付のお姉さんの腕を掴んでずっと顔を寄せてしまった……軽率な行動は控えよう、うん。

「あ、すみません……。興奮しちゃって……」

思わず謝罪した。　だっってお姉さんの引きつぷりがなんか悲しかったから。

「い、いえ。すこし驚いただけですから。でも本当にいいんですか？ ステータス的にはアークウィザードの方が合っていますか……」

「下手に魔法使いから始めたら後が大変かなーと……それに、転職もできるんですよ？」

「それはそうですが……。いえ、人の決めたことに口を出すのはギルドスタッフとして失格ですね。では、魔法剣士で登録させていただきます！ それでは、ようこそハルヒト様！ 冒険者ギルドスタッフ一同、今後のご活躍をご期待させていただきます！」

こうして俺は〈魔法剣士〉になりました。

☆ このすば ☆

「そんじや、俺がこうなつた原因を説明してくれるんだよな？」

「はい、もちろん。まずはそうですね……マスターは因果律をご存知ですかね？」

「そうなる可能性の原因と結果に直結する「そうなる運命」みたいなのだよな？」

現在、場所を今日泊まる宿に移してハルナと対話している。対話というか、今回の俺の女体化についての説明だな……

「はい、その解釈で間違い無いです。そして、私と契約を結んだ者は「因果逆転の業」を必ず背負う真理ルールがあります」

「傍迷惑なルールだなおい。そのデメリットってのはなんなんだ？」

「それが今回の女体化の原因になっているのですよ、マスター。因果逆転は端的に言うと、「こうなっていた」になるはずの結果が正反対の事象に変わるようなものです」

「なんだそりや……」

「私のステータスをご存知なら、そのチート性能に見合う命に関わらないデメリットがそれだったまでです。そして、因果逆転しているのはマスターのステータスにも影響が出ています」

言うや否や、ハルナの前に置いた冒険者カードに記されたステータスをその小さな手で指差す。

カードのステータスには、筋力 10 体力 15 魔力 99+  
知力 40 敏捷 35 器用 32 幸運 29 保有スキル  
ポイント 40 と表記されている。

「私と契約を結んだことで、性別が女性に変わり元は物理職向けだったマスターのステータスですけど……ここで因果逆転してしまい、知識職のステータスにひっくり返ったわけですね。ああ、魔力がカンストしてるのは私とパスが繋がっているからと思ってください。

私の保有魔力量は、アークウイザードが爆裂魔法を1日に二回撃つてもピンピンしてるクラスの魔力量ですのぞ」

「なるほどな……このままだと俺は、高めの敏捷を活かして器用に依存したクリティカルを狙う一撃離脱戦法の、低い体力の紙装甲魔法戦士扱いってわけか」

「筋力と体力は私のブートキャンプでなんとかかするとして、方針を固めましょう」

こうして、まずはこの先の準備として、商店街での売り子のアルバイトをしながら、ハルナに稽古をつけてもらうことにした。

「さて、マスター。あなたはこれから私の第30人目の弟子です。ビシビシ鍛えて上げますからね！ 目指すは蒼の魔法使い兼剣士ですから！」

「封印指定はされたく無いから青子さんは目指さんからな!？」

そう言うことで、俺の異世界生活は今日から始まるのだった。

## 近況と初めての戦闘を！

異世界に来てから一ヶ月ほどが過ぎた今日も、俺は「いらっしやいませ！」

丁寧な姿勢で気を付けから、体を少しだけ前に傾けて礼、そしてにつこりと営業スマイルで客人を出迎える。

目の前には50近くか前半のオッサンが脂汗と気色の悪い笑みを浮かべて俺を視姦している……お盛んなこった。

やたら胸を強調する制服ユニフォームを着込んだ俺は現在、喫茶店でのバイトに勤しんでいた。

仕事を終えて、これまでのことを振り返り観る。

バイトを始めて3日目で50人近くの固定客が付く始末でこの街は一体どうなってやがるとも言いたくなるが、もうここまで来たらもはや諦めの境地だ。

尻を触つたりのセクハラしようものなら、その手を最小限の力で関節を極める小手捻りで締め上げながら「おやめくださいね？ お客様？」とお願ひすれば、みんなコクコクと必死に頷いて学習してくれたのでよしとしよう。

とまあ、そこそこエリスも貯まってきたことだし、そろそろ本格的に冒険の準備をしようと思う。

まだ冒険の「ぼ」の経験すらないからな、俺は。このままじゃ冒険者になつた意味がない。

ここ一月、あの喫茶店でバイトして8時間働いても、日当は2000エリスだ。時給にして250エリス……最低賃金なんてあつてないもんで、そもそもここは日本じゃないしな。

初心者向けのクエストを受けるためにも装備を整えたい俺は、節約とバイトを頑張つてさすがに馬小屋は嫌だから宿の物置に泊めてもらっている。そもそも、俺は元男だったが今や女でステータス的に見たら最弱の筋力値だ……もしもの事を考えたくもないので、狭い物置で寝泊まりしているわけ。仲間がいるのなら馬小屋でもオツケーだと思うがな。1日250エリスで泊めてもらえるよう交渉

もしたしな……起きる時に体がバキバキなのは仕方ないことなので、もはや諦めたけど。

そんなことを考えながら、毛布をハルナの保有結界から引き摺り出してくるまり、俺は眠りについた。

☆ この すば !! ☆

「せあつー！」

「まだまだ甘いですよ、マスター？」

俺の持つ木刀をハルナの木剣がいなす。

「そんなんじや、ジャイアント・トードに丸呑みにされておしまいです」

「そうならねえために、稽古頼んでんだろうがっ！」

軽口を叩きながらさらに連撃を積む。 袈裟斬り、斬り上げ、逆袈裟斬り！

この3連撃をハルナは紙一重まで引きつけて最低限の重心移動で、すり足で避け切って見せた。

俺は現在、ハルナの指導下でトレーニングを積んでいた……え？寝てるんじゃないのかだって？

ここは俺の体の存在する場所ではなくて、ハルナの保有する宝具が作り出した空間だ。

空間から時間を切り離れた限定領域で、俺の魂を体から引っこ抜き、ハルナの創生魔法で一時的な肉体を作ってもらい移動、この結界内で動いている。

俺の体の方は今、魔法的なコールドスリープ状態なので死んでいるわけじゃあないのでご安心を。 なので今の俺はホムンクルス状態ってわけで、俺の本体が疲れるわけではないので問題ない。

まあ、精神は少し磨耗するが。

今は効果的な剣術の指導を受けつつ、体捌きを魂に刻み込んでいく。

なぜ魂なのか……これは俺の体を騙すためでもある。

因果律が狂っている俺の肉体は、呪われてるかのように筋力と体力のパラメーターが伸びにくくなっていると言うことで、完全に知識職



向きの肉体ってわけなのだ。

で、その狂った因果律を騙すべく、その結果に至る原因を騙すべく魂に経験を積みさせている。

ハルナ曰く、この結界内での経験は俺の魂に記憶されていると言う……だが、体にはそんな形跡がない。つまりは矛盾が起こるのだとか。

それで何が起こるかと言うと、魂と肉体の経験の差の帳尻を合わせるためにその矛盾を快復させようと身体の成長の起点たる「基礎ステータス」に変化が起こると言う。

この場合、魂に刻まれた経験には相応の筋力を得ているはずなのに、体には予定を下回る筋力しかないとする。すると肉体はその矛盾を快復させようとしてその筋力を補填しようと成長しやすくなる……と言うことだ。

ちなみに、基礎ステータスはその人間の素質によって振り分けが決まる。

俺の場合は、知力と器用、敏捷、魔力がダントツで伸びやすいとハルナに聞いた——筋力とはかく、体力はスタミナとHPに影響するから伸びやすくしないとこの先まずいらしい。

「あれから一月、だいぶマシンにはなってきましたね、マスターの動き」「褒めてんのか貶してんのかわからねえいい方すんなよ」

「いや、褒めてますからね!？」

とまあ、皆さんはお気付きか？ このハルナ、俺と同程度の身長になっっていることに。 見目麗しい美少女の姿は町のどんな男も絶対に振り向かせるに違いない。 まあ、俺は今現在は同性なので興味がないし百合になるつもりも、毛頭ないしね。 と、タネを明かすと、ハルナに質量保存の法則は通じないだけだ。

霊体だし、実体は本来持ち合わせちゃいないからな、こいつは。

「明日は休みだし、装備を買いに行きますか」

「と言うことは、そろそろ本格的に冒険の準備を始めるんですね？」

「……いつまでも物置小屋で過ごすのは癪だからな」

「なるほど。 じゃあスキルもついでに覚えますか？」

「ああ、そうだな。じゃあ、まずは起きないとな」

こうして俺は目を瞑ると、ハルナに導かれるがままに魂が肉体へと飛んだ。

○

「資金は40500エリスか。皮鎧と剣は持ってたし、双剣で戦いたい」

「んーとですね、双剣を使うなら同じ長さに近い剣を使うのが一番です。だから、これなんてどうですかね？」

頭の上に座るハルナと相談しながら、装備を選ぶ。

武器屋の店主は俺の頭上のハルナに興味津々なようだ……このひと月の間で、ハルナはアクセルでその名を知らぬ存在となった。ハルナが俺の周りを飛び回り、付いてくる姿はまるで妖精のようだからだろうか？

「鋼の剣か、値段は……12500エリス」

「剣としての長さは及第点でしょう、買いですかね？」

「まあ、そうだな」

店主にお金を払い、鋼の剣を鞘に収めて腰のベルトに吊るす。他に買ったのは矢を数十発に矢筒だ。

矢筒と矢はハルナの保有結界に放り込み、ながら俺はアクセルの外に出た。

門番の人に冒険者カードを見せて、外に出たのだ。使えそうな素材を探すために。

「木の枝だけでいいのか？」

「はい、それだけあれば弓は作れますよ。弦は必要ない魔力で編むものを使ってもらいますから」

今回の素材集めはハルナの道具作成陣を試験的に試させてもらうのが目的だ。この魔法には俺も使用できるらしいので使えるものは全て使おうという方針で意見が一致した。

ちなみにだがハルナの言い分を信じると、作ろうと思えば戦闘機でも作り出せるらしい。

あくまでも人に作れるものならば何でも作り出せるらしいからな。

つまりは、神代の古代都市に生きた人々が創り出したような物も作り出せるということ……コストバカにたかそうだけだな！ AUO並みの黄金律があればいくらでも作り出せそうだが、そんなもん無い物ねだりだ。

「つとまあ、こんなもんか……ん？」

「あ、これはマズイですね……」

近くの草むらが揺れてそこから毛のないチンパンジーみたいな、醜悪な猿っぽい何かが出てきた。

各々粗末な盾や石刃の手斧、石刃の剣やらを持っているのが5匹ほどかな？

「ギギイツ!!」

「ギイツ！」

「マスター、彼らはゴブリンです。今のマスターじゃ太刀打ちできるか怪しいですよ——」魔法の練習相手がノコノコ出てきたわけか「ええ!? ちよつかい出すんですか!？」

「少なくとも、奴らは俺を逃してくれそうにないし」

「いっちょまえに角突きの兜を被った個体が騒いでいるし」

「オンナ！ オンナ！ 肉ウマソウ！」

「ギギイツ!!」

人語を話すのはリーダー格だからだろうか？ とりあえず俺は魔法を唱える。

「紅蓮に燃えよ！ 《フレイム》ッ！」

中級魔法を覚えると使える火の魔法、《フレイム》はバレーボールくらいの大きさの火球を作り出せるポピュラーな魔法だ。俺は火球を投げてゴブリンたちの足元の枯れ草を燃やした。

枯れ草ともなると、すぐに燃える。そのぶん燃焼時間も短い、脅かすには十分なはずだった。

「マホウ？ ヘボー！ ヤッチマエ！」

ゴブリンどもは足元の火なんざ平気と言わんばかりにこちらに走ってきた……って何っ!?

火見たらさすがに逃げるだろっ!？ どうなってんだこいつらの思

考!?

「追い払うつもりだったけど、飛んだ誤算だなオイ!？」

「この世のゴブリンはたくましく、食物連鎖の下の方でも集団で自分たちよりも強いジャイアント・トードを狩りますからねー。舐めてかかったら死にますよー?。」

「それを、早く言えっつーのおおお!？」

ベソかいても仕方ねえ! 俺は中級魔法の一つで身体能力強化を使い、筋力と敏捷を強化。さらに二本の剣を抜いて左手の鋼の剣に《エンチャント・ウインド》右手の黄金色の剣に《エンチャント・フレイルム》を与えて、剣を構えた。

ちなみにだが、エンチャント系の魔法には武器の耐久値を肩代わりする効果があったりする。切るたびにその効果が薄れる感じかな? 言い換えるとエンチャントが続く限り、剣が折れることはない。貧弱な俺の体力で、当たれば死にかねないゴブリンの攻撃力を舐めるつもりはない。同人RPGの敗北イベントでモンスターに輪姦されるリヨナの展開はさらにノーサンキューだツツツ!!

「いくぞ……」

集中、まずは飛びかかってきた手斧と木の粗末な盾を持ったゴブリンAを狙い、風の刃を纏う鋼の剣を逆袈裟斬り気味に斬りあげる。

ゴブリンAはそれを盾で受け止めようとするが甘い! 鋼の剣は盾を両断しつつ、ゴブリンの胴と腰をサヨナラさせた。エンチャント・ウインドの効果は斬れ味上昇と、瞬間リーチ延長。振り抜いた刀身が一時的に倍加する効果を持つ!

次に右手の剣を真横に振り払うと三日月のような形の炎の塊が空を舞う。炎の塊が、直撃したゴブリンBは一瞬で灰燼に帰した。

2匹のゴブリンはそれを見て武器を捨てて逃げ出すが、リーダー格のゴブリンは俺を睨みつけていた。

「オレノテシター! ヨクモー!」

こいつの武器は鉄製の刃こぼれしたシミターだろうか? まあ粗末な武器に違いはないだろう。

駆けてきたゴブリン・リーダーと切り結び、受け止める。

「仕掛けてきたのはお前らだ……悪く思うなよ……」

俺は、剣を手放しながら後ろに飛ぶ。ゴブリン・リーダーはつんのめって前に転びかけるが踏ん張って持ちこたえる。そりや俺が丸腰になるわけだからな……本来なら

「全ての空を統べる颯風の女王よ。 汝に我は願う。 我を滅ぼそうと、我を倒そうとせん彼の敵に嵐天の鉄槌を与えよう！ へテンペスト・ブレイクッ！」

その詠唱を終えたハルナが放った真空刃の塊の、強力な精霊魔法を受けたゴブリン。 その瞬間に、ゴブリンは血煙と化した。

この巡り会いに祝福を！ 強敵からの逃走を！

俺のあたりには、血の匂いが充満している。 土のシミとなったゴブリンだったものを見ながら一言。

「うぶ、嫌な匂いだ」

「独特の血の匂いは好きになれませんねー。 大丈夫ですか、マスター？」

「これが殺すってことなんだな。 この世界で」

「他者の命を奪わないと強くなれないのはこの世界での自然な摂理ですよ。 弱者は強者の餌になって当然な命の軽い世界ですよ。 こ

の世界の過酷さを知ってもなお、前に進めますか？ マスター」

俺に問いかける星霊の目には慈愛が見えた。 それはまるで、「ここで逃げ出しても誰も責めませんよ？」と問いかけるような瞳で俺を捉えるハルナは俺を心配してくれていた。

俺が、本当に魔物を殺せるのか、斃せるのかと。

「お前が血煙に吹き飛ばした奴に、俺さが殺した2匹に黙祷を——俺の魂の糧として、お前たちの魂を受け賜るっ！」

俺の中で覚悟が芽生えた。 本気でこの世界で生きよう、真剣に魔物を斃し、強くなつた果てに魔王を倒そうと。

冒険者カードを見て見ると、俺が斃した魔物の履歴が記されていた。 ゴブリン2匹とゴブリン隊長の経験値を確認すると意外と多かったのか、俺のレベルが1上昇していた。

「お前が斃しても、俺の経験値に加算れるんだな」

「ええ、私とマスターの契約は魂を共有しているという形です。 リミッターの許容範囲であれば私も魔力を使い、精霊魔法を使つての支援ができるのですよ」

「ヘテンペスト・ブレイク」だったか？ かなり強力な魔法だろこれ」 言いながら俺は、平原にできた窪みを見る。 圧縮された暴虐なる

鉄槌はゴブリンを消しとばすには充分過ぎる、オーバーキルな規格外の一撃だった。

高密度な真空刃の塊は一瞬でゴブリンの体を数ミクロンよりも細

かく切り削り、バラバラに解体させたのだ。当然、あたりの地形も削り取られて土煙となり、風に流されていった。

「そこまで魔力使ってないんで、多分問題ありませんよ。加減したつもりだったですけど、やりすぎちゃいました」

「可愛こぶってんじゃねーよ!? 二次被害で地形破壊すんな!」

「地形修復は簡単ですよ?」

パチンツとハルナが指を鳴らすと、窪んだ大地が蠢動して穴が埋まった。

土の精霊に働きかけて大地を埋め立てたようだ。

「さあ帰りましょうか、マスター」

「そうだな、ギルドに行けば討伐報酬出る筈だし今日はうまいもん食おうぜ」

「賛成です! 私はスモークリザードのハンバーグの定食が食べたいです!」

「賛成、あれは美味しいしな! 逸品物のジャイアント・トードの唐揚げも追加してな!」

「わーい! パーつとやりましょう!」

大量の食材はこいつの小さな体のどこに収まるのかとかは突っ込むべきじゃない。星霊だからと俺は勝手に納得してる。ちなみにだが、ゴブリン討伐で得た小遣いはハルナの胃袋を満たすために頼んだ晩飯代に消え去った。

それから、オヤジとお袋。異世界で、女になっちまったけど俺は楽しく生きてます。

こうして俺は初めてのレベルアップ、戦闘をこなしてアクセルの街に戻った。

☆ このすば!! ☆

初の戦闘から少しあったある日、俺は最近の日課になりつつあるゴブリン狩りの依頼を受けにギルドに来ていた。

「ゴブリンの群れが最近沸いてるよな」

「初心者殺しに追われてきたんじゃないのか?」

冒険者のそんな会話を聞き流しながら、俺はクエストボードに出て

いたゴブリンの群れの討滅を受注した。

「マスター、何度も言いますけど初心者殺しには十分注意してくださいよ。」

「出会わなけりや問題ない。違うか？」

「出会う可能性があるから注意するのですよ！」

狩場に向かう道中、ハルナにはさんざ注意された。

初心者殺しなんてヘンテコな名前のモンスターだが、出会ったことがない。なので、出会うはずがないと俺はタカをくくっていたのだ。正直に言うと、かのAUOと同じく「慢心」していた。舐めプしていたのだこの世界を。

そしてアクセルの街から少し離れた場所で俺はゴブリンの群れを見つけて数を把握した。

俺は弓に魔力を通わせて矢を装填する。そしてキリキリと魔力で編んだ弦を引く。矢弾に魔力を通わせて……放つ。

矢の着弾とともに閃光と轟音が鳴る。土煙を巻き上げて十数匹のゴブリンが吹き飛んだ。

これは魔法を矢弾に付与して限界ギリギリまで魔力を溜め込み、放つ矢を爆発させる武器自壊の付与だ。手持ちの矢12本を全て使い切り、倒したゴブリンの数は29匹。

「これだけ倒しておけば十分だろう」

「む……マスター、すぐに引き上げることを、早急の撤退を提案します！」

「ん？ なんでだ？」

「今の連続爆破で気取られた可能性があります！」

春奈の忠告は、それはかなり必死な表情だった。

「グルオウアアアツ!!」

その咆哮はどこからか……黒い影が間近に迫ったのをハルナとの模擬戦闘で養われた直感と紙一重の回避の感覚で体を少しだけ傾けて避けるがしかし、咄嗟のことで重心移動が甘かったのか、頬に鋭い痛みが走る。

「マスターツ!？」



「かすり傷だ！　なんだこいつ!？」

クソツ、なんでこうなったんだ。俺は再びこちらに飛びかかってくる黒い獣を見て戦慄した。心の奥底から恐怖を感じた……ライオン、トラと同等の大ききで、力強い筋肉質な体の獣。

『マスター!!　ボケツとしない!　回避行動とって!』

ハルナが直接頭に大声を叩き込んでくれたおかげで、獣の飛びかかりを充分に引きつけながら、俺は軽業のスキルで前転、その足元に潜り込む形に回避した。

『あの獣は〈初心者殺し〉!　マスター、全力で逃げますよ!　今のマスターが勝てる相手じゃない』

「特徴を教えてくれ、ハルナ!　こいつから逃げるためには効率的な行動が不可避だ!」

鋼の剣を鞘から抜き放ち、身体にエンハンストを掛け筋力、敏捷を強化しながら俺は身構えた。

ハルナとのやり取りで得た情報。まずは初心者殺しの名前、駆け出し冒険者の天敵でかなり高い知能と強力な身体を持つ狡猾で慎重な大型モンスター。

俺は投擲ナイフ3本を取り出すと、魔力充填を開始しながら奴さんの動き挙動を観察する。

俺の周りをゆっくりと旋回して、機を伺っている様子だが摺り足で体位置を調整しているから、お互いにスキを見せていない状態だ。

『く、マスターと目標との距離が近すぎます!　私の魔法での援護は不可能です』

「お前、かなり賢いな……俺とハルナを分断し、あいつが魔法使うと俺にも被害が来ると分かった上で俺から距離を取らないわけか」

ガルルと唸り、奴は嗤う。

「凍て付かせよ《アイクシル・ランサー》!」

鋒を向けて魔法を発動させる。氷の槍が生成されて初心者殺しに向かう。

奴はひらりと魔法を躲しながら俺に飛びかかる。予測通りの挙動。

俺は迎撃に投擲ナイフを投げる。

片足を着地させて避けようとする初心者殺しの手前でナイフの内  
部から魔力が溢れ出し、爆発した。

本能的に身を引いたのか初心者殺しはその爆発から逃れていたた  
めほぼ無傷だった。

「ナイフは後5本か」

俺は投擲ナイフ全てに魔力を込めた。

「そら、爆発すんぞー！」

一投。 初心者殺しのいた場所に突き刺さり、派手に爆発させて地  
形を削る。

二投。 予測していた場所に投げて爆破。 木を足場に飛びかか  
ろうとしていた初心者殺しはそれを避ける。 爆発の衝撃で木がへ  
し折られて倒れる。

初心者殺しから距離を取ろうと、後退しながらナイフを投げしてい  
た。 ハルナの力で奴を倒すのは容易。 でもそれだと、こちらの森  
を破壊しかねない。

それに、ハルナの力頼りなのは正直に言う気分がよろしくない！  
「慢心してたツケが回ってきたわけだ。 だから、こっからはマジで  
いくぞー」

ギルウアア！ と吠えながら初心者殺しが俺を叩き潰そうと前脚  
を振り上げながら飛びかかる。 俺はそれを体を横にして回避しつ  
つ軽やかに片手バツク転で横薙ぎの爪を避ける。

避けながら初心者殺しの手前にナイフを投げて爆破。 さつきより  
も強めに魔力を充填していたからさらに派手な爆発が起こった。  
破壊に秀でた魔力の塊なので当たれば被害は大きいのを見ただけで  
理解したのか？ この獣は？

すぐに飛び退いてまたもや無傷の初心者殺し。 しなやかに着地  
しつつ俺に躍り掛かる。

！  
どうやら、首を撥ねようとしてるようだが、俺かって死ぬ気はない  
！

「はっー！」

鋼の剣で凶爪を弾こうとすると、奴は前脚を引っ込めてそれを避ける。交錯する視線、やられた。フェイント使うのかよ!?

すぐに俺は前に向かってダイブから受け身取りながら空中前転で相手の位置を確認する。

ちらりと後ろを見ながら後脚を俺の背中の中にあつた位置に置いた。判断が遅れていたら、脊骨を引きずり出されてたなありや。

「オーケイ、お前が厄介なのはよく分かった。だが、タダでお前の胃袋に収まってやる道理はねえ!」

走り寄る獣に対して、俺は地に鋼の剣を突き刺して魔法を発動する。

「それらは穿つ槍! 《ストーン・ランサー》!」

大地に魔力を流しこむと、石の槍を生み出して剣山が針山のごとく俺を囲うように生える。初心者殺しの挙動に注意しながら、残りの投擲ナイフ2本を投げつけ、地に突き立て爆破する。

奴はそれをごとく躲す、そこまでは予測通り。

「切りきざめ! 《ヴィンド・スラッシュャー》!」

剣から手を離し、俺は風の魔法を発動。かまいたちが発生して飛びかかってきた初心者殺しの毛皮を切り裂くが大したダメージとはなっていないようだが、惹きつけるための罠……!」

「我が身は疾風が焰のごとく! 《エンハンスト・ツヴァイ》!」

ヴィンド・スラッシュャーの効果中に詠唱して身体を2段階目の強化を施す。

獣は嗤う。俺を仕留めたと気を緩めた。

俺はそれを嘲笑う。剣に触れて魔法を制御する。石槍を内側に反らせていく。初心者殺しの牙を爪を死ぬ気で、決死紙一重の回避、本当のギリギリで回避して着地前の初心者殺しの頭を思いっきり蹴りつけて跳躍し、石槍が曲がり足場と成ったところに降りる手前で「発破アツ!」

鋼の剣を爆破させた。地を縦に、大穴を穿つように指向性を持たせて。鋼の剣の破片は初心者殺しの四肢を満遍なく傷つけただろう。かなりの魔力を充填して置いたからな。

ギャオオンっ!?

唸り声、の後に地響き。地面がいきなり消し飛んで穴の底に叩きつけられたダメージは如何なるものか、想像に容易い。

「仕上がり上場！ 逃げるんだヨオオオオ！」

俺はそれを見届けると、飛んでいたハルナを捕まえて全力の逃走を開始した。

後ろの穴からは怒り狂う獣の咆哮が聞こえたが気にしない！

こうして命からがらアクセルの街に逃げ帰ったのだった。

● 「ふう、まあこんなもんか」

あの日から数日過ぎた今日、俺は今までの服、ジーンズと白のシャツをハルナの異空間に思い出の品としてしまわせてもらった。

俺の今の姿は、ハルナの力で作り出した武具と服で揃えているわけで。白のタンクトップにフード付きの赤いジャケットと赤いミニスカート、黒のオーバーニーソックスを履いている普段着だ。

鉄鉱石に魔力を溜め込んで加工した軽くて丈夫な魔法金属の胸当てを作り、白狼の毛皮からクローブを作ったり、マントを作ったりと色々作った。

リストにあげると

頭 疾風の羽根飾り

体 魔法金属の胸当て

右手 白狼の☒（魔法強化の魔符を編み込んだサポーター）

左手 白狼のグローブ（魔法金属の籠手）

腰 白狼の皮編みベルト（吊るす魔法金属の草摺りと矢筒（15本）、白い鞆と赤い鞆も引っ掛けていたり、ポーチも下げたりしている）

脚 レガース付き魔法金属の強化ブーツ

アクセサリー マギリング・マント

武器 右手 銀狼の剣

左手 黄昏の剣（白樺の魔法弓）

サブアーム 投擲ナイフ 8本

とまあ、こんなもんかな？　もちろんこれらは、ハルナにはお金を払って作ってもらった。軽くて丈夫な魔法金属を使っているから想像以上に軽い。ちなみに、あいつが納得する金額を貯めるのにソロでゴブリンの群れを、白狼の群れを討伐しまくってしんどかったがな。

装備調達の資金を短期間で貯めるのはキツかった。なおあの初心者殺しはかなりのダメージを負って、弱っていたところを討伐依頼を受けたとあるパーティーに討伐されたらしい。初心者殺しの討伐の手助けをしたと言うことでお礼を言われた。

とまあ、俺がここまでの用意をしているのにはきちんと理由がある。初心者殺しを倒したそのとあるパーティーのお誘いを受けたのだ。

ソロでもやっつけていける自信はあったが、初心者殺しから教わった……「舐めプダメ、ゼツタイ」と。

「やあ、ケンナシさん」

「おう、ミツルギ。一時のパーティーとは言え、よろしく頼むぜ」

「こちらこそよろしく頼むよ、僕たちだけでもよかったけど、魔法を使える仲間を探したいと思っていたからさ……もしも気に入ってくれたなら僕たちのパーティーに来て欲しいんだけど」

「そいつはお前らをもうちよつと知ってからだよ」

青い鎧を着込んだイケメンこと、茶髪のミツルギキョウヤと言うこの男は俺と同じような転生者だ。魔剣グラムをアクア様から賜り、この世界で生きている自称勇者なソードマスターだとか。

俺が転生者だと言うことも知った上でパーティーに誘ってくれていた。

これから一週間こいつらの世話になる。見極めさせてもらいますか、勇者の実力とやらを。

## 合流と冒険の準備を！

ミツルギ視点

それはある日のこと。

アクセルの街で「初心者殺しが近くにいるのではないか？」と言う噂の調査と、ひと月ほど前に星が落ちたと言う項目の予言師の依頼と言うことでかの街に王都から向かった。

着いた先で、予言師の依頼に関しては手詰まりだったけど、初心者殺しに関しての噂はビンゴだった。

すぐさま僕たちは初心者殺しの討伐に向かうことになったのだけど、その時に1人の少女とアクセルの街郊外ですれ違った。

頬を軽く斜めに切り裂かれたような傷に赤い髪をなびかせて、白いシャツにジーンズのことろ場違いな格好で全力疾走してくるその様は必死の表情で、並走するように飛翔する妖精を連れていた。

呼び止めようと思っただけどその速さは異常だった。まるで二倍速で動いているかのように。

「やあ、一体どうs「生き残れたああ！ ばんざーいッ！」

「待ってください、マスター!?!」 i——え?」

話しかけたが、思いつきりスルーされた!?

「キョウヤが無視された!?!」

声を揃えてクレメアとフィオが驚き、僕は呆然とその後ろ姿を見送る。

「まさか、初心者殺しから逃げてきたの？ たった1人で生き残ったの、あの子!?!」

「そんなー！ 初心者殺しから生き残るなんてかなりの手練れよね？ でも、なんであんなに必死に逃げるのかな……」

「と、とにかく2人とも。レベルも十分上がってきているし、なによ、君達が初心者殺しに後手に回ることはないだろう？ さ、先を急ごう」

そしてしばらく歩いた場所には穴からは這い出てくる大型のサーベルタイガーに似た魔物を見つけた。

「やっぱりいたか！　ファイオは援護を！クレメア、行くぞ！」  
「任せて、キョウヤ！」

魔剣グラムを抜き、初心者殺しに斬りかかる。　が、初心者殺しと言えど僕でも気を抜けない相手のハズだった。

しかし、グラムの一撃をろくに避けることもなく、頭蓋を斬り伏せられた初心者殺しはあっけなく討伐できた。

「なんでなこんなに簡単に討伐できたのかな……」

「うーん？　これって火傷と裂傷じゃない？」

「這い出してきた穴も結構深い」

もしかしてここまで初心者殺しを弱らせたのは、あの子がやったのだらうか？　アクセルに逃げ帰っていった彼女が。

「拍子抜けしたけど、討伐は出来たわけだし。　今日はもう宿に戻ろうか」

「ちよつといいかな、キョウヤ。　あの子がやったかもならあたしちよつと気になる」

クレメアが珍しく他の女子に興味を示していた。僕が他のパーティーの女性メンバーと話していると面白くなさそうな顔をするのに何故だろうか？　そんなクレメアがこんな話をするなんて本当に珍しい。

「初心者殺しをここまで追い詰めるなんて相当な手練れだと思うのよ」

「そこらには爆発跡だから爆発魔法。　こっから察するに、魔法職か、魔法を扱える職業かな？　それとそこらへんに飛び散ってる金属片は武器の破片かなあ？」

クレメアの言いたいこと、ファイオの推理を聞いて僕も彼女に興味湧いて来た。　僕はある子が何者なのかを知る必要がある知れない。

赤髪のあの少女を探そうと言う2人に同意して僕たちは街に帰還した。

そして翌日。

僕たち3人は手わけして調査を行なうついでに少女を探した。

王宮から承った依頼はこの地に落ちた〈星〉の調査。

抽象的で流れ星ごと隕石がここに落ちたならアクセルの街は消し飛んでいるはず。

なにせよ手がかりが全くない状態なので、予言師の依頼の方は難航していた。聞き込みをしようにも当ても何も無いから余計に困る。

アクセルの街には予言師がいない。駆け出しの街に予言師がいなくても仕方ないといえばそうかもしれないけど。

とまあ、たまたま落ち合った先の、3人で入った喫茶店に例の彼女はいた。

「いらつしやいませ！・ 3名様ですか？」

華やかな雰囲気のカウンターの格好をした赤髪青目の超絶な美少女だった。

「あ、ハイ」

「では、座席にご案内いたします！」

先導されて座席に着くと、彼女は注文が決まれば呼んでほしいと言い残してカウンターに引っ込んで行き、お冷やを3つとおしぼりをお盆に乗せて持ってきてくれた。

「この〈店のオススメ〉ってメニューを3つお願いするよ」

「はい！・ かしこまりました！」

紅茶とケーキのティーセットを頼み、彼女の運んで来たケーキと紅茶を楽しみながら、僕たちは情報を交換して話し込んでいた時にふと視線を感じて、その視線を追ってみるとそこにはあからさまに神々しい光を放つ妖精が飛んでいた。

「ふむふむ、その剣は〈魔剣グラム〉ですか？」

「え？ あ、ああ、そうだよ。 僕の自慢の魔剣さ」

「あ、あの時の妖精！」

「か、可愛いー……」

妖精は僕の目の前に降り立つと、じっと見つめて来た顔に何か付いていますか？

いや、この姿どこかで……あ、デート○ライブのヒロインの1人――長いこと読んでないから名前が思い出せない！



と、とにかくそのライトノベルのキャラに似ていた。

「ふむむ？ この魔剣、あなたを正式なマスターと認めていないようですね。 どうやら仮初めのマスターレベルですか」

「へ？ それってどういう」

「あ、失礼。 私の名前はハルナと申します。 星霊のハルナです！」

はぐらかされた！ はぐらかしたよね?! ってなんだか違う感じの……星霊ほしれい？

「星霊ってなに？」

クレメアが興味津々に聞くと、彼女はにこやかに対応してくれた。

「はい、星霊は管理を任された管轄の、数多の恒星を、その創生から消滅までを観測する者ですね。 創世神に作られたオリジン・フォーの1柱でもあります。 ちなみに私は宇宙創生から生きています。

だから、かなり長生きなので当然あなた達の年上ですからね！」

「なにその壮大な寿命!?!」

「いや、待って。 この子から感じる魔力トンデモナイ事になってるんだけど、ナニコレ一体!?!」

「お、落ち着くんだ二人とも！」

混乱する二人を宥めながら、僕はもう一度星霊を名乗るハルナさんを見つめてみた。

「ステータスはかなり高めですね、えっとあなたのお名前を聞いてもよろしいですか？」

「あ、僕かい？ 僕はミツルギキョウヤ。 この子はランサーのクレメアでこつちの子は盗賊のフィオだよ」

「ミツルギさんですね。 ひとつ依頼を受けてもらえませんか？ 場合によったら、グラムの性能を強化して差し上げますから」

「え、グラムの強化を？」

「その気になればラスト・ファンタズム神造兵装クラスの武器、道具を私は創れますから、その辺のノーブル・ファンタズム宝 具の調整をする事くらい簡単にできますよ？ あな

たを正式なマスターにとまではいけません、認めさせる事のアドバイスも致しましょう。 ね、悪い取引じゃないですよね？」

その条件ならと、僕たちはハルナさんの依頼を受ける事にしたその

内容を聞いて、僕たちが耳を疑ったわけなんだけど、それはまた別のお話。

☆ このすば!! ☆

俺はバイトを終えてから晩飯を食べようと冒険者ギルドに行く。昨日か一昨日かに勇者候補の魔剣使いがこの街にやってくるとう話も他の聞いていたがあまり気にしていなかった。

こちらこの前初心者殺しに殺されかけたわけだし、ちよつとの間冒険はやめておこうと思っていたのだが。

「と、言うわけでパーティーを組まないかい？」

「なんで俺なんだ？」

俺はソードマスターの転生者を名乗るミツルギキョウヤに、パーティーに誘われた。

「君がああ初心者殺しを弱らせたんだろう？ なら、君はダイヤの原石と言っても過言じゃないほどの実力を持つてる事になる。そんな優秀になる事が約束されたような人材を君は見逃せるかい？」

「いや、待て。俺を過大評価しないでほしい」

「謙虚なのは大事でいい事だね。 だけど、卑屈になるのは良くないよ、ハルヒトさん」

「卑屈になんかなってねえよ!! 自信くらいは持ち合わせてるよ!!」

このイケメン、俺をバカにしているのだろうか？ 軽く上から目線だし、そのくせに悪気は感じないから余計に腹がたつ。

女冒険者二人、ランサーと盗賊を連れているのだが、遠距離と近距離をこなせる冒険者の仲間を欲しているらしい。

で、この前の初心者殺しを討伐したのが彼らであり、あそこまで弱った初心者殺しを見るのは初めてだったらしい。 奴をあそこまで弱らせたその手腕をぜひうちのパーティーで発揮してくれないだろうか？ とミツルギは俺に持ちかけてきたのだ。

「ソロでやっていくのはさすがに世知辛い世界だよ？ レベリングを安全にしたいなら僕たちがサポートする。 僕らは未来のパーティーメンバー候補を見極められる。 どうか、お互いにwinwinでいい関係じゃないかな？」

「……そりゃそうだろうなあ。俺には得しかねえが、あんたらのいくクエストについて行って、ステータス差で足を引っ張りかねないぞ？」

「大丈夫さ。僕たちがキチンと護衛と君のレベルが上がりやすいようにサポートする。だから、一週間だけ臨時パーティーとしてうちに来ないかい？ これでも僕は、王都で名の通る冒険者だからね」

ミツルギは俺のレベルに合わせてクエストの予定を組むと言った。普通ならこの提案は超がつくほどの待遇なのだろうが……

「わかった、わかった。じゃあ、3日待つてくれるか？ こつちもいろいろ準備があるし、白シャツとジーンズじゃあんたらの冒険に行ける自信がねえ」

「わかった。じゃあ、3日後にここでまた会おう」

そう言うミツルギに、俺はソードマスター様の一行についていくことになったわけだ。

今現在、俺のレベルは5なんだが、本当にこいつらについて行けるのか、不安だ。

ちなみに取ったスキルは

双剣、弓、片手剣、狙撃、中級魔法、軽業、中級強化魔法、武器魔法付与、爆破魔法付与、筋力強化、体力強化をとってある。

ステータスは

筋力 13 体力 20 知力50 魔力 99+ 敏捷41  
器用36 幸運 30 となっていた。

まあ、頑張りますか

## 悪魔との会敵を！

ミツルギ御一行とともにアクセルの街を出て2日目。

俺たちは目的の場所である火山エリアの中継の街、アスナイによっていた。

アスナイ……明日がないとも読めるこの街の名前に俺は若干引いたが。で、俺たちはアスナイの酒場にて夕食をとっていた。

「たかだか2日でレベル25になるとか思ってもみなかったよ。一昨日までレベル15だったのに」

「はは、僕のレベルも1つ上がったよ。ここら辺のモンスターの質が良すぎるんだろうね」

「キョウヤ、見て！ 私レベル上がったわ」

「あたしの槍さばきも上手くなったでしょう？」

キョウヤが相槌を返し、フィオがキョウヤに自身のレベルを見せてクレメアは槍さばきを自慢する。

アクセル付近もそこそこ強いモンスターがいると聞いていたが、一撃熊とマンティコアの縄張り争いにかち合って襲われた時に爆撃矢で迎撃、一撃熊の目を射ぬいたついでに起爆して頭部吹き飛ばして斃し、レベルが4上昇。

マンティコアの蝙蝠の羽付け根あたりに投擲ナイフを投げつつ起爆して羽をへし折り、撃墜。ヘイト集めんのも嫌だったので、飛行するモンスターが総じて弱い火の魔法剣と氷の魔法剣のエンチャントを施して落下ダメージの抜けきっていなかったマンティコアに突撃。

首元執拗に狙い、氷属性付与の黄昏の剣を首に突き刺して爆破付与の爆破。首と胴を別れさせてやり倒して、レベルが5上昇。

ちなみに、黄昏の剣は魔法耐性に強いので、爆破に使っても形が残っていて、刀身に軽くヒビが入る程度のダメージだった。

鞘に収めておけば勝手に周囲の魔力か俺の魔力を吸って自己修復する優れものだ。

ちなみに、この剣はハルナに貰ったものだけだな。

「ゴブリンの群れやらコボルトの群れに遭遇すればそりやレベルも上がるわな」

「一体あの5日で君に何があったんだい。魔物相手に躊躇いが無いと言うか、絶対倒す意思と言うか」

「なーに、3日で白狼倒しまくって勘を鍛えたんだよ。あと、殺らなきゃ殺られる世界だし」

魔物がどう動くのかを多角的に見て観察した上で、対策を練りつつどう動けば優位な立ち回りをできるかを考える努力をしているわけだ。

ちなみにだが、装備作成のためにアクセル付近の白狼を討伐もしくは追い払いまくったので、レベルを3日で15にした。

コツさえつかめば爆破で追っ払うのも、討伐するのも楽だった……初心者殺しと対峙して生き残ってる時点で俺もそこそこ運がいいみたいだ。慢心だけはもうしたくないから、作戦に隙がないかとかは入念にチェックするようにしているが。

「やっぱり、初心者殺しを討伐寸前まで痛めつけた戦術眼はまぐれじゃなかったんだね」

「いや、俺だけじゃ死んでた。間違いなくハルナが近くにいてくれたからとも言える」

ハルナの忠告に耳を傾けていれば、初心者殺しとの遭遇の危険性はなかったはずだ。

「あの時もハルナの一喝がなかったら、身動き取れぬまま初心者殺しの奴に首なり足なり折られて髑髏殺しにされていただろうさ」

俺はあの時の、初心者殺しとの殺り取りの顛末をキョウヤたちに話した。生きるか死ぬかのやり取りのだったし。

「な、え……そんな過酷な状況で生き残れたのかい!？」

「おう、そだぞ? なんか問題でもあるのか?」

「ハルヒちゃんって意外と大物?」

「あたしだと諦めかねない状況だわ!？」

三者三様で驚くミツルギ御一行……当然の反応だよな。

「初心者殺しは一刀で斬り伏せていたから、そこまで手強い相手とは

思わなかった」

「よし、グラムじゃなくて鉄の剣で初心者殺しと殺りとりしてみようか！」

「ウエイトプリーズッ！ 君の話を聞くと自信がなくなったから！」

そんな漫才以下の茶番はともかく、俺たちは本来の目的である、火山で何をするのかのうち合わせをする。

今回の火山に行く理由は鉱石の採取、それからこれから秋に変わるため生態系に変化の出る季節という事で、竜種の調査だ。

「この季節に火山にいる竜種と言えば、ファイヤードラゴン、ブレイズワイバーン、エンシェントドラゴンだね。 僕もドラゴン退治を何度かしているから、その種類のドラゴンは何体か討伐してる」

「さすが竜殺しの魔剣グラムだな」

「そうじゃないわ、ハルヒちゃん！ キョウヤもすごいのよ！」

「まあまあ、クレメア。 落ち着いて」

グラムの竜殺しでドラゴン倒したんじゃないやーねーのか？ と俺は茶々を入れた。

「でも、まあとんだイレギュラーな存在もいる——骸竜が出たとか言う噂も聞いている」

「骸竜？」

「鉱物を食べる竜で、正式な名称はスカルヘッド・ドラゴンだよ。 頭部に竜の髑髏を被ったような模様が特徴があるよ。 竜のランクとしては下位だけどね」

「それでも間違いなく竜種ドラゴン・ウオードの特性、 龍 壁ドラゴン・ウオードもあるんだっけ？」

俺は知識を交換する。 ちなみにハルナはたらふく食べて俺の頭の上で仰向けに張り付くような体勢で寝ている——お前はリスザルか。

龍 壁ドラゴン・ウオード。 それは、下位ドラゴンであっても最強生命体たる格を与える能力である。

竜種はもともと下位だろうが膨大な魔力をその身に宿しているが、この龍壁はその膨大な魔力を障壁に変換、常時展開してその身の硬さを増している障壁なんだとか。

要するに、ドラゴンを狩るには龍殺しドラゴンキラーの属性で龍壁を破壊、貫通させないといけないのだ。

もしくは大質量の魔力で龍壁ごと潰すかの二択だ。

龍壁の魔法耐性はセイバークラスの対魔力相当（あくまでもミツルギの話）なんだとか。

魔法にも、物理にも強いトンデモ生命体。それがこの世界の竜種なのだ。

「まあ、ドラゴンに遭遇してもすぐに撤退するよ。さて、今回の納品指定鉱物はアダマンタイト。希少鉱石に違いはないけど、この前の調査で大鉱脈が発見されたので、国有の鉱脈になってる。で、今回の依頼は王室からの直々のものなので、ある一定量以下なら冒険者がその一部をもらっても構わないことになっているよ」

「なるほどな……火山の素材クエストG級ってわけか」

某モンハンのフィールドも鉱物の宝庫だったのを思い出す。御守りの発掘にも精を出してたっけなあ。

「じーきゆう？ ナニソレ」

「あ、なんでもないぞ」

「さて、明日は火山に出発する！ 各々準備と補給をキチンと済ませしておくように！ じゃあ解散！」

一応リーダーのキョウヤが解散の号令を出したので、俺たちは明日に備えて準備と物資の補給を終わらせて3日目の夜は暮れていった。

☆ このすば！！ ☆

「ハルヒちゃん！ そっちの奴落として！」

「任せろ。吹っ飛べ！」

フィオの要請で俺が狙撃した昆虫モンスターへドレイクビーの群れのご真ん中で、爆破付与した矢弾が無属性魔力を撒き散らしながら爆発して群れを吹き飛ばした。

ドレイクビーは大型化した鎌のような前脚を持つ巨大な肉食の昆虫だ。本来なら1匹で行動することが多いが、近くに巣があるようで複数体の群れが行動していた。

バラバラと昆虫の足やら内臓が焼き滅ぼされて他にぼとぼと落

ちていく様はS A N値チエツクのダイスを振りたくなるほどの様だった。

まあ、ゲームじゃないんで現実逃避はできません！

虫の群れはともかく、俺たちは火山内には立ち入らず、周辺の探索を行った。アダマタイトの鉱脈は火山の外周にあるのだとか。

「へ遠視でこの辺りを見て見たんですけど、どうやら一悶着ありそうですね？」

呑気なハルナの声に俺は過剰反応しそうな心臓の早鐘を抑える。

「一悶着？ なんだい、それは」

「あ、みなさん伏せてくださいねー」

一同が『は？』と言う顔になったら突如として遠方から炎の塊が――  
―つてえ!?!

俺の頭から飛び立ち、手を突き出してハルナは言葉を紡ぐ。

「曲がりに湾まがれ、次元よ曲がれ。 展開、次元歪曲フィールド」

ハルナのつぶやきの直後に空間が捻れる曲がる。 歪な湾曲した結界にその塊は直撃して閃光と轟音が響き渡った。

閃光の規模から見て、俺たちが立っていた場所の地面が消し飛ぶくらいの威力じゃないか、今のは!?!

「な、なななな!?!」

「なんなのよ、今のはああ!?!」

フィオかビビリ、言葉にできないことを代弁するようにクレメアか絶叫した。

爆破魔法使うせいで、爆弾魔扱いの魔法剣士になりつつあるから、俺ははそこまでビビってないんだからね!?!

「今のは一体?」

呆然と俺が言うとハルナがその疑問に伝えてくれた。

「エンシエントドラゴンの老生体と強力な個体の、若いエンシエントドラゴンが縄張り争いをしてるみたいですよ? ここだとまた流れ火焰ブレスが飛んできますから、洞窟に避難しましょうか」

ハルナの提案に俺たちは素直に従い、洞窟に逃げ込んだ。

「それにしても、エンシエントドラゴンの老生体か。 彼らは年を重



ねるごとに魔力が莫大なものになるとも聞くからさすがにグラムでも退治できなさそうだ」

「ちなみに、ドラゴンのブレスは全てを燃やし尽くす龍属性の魔力です。あの場で私が防がなかったら皆さんが問答無用で消し炭、灰燼に帰す惨状になってたかもです」

さらっと言うハルナの言葉に俺たちは青い顔になる。

「やっぱり火山も世知辛いな！　これだからドラゴンとか嫌いなんだよ！　——もしかして、あの時は走っても逃げられなかったのか？」

「私が次元歪曲させて防いだのにもきちんと理由があります。ドラゴンのブレスは人々の使う魔法をも焼き切りますので、結界や加護程度じゃ防げません。マスターの言う通り、逃げたとしても理不尽すぎるその破壊力で周囲もろとも吹き飛ばされてたに違いありません。私が防ぐしかなかったと」

……アクセルに帰りたい。　そう思った俺は悪くないだろう

「この辺にもアダマンタイトの鉱脈はあるはずだから、採取を済ませて街に戻ろうか。　さすがにドラゴン2体を相手取る勇氣は僕にもないよ」

ミツルギは苦笑い（引き攣った無理な笑顔）しながら提案する。　それに俺たちは乗った。

そこで暫くして、洞窟の奥の方にてアダマンタイトの鉱脈を見つけた俺たちはツルハシで壁を叩き、指定量の鉱石を取ると、すぐにきた道を引き返す。

が、フィオがそれに待ったをかけた。

「敵探知に反応があるよ！」

「サイズは？」

「かーなーり、大きい……いやまって。　私たちの上にいるんですけど!?!」

「！　みんな、散開するんだ！」

キョウヤの指示に従い、俺たちは散った。

直後に轟音。　落ちてきたのは、がっちりとした四肢を持つドラゴンだった。

I G A A A A ツ!!

咆哮が洞窟に轟く、俺たちの前に立ちふさがるのは骸龍、スカルヘツ  
ド・ドラゴンだった。

この暴龍からの逃走を！

「退路を断たれた!？」

「みんな、注意するように！ 指示を出す余裕はなさそうだから、隙を見て撤退できるようにしておいてほしい！」

「りょーかい、キョウヤ！」

「わーったよ——チクシヨウ、最近ろくな目に合わねえよ!? みんな、エンチャントくわえとくぞぞ！」

俺は剣を抜くと、氷の魔法剣と風の魔法剣を発動しつつ、他の面々の武器にも魔法剣を与えた。 適当に光と闇、クレメアキョウヤ、ファイオ 土に与えておいた。

「どの属性が弱点かはわからん、ハルナ。 奴の情報は!？」

「現在、該当データがないんだよマスター！ アレのデータが無いから、解析中！ ちょっと持ちこたえて！」

「データが無いだ!？」

ハルナが言うにはあのドラゴンは突然変異体の属性らしく、該当データが無いと言うのだ。

星のmanaからデータを取っているハルナの言うことは正しい情報だ。

「仕方ねえ、行くぞー！」

ハルナに解析を任せると、俺は暴れるドラゴンに攻撃を仕掛けた。

右手の逆袈裟斬りから切つけるが弾かれ、反動を利用して上段から左手の氷の剣を叩きつける——が、ギイイッンツ！と当たり前のように弾かれた。

振り回される尻尾に気がついてその場でしゃがんで回避、バックステップで距離を取りながら、キョウヤ、クレメアと変わる。

俺は剣を鞘に収めて投擲ナイフを二本手に取るとに魔力を充填、飽和ギリギリまで魔力を溜め込んだナイフをドラゴンの鼻っ面に投げつけた。

すぽっと1つが龍の鼻の穴に飛び込んでmanaが溢れ出て弾け、2つ目のナイフが仰け反って開いた口の中に飛び込み内部で爆発した。

体内粘膜内で、無属性の魔力の拡散は流石に効いたようで

G I G A A A ツ!!

直後に怒りの咆哮をあげていた。骸龍の目の周りが赤く発光して四肢からも同じような光が見える。

「頭吹き飛ばすつもりだったが、どんだけタフなんだよあん畜生め――よく見たら、ティガ○ツクスに似てるなおい!?!」

「いや、メタい事言ってる場合じゃ無い!」

ミツルギのツツコミは、怒り狂った骸龍の咆哮にかき消され、奴っさんはあちこちに走り回り突進を繰り返す。

見た感じ、黒○龍だよ!?!

「解析完了!　ってこのスカルヘッド・ドラゴン……上位個体ですよ!?!　これはまずい、今のミツルギくんとグラムじゃあの鱗は切れませんよ!?!　あの鱗……アダマタイトの成分が出てます!」

「んだと!?!」

ハルナの叫び声を聞き、グラムを突き立てようと頑張っていたキョウヤもなんだってと言わんばかりの驚きっぷりだった。

確かに、先程から闇の魔法剣付与のグラムを火花を散らしながらはじきかえすあの鱗は硬すぎる。

クレメアもフィオも頑張っちゃいるが……このままじゃジリ貧だ!　

「龍壁を無力化するには龍殺しが必要……キョウヤのグラムならなんとかできるのか!?!」

「わからない!　グラムはまだ僕を仮初めの所有者としてしか見ていないんだ!」

「なんだと!?!」

つまり、グラムは本来の持ち主であるジグルド以外には使われたく無いってのか!?!

「ええい、四の五も言つてられねえ!　ちよつとばかしか奴を抑えてくれ!　1分でもいい!」

「!　わかった、2人とも時間を稼ぐよ!」

「わかった、任せなさい!」

「頼みますよ、ハルヒちゃん!」

俺は中級魔法、アイクシル・ランサーを放ち、ドラゴンを牽制しつつ、ナイフを手に取り魔力を充填。

俺は体にエンハンスド・ツヴァイを与えて身体能力を二倍にするとドラゴンの動向を観察する。

動き方の擦り合わせを慎重に……行動パターンを頭に叩き込み、戦術を組み立てる。

即興の罠、落とし穴は作れる。たとえナイフが数本でもやってやる！

そこに行くまでに導く誘導の罠と、挑発。ヘイト管理をしくじれば間違いない全滅する。

リスキーだが、俺に見えたのは1つの作戦しかなかった。

「よし。みんな、あとは俺に任せてくれ！」

「無茶はしないでくれよ！ ケンナシくん！」

俺はナイフ足元に4本突き刺してその場を離れる。

並列思考のスキルを用いて演算。右手に魔力球を浮遊させるとそのなかでアイクシル・ランサーとヴィンド・スラッシュャー、フレイム・ブラスターを同時に発動させる。

高速詠唱のスキルで詠唱は省けるので無し。そして、左手に弓を持った。

「ヘトライ・バースト〜オオオッ！」

俺は形状崩壊を始めた魔力球を引き絞り、トライ・バースト魔導矢弾を弓に、魔力で編んだ弦につがえて放った。

これは魔導矢弾作成のスキルで作り出せる魔弾で、魔導矢弾作成は魔法剣から派生するスキルの一種だ。

魔法を合成して魔法弾を作れるスキルだ。

トライ・バーストは氷、風、火を合わせて生み出される魔弾……その性能は辛い水蒸気爆発並みだ。

そのため、避けもせず当たった骸龍はと言うと強力な爆薬で顔を吹き飛ばされたようにダメージを負っていた

G A A A A !?

怯んだ骸龍に対して俺は弓を放って氷の魔法剣を付与した剣の柄

を握り、白刃を鞘から疾らせた。

疾る剣から空気中の水蒸気が固まった三日月塊……氷の斬撃が飛翔した。

斬撃は龍の顔に儂い音を響かせて砕け散りながら命中、絶対零下の温度は龍の目を、その粘膜を氷結させて奴の目を一時的に失明させた俺は挑発するように効かない中級魔法を雨あられと撃ち込こむ。

魔力残量は気にしない、疲労もないし、まだまだ撃ち込める。

龍壁に阻まれて有効打にならないチクチクと刺すように魔法を撃ち込んでみるがダメージは皆無みたいだ。

しばらくすると、骸龍は視力を回復させ、俺を睨めつけるように直視して、唸るそこにアイクシル・ランサーを撃ち込んで、挑発する。

「おら、こつちだ」

G A A A A A A A A A a a a !!

直後に怒り狂う骸龍、それを俺は冷静に見つめる。

地を蹴り、爪を振り上げて飛びかかってきた骸龍の手前には、着地予測地点には俺の張った罫が。

「じゃあな、デカブツ」

その声とともにナイフを起爆した。縦に指向性を待たせて穴が掘られた。

そして骸龍は底に落ちて行くと、そこに俺は掘った穴の淵にナイフを投げて二本突き立てると爆破して岩、土を穴に降らせて奴さんを生き埋めにしてやった。

「埋めたのかい……？」

ミツルギの問いかけに俺は弓を回収して折りたたむと、矢筒に差し込んで固定しながら答える。

「奴がこの洞窟の天井を登ってたのを見てな……埋める方がいいと思っただのさ。まあ、穴を掘れるドラゴンだとかなら自力で出てくるだろうし」

「じゃあ、逃げるが」

「勝ちよね！」

フィオとクレメアの意見をミツルギはわかったと受け入れて俺た

ちは逃走した——それはもう、見事にな。

それからしばらく、洞窟を抜けて火山地帯を走り抜いた俺たちは振り返った。

「やれやれ、なんとか事なきを得たとも言えるね」

「最後のやつすごかったよ、ハルヒちゃん！」

「うん、真面目に1人であんなことするなんて」

逃げ延びた俺は、3人に感謝なのか嫉妬なのかわからない感情を感じた。

ハルナに遠視を頼むと、快く引き受けてくれた。

「エンシェントドラゴン達はもういないようですね。遠視で探して

も見えませんでした……あ」

「なんだ、その「あ」っていうのは!?!」

直後に、地震のような揺れとともに、大地がめくられて黒い影が飛び出した。

G A A A A A A A A A a a a !!

天を衝く咆哮、発光した目の周り、赤い四肢……激昂した黒き暴龍が、そこにいた。

威嚇のつもりか、骸龍は吠え唸っていた。

「やっぱり穴掘れんのかよこいつ!?!」

「ぎゃー!?!」

クレメアとフィオがハモリながら悲鳴をあげる。

「やっぱり、アダマントタイトを持ってると狙われるみたいだなー!」

「アダマントタイトのコーティングされた鱗、骸龍の主食は鉱石……あり得くないね!」

「つまり、アスナイまで逃げてもこいつは追ってくるぞ、間違いなく」

「なら、ここで……倒すしかない」

ミツルギは覚悟を決めたのか剣を抜く。

「みんなは先に逃げてくれないか? ここは僕1人で食い止めるか—

—「ふざけんじゃねえよ、このバカが」……え?」

俺も剣を抜き、左手に取り出した弓を持つ。矢はあと7本ある。

「お前だけ残して俺たちが逃げられるわけねえだろうが。だいたい、

クレメアとフィオが黙っちゃいねえぞ、ミツルギ」

「そうよ！ 私達だって戦えるんだから！」

「キョウヤが死んであたしたちが生き残るのなんて絶対ナンセンスなんだからあああ！」

「みんな……ありがとう！」

俺たちは各々の得物を構えた。

「さあこのドラゴンを——」

「「狩るよ！」」

さあ、狩の時間だ！



暴龍と決着を！　そして新たな始まりを！

黄昏に染まる地平、空は夕闇に染まりつつあった。

四肢を突っ張り、天に頭擡げる暴龍は爆音と遜色なき咆哮をあたりに轟かせる。

GURUGAAAッ!!

「日が沈むまでに決着をつけよう！」

「了解、来るぞ！」

俺の言葉にミツルギたちが反応して、散会する。

直後にドラゴンが突進、ヘイトは俺に向けられているようだ。

4対1。数字にすれば大きな差だが、結局のところそれは意味がない——俺たちと龍の、その戦力差は10対4とも言えるのだからな。

「ミツルギ、お前は魔剣に問いかけろ！　お前の意思を組んでくれりやグラムも手を貸してくれるだろうさ！」

「やってみる！　2人はスカルヘッド・ドラゴンの足止めを！　ケンナシさんはどうす——！」

「この状態だ！　お互いに、この局面で生き残れるように努力しようぜっ！」

ミツルギに一方的な返事を返しながら俺は、矢に魔力を込めておく。

スカルヘッド・ドラゴン

骸　龍の攻撃範囲に注意をしながら、バックステップで距離を取り、大木のような尻尾、鞭のようにしなるそれを避ける。

クレメア、フィオは龍の動きをよく見て躲している。

へみなさんに私のパスをつなぎました、マスター！　瞬間反射で思念会話できるので、活用してください！

『ナイスだ、ハルナ！　みんな、ハルナのアドバイスを聞いてくれ。

活路を見出すヒントになるかもしれない！』

俺はハルナが張ってくれた思念会話経路でコイツが解析した今戦っているこのドラゴンが持つ潜在性、行動とその予備動作を伝えた。

すると、被弾ギリギリの攻防をしていた俺たちは余裕を持ってドラゴンの攻撃を避けられるようになってきていた。

「こっちの動きに無駄がなくなつて、余裕が生まれたからか？ 冷静に判断ができるぞ」

「確かに、あそこまで正確な情報だと避けることが難しく無くなるね」

右手の剣でドラゴンの振り下ろされる爪を受け流して躲し、遅れて来る尻尾を前転回避で避けながら距離を取るとそこに入れ違うようにミツルギのグラムが空を切り裂き、龍の皮膚を切り裂いた。

ここ数分の攻防のうちで、龍ドラゴン・ウオード壁にも綻びが出てきたのか、あちこちの鱗が剥がれて皮膚が見えるようになっていた。

龍壁の弱点は、執拗な攻撃を受けると徐々にその堅牢さが損なわれていくことだろう。

底なしの魔力とはいえ、媒体である龍鱗がなけりや龍壁は有効にならないと、ハルナの言う通りだった。

龍鱗は魔力を注ぐと龍壁を発生させれる。なので、盾の素材に使えて、龍属性の魔力を唯一弾ける最高級の性能を持つ盾の作成に使われる。

龍鱗を龍の血とともに鉄などの金属、合金に溶け込ませればドラゴンキラーメタルとなり、龍ドラゴンスレイヤー殺しの武器を作成できるわけだ。

なお、ミツルギのグラムに関しては神の作り出した神造兵装で、神器な訳だが。

夕暮れは迫り、もう時間がない。

「タイムリミットも近いか……仕留めれるのか」

キョウヤの弱音を聞いた俺は、念話で話しかける。

『ミツルギ！ 一か八か、やりてえことがある。ハルナ、アレはできたか？』

『もちろん、加工完了です！』

だんだんとこちらのスタミナも無くなっている、ジリ貧になりかねないから打って出ることにした。

『ミツルギ、タイミングを合わせて俺をグラムに乗つけて空にカチ上げて欲しい』

『何する気なの!?!』

『空襲するつもりですか?』

『フィオ、正解だ。 「奴を殺せる」それができる 矢をハルナに造ってもらった』

俺はミツルギたちに作戦の詳細を話す。 このやり取りの中でも  
暴れまわるドラゴンの攻撃を避けているわけだが。

龍の爪を避けて俺は奴の懐に潜り込んで鱗の無い皮膚を氷の魔法  
剣の効果の残る銀狼の剣で切り裂いた。

鱗に対して肉質は柔らかいよう、俺は怯んだドラゴンの腹に振り下  
ろし、横薙ぎで十字に切り裂いてバックステップ。 魔力を収束させ  
て氷の鏃を生み出すと左手の弓に番えて魔力の弦を引き、鏃をその傷  
に向けて放つ。

G A A A A A A A A A ツ!!?

肉が凍りつき、激痛が龍を襲う。 ヘイトが俺に向けられて龍の目  
に憤怒が灯り、咆哮している隙に俺はミツルギのグラムに乗る。

「行くよ、ケンナシさん!」

「おう、頼むぜ!」

ミツルギがグラムを振り抜き、その上の俺はカタパルトが如く跳ん  
だ。

左手の弓に〈魔法剣 風〉を付与。 飛びながら、架空に手をかざ  
してハルナに頼む。

「ハルナ、頼む!」

「工程完了! 〈アダマンタイトの矢〉、完成です!」

ハルナに造ってもらったのは、あの骸龍の鱗を素材に、アダマンタ  
イトを掘った時に出た鉄鉱石を合わせて作り出した全てが金属で構  
成された矢だ。

全体の重さは4キロはあろう鏃の主成分はアダマンタイト。 こ  
れなら貫ける!

俺は自由落下しながらハルナの作り出した矢を番え引きしぼり、魔  
力を注ぐ。 〈魔法剣 雷〉付与!

「往生しやがれええええ!」

魔法剣 風 の効果で弓から射出されるものには〈加速〉が与えら

れている。加速付与によって初速98m/sの矢が飛んだ。その速度、新幹線より少し早いくらいだ。

放たれた矢はこちらを見上げる骸龍の眉間、頭蓋をぶち抜き貫いた。

そして魔法剣の魔力が弾けて雷に、放電される。

GAOONNE……ツ!?

骸龍の過電流が脳を焼き、その思考能力を殺す。だがまだ奴の心臓は動いているであろうその肉体、本能は生きている……もちろんそれで終わらないとは読んでいた!

「今だ、キョウヤアアアツ!」

「任せて! (信頼してくれる人がいる。そして僕には仲間がいる! だから、その人たちに報いたいから……力を貸してくれ、グラムよ!)  
これで終わりだああツ!!」

ミツルギが剣を構える。その剣からは暖かな波動が放たれ、神秘が漏れ出していた。

「トゥルル・オブ・グラム超克の龍断つ魔剣ツ!!」

思わず「やっぱり型月要素混じってるよなこの世界」と言っってしまったが誰にもきかれてないだろう。

ミツルギがグラムを覚醒させ、瀕死の骸龍、その心臓に魔剣を突き立てると龍の口、鼻、目から、身体中から光が溢れて弾け、夕闇の空に一筋の光の柱が輝いた。

☆ このすば!! ☆

朝が来たと思ったら昼前だった。洗面所の鏡を見ながら髪を梳かして跳ね放題の寝癖を直し、顔を洗い歯を磨く。ハルナに教わった薄い化粧をして身支度を整えると、金属鎧以外の服に腰のベルトに愛剣二本を佩く。鎧とかはハルナの宝物庫ストレージに保管させてもらった。

昨日のドラゴンとのやり取りを辛くも生き残れた俺は宿のチェックアウトを済ませてアスナイのギルド、酒場でキョウヤたちと落ち合う約束をしていたので、そこに向かった。

「やあ、よく眠れたかい?」

「ああ、泥のように眠ったら昼近くになってびっくりしたぞ」

「ハルヒもお寝坊さんだね。あたしも人のこと言えないけど」

「私たちも起きたのが先ほどでしたから」

酒場で朝昼兼の飯を食べながらこれからの予定を立てる。

丸2日をかけてアクセルに戻るわけなので明日にはこの街を出ることになった。

「それにしても、スカルヘッド・ドラゴンの遺骸をこの街に運ぶことになるとは思わなかったね」

「ハルナが運んでくれたから良かったが」

骸龍の身体は20トン近くあるはずだったが、ハルナはお得意の重力魔法でその重さを100分の1にして片手で軽々運んでいたが、それでも200キロ近くの巨体だったと思うが。

運ばれて来た骸龍の遺骸はギルドに収め、額が額だけにすぐにエリスが用意できるわけではないようで、後日その報酬が支払われるとのこと。

希少種の骸龍は今まで確認されていなかったため大発見。珍しいものだったので破格の報酬が支払われるのだとか。

ギルドの人の言う話じゃ5億エリスになるとの話だ。

「しかし、にわか成金とはまさにこのことだよな……」

「そうだね。報酬は4分割で良かったのかい、本当に？」

「ああ、それで構わない均等にな」

後腐れは持ちたくないの、均等にしてほしいと俺がミツルギに頼んだ。

「さて、僕たちの冒険も残すところ、あと2日だね。これまで、どうだった？ ハルヒトは」

「いいパーティーだと思うぜ。けどまだ俺はキョウヤたちについていけない。今回はうまく言ったけど、今度はどうなるか、わからなねえしな」

俺はキョウヤに改めて一緒には行けない、と伝えた。

「そうか。でも、王都にはいつか来てくれないか？ 君のことは王室に話さないとならないから。僕がここにいる理由を知ってくれていると思うけど」

「もちろん、わかっている。いつか俺がお前たちに追いつける日が来たなら、共に戦ってもいいと思ってる。だからその日まで待つてくれないか?」

俺の提案にキョウヤはわかったと首を縦に振ってくれた。

「なら、王室には君のことを星霊の巫女が現れたとだけ伝えておくよ。

まだ時ではないと君からの伝言があったと伝えておけば国王様もわかってくださるはずだ」

「わかった。その辺はキョウヤに任せるよ」

こうして、俺は改めて断りを入れて、アクセルへの帰路に出発した。



そしてあれから一ヶ月が過ぎて空は高くなり、秋も過ぎ去ろうとしている今日、あの人に出会った。

「そのあなた、私たちにお金を恵んでください!」

「なんでここにいるんだ、アクア様?」

「ほえ?」

青い髪に青い瞳を持つ俺を導いた彼女女神がそこにいたのだから。

## 主人公設定

主人公 ケンナシ ハルヒト (剣無 春人)

性別 女 (精神♂)

職業 魔法剣士

経歴

猟奇殺人犯から元カノを護った末に人生を終えた男子高校生だった少女。

女神アクアより賜った「特典」のデメリットの因果逆転による呪いで男から反転して性別が女になってしまった経緯を持つ転生者。

ステータスにもバグが生じているために物理型の潜在ステータスが知識型にひっくり返っている。

実はそのほかにも様々と反転している。

容姿

ミス・ブルーこと蒼崎青子に似ていて、赤髪青目で端正な顔立ちに出るところはきちんと出ているナイスバディーの持ち主である。

性格

平凡を愛する少女で、できるだけ楽をしたいが冒険もしたいと言う歪んだ行動理念を持つ変人。

「紅魔族」のゆんゆんに対しては不憫だと思う一方で、「普通の紅魔族」にも柔軟に対応することができる。

コレは二ヶ月この異世界で過ごした中で、濃厚で色々な出会いを経験して人としても成長しているためにある。

ちなみに、男だった前世の影響で女としてはだらしなく、色々とガードが緩い少女になってしまっている。

そのためか、カズマにはある一件以来「処女ビッチ」のあだ名をつけられている。

カズマ：いや、カズマさんの理性は持つのだろうか (主に精神BLに)

ステータス：1章開始時点

レベル40 (実際のレベルは80超えている)

筋力	63
体力	84
知力	112
魔力	999 (カンスト、バグ表記)
敏捷	140
器用	115
幸運	100 (カンスト)
習得スキル	

弓 (派生に狙撃)

片手剣 (派生に双剣)

中級魔法 (派生に中級強化魔法)

簡易魔法説明

フレイム：火の魔力を撃ち出す魔法

フレイム・ブラスター：ハルヒトの使える魔法で最高の威力を持つ

直線照射型魔法。ハルヒト命名は火炎放射器。

アイクシル：氷の小さな氷柱を撃ち出す魔法

アイクシル・ランサー：立派な長大な馬上で使う突撃槍ランスに匹敵する

大きさの氷柱を撃ち出す魔法。着弾箇所を凍らせて足場を悪くす

る副次効果がある。

ウインドノック：空圧式打撃魔法。ピンポイントで放てば大木

にも穴を開ける打撃力を出せるが、それをするためには高い器用のス

テータスが必要。

ウインド・スラッシュャー：風を圧縮して鎌鼬を作り出し、対象の魔

物を切り裂く魔法。鉄は切れないがイノシシの皮程度なら軽々切

り刻む威力を持つ。

ロックエッジ：鋭い石刃を生み出し、撃ち出す魔法。

ストーンランサー：対象の足元から石刃の槍を作り出して串刺し

にする。自分を中心に範囲設定すると、対集団でも使える。

エンハンスド：初段の身体強化魔法。

エンハンスド・ツヴァイ：二段階目の身体強化魔法。自身の身体

能力を倍加する効果を持つ。



武器魔法付与（魔法剣と武器爆破魔法付与

魔法剣：魔法「剣」とは銘打っているが、武器であれば何にでも追加属性効果を付与できる万能魔法。

簡易魔法剣説明

魔法剣・火：炎熱を刀身に纏わせて高温で焼き切る効果を持つ。

また、魔力を燃焼させ斬撃を飛ばすことも可能。

魔法剣・氷：全てを凍てつくす冷気を刀身に纏わせて対象を氷結させながら砕き散らす効果で防御弱体化のデバフを与えることが可能。

魔法剣・風：刀身に風を纏わせて対象を削るか切り裂くかを使い分けられる効果を持つ。効果時間を犠牲にして瞬間的に射程を伸ばせる。

魔法剣・地：刀身の耐久性を底上げしつつ、打撃ダメージを重点に置いた魔法剣。「重みで物を叩き切る」に特化している。追加効果として毒状態にすることもある。

魔法剣・光：遠距離攻撃特化の魔法剣。武器を振るう度に光弾を放つことが可能で、対象以外の物体を透過させることもできる。

魔法剣・闇：斬、壊属性を活性化させて、武器に凶刃の効果を与える。冥府の魔力でもある闇だが実はアンデット、悪魔に対して特攻を持つ。

武器爆破魔法説明

武器に魔力を宿し、魔力暴走を引き起こすことで無属性の爆破ダメージを与える付与魔法。

魔力の規模に比例して威力が増す効果を持ち、金属製の武器に付与して爆破すれば地雷のように使うことも可能。

基本的に武器を犠牲にして発動するタイプの魔法ゆえに使い手は少ない、武器を破壊することは非効率的であるためだとか。

現地では爆裂魔法に次ぐネタ魔法として認可されている。

自動スキル

筋力強化：戦闘興奮時、筋力ステータスを5%強化する自動スキル  
体力強化：戦闘興奮時、体力ステータスを10%強化する自動スキル

装備品

頭から順に

頭：疾風の羽根飾り

体：超<sup>ミスリルダイト</sup>霊銀の胸当て

右手：超<sup>ガントレット</sup>霊銀の籠手（アクセサリに白狼の☒、魔法強化のルーンを刻んだ帯を巻いている。

左手：超<sup>グローブ</sup>霊銀の手甲（アクセサリに、メギンギョルズ（準神器の力の帯）

腰：白狼の皮編みベルト（アクセサリに矢筒、魔法金属の草摺り、  
ポーシヨンポーチ、鞆二本

脚：烈風のブーツ（アクセサリはなし

背：マギリング・クローク

武器

メイン

右手：黄昏<sup>トワライト・ソード</sup>の剣

左手：聖暁<sup>サンライズ・ソード</sup>の剣

サブ

右手：投擲ナイフ（8本

左手：イチイの弓

対人関係：1章内

カズマ：仲間の（主にアクア）騒動に巻き込まれる哀れな冒険者  
（笑）で放っておけない奴。

何かと世話を焼いてしまい、自分の屋敷に居候させている転生者仲間。

アクア：女神と言う正体を知ってるが、その性格を知って以来女神と扱えなくなってしまうた可哀想な人。

## 第1章 出会いの秋！（ああ駄女神さま）

この出会いに祝福を！ ようこそ異世界へ！

部屋に差し込む朝日を浴びて俺は目を覚ます。

先日の轟龍モドキこと、スカルヘッド・ドラゴンの討伐のおりに出た報酬とある屋敷を購入した。

その価格は2億エリスから値下げされて半額の1億エリスだったので迷わず購入した。

ちなみにだが、値下げの条件としてとある少女と同居状態にあるが。

「ふああ…。ん、おはよ。 アンナ」

《おはよう、ハルヒト。 今日は何をしに行くの？》

目の前の柵に置いてあるクマのぬいぐるみに声をかけると、挨拶が帰ってくる。

俺は軽く逡巡して今日の予定を立てる。 え？ 誰と話してんのだつて？

「そだなあ……。カエル狩りをして飯食って、狼退治をして風呂入って寝る。 こんなのだが？」

《えー、またカエル狩りなの？ 私もさすがに飽きてきたのー！》

クマからぬうつと少女が顔を出す。 むうう、とむくれっ面をした宙に浮かぶ半透明な少女が俺にズズイッと顔を寄せてきた。

面白くないようだが、俺にも譲れない一線はある。

「バカヤロウ、お前は亡霊だから腹は減らんだろうが、俺は生きてる。

腹も減るし命も一つしかないだろ？ 楽に稼げるならばそれに越したことはない」

相棒のハルナはまだ寝ているようで、無防備に臍を丸出しにして腹をボリボリとかく姿を見ていると、チートの存在とは思えないだらしなさだった。

白いワンピースを身に纏った小さな少女。 彼女はこの屋敷に憑いている幽霊のアンナ・フィランテ・エステロイドと言う。

俺は彼女を認識して視ることができて、話すことができる。ぶつちやけた話だが、ハルナの影響だろうと当たりをつけてはいるが、自信はない。

その要因は一切不明だからな。

アンナと雑談しながらナイトキャップを壁掛けに引っ掛けて、白の寝間着から普段着のジーンズと白のシャツに着替えると俺は園芸用の茶色のエプロンをかけて庭の片隅にある小さな石碑に向かう。

性懲りも無く生えて来ていた雑草の芽を摘み取ってから麻袋に入れて持って来ていたキレイな布で石碑、アンナの墓を拭いて掃除を済ませる。

「これでよしと」

《ありがとうなの、ハルヒト!》

「別にいいさ。　気まぐれでやってるに過ぎないからな」

俺はこの子の墓守としてこの屋敷に住んでいる、と言うのは建前。

本音はまあ、寂しがりなアンナを放っておけるわけもないから、だ。

いつかアンナが成仏するまで付き合っただけやるつもりではあるが。

俺は日課となりつつある墓の手入れを終わらせて、朝食を摂り済ませ、ふと気がつくときアンナは屋敷のどこかに行ったようで姿は見えなかった。

そんなもってまだ時刻は8時であったが相棒のハルナを起こしに自室に戻ったら、クマのぬいぐるみが一人で動いていた。　軽いホラーである。

ぬいぐるみに憑依しているのはもちろんアンナ。　そのアンナ

in　ぬいぐるみはホタテのような貝殻にワタとバネを敷いて作られたベットのようなものの上で大の字で眠る小さな人をつつく。

《おーい、ハルナちゃん、起ーきーろー。　8時なのー》

「ふあい、おきましゅ〜……。　ただいまおきましゅ」

寝ぼけながら貝殻いっぱい散らばった闇色の髪をまとめあげると手首に括り付けていた赤のリボンで括り、起き上がるのは星霊のハルナ。

かつての宇宙創生から今まで、悠久の時を生きる超越的な存在にし

ていくつもの世界を旅して巡る者。

二つ名、異名は数知れなくて謎の多い精霊の一種だ。

「おはようハルナ。 悪いが、今日も狩にいくぞ」

「了解です、マスター。 あ、アンナちゃん。 おはようございます」

《おはよーなの！》

クマのぬいぐるみの腕が動いてハルナとハイタッチを交わす姿はまるで滑らかに動く人形劇を見ているようだった。

ちなみにだがアンナはどんなぬいぐるみ、人形にも憑依できて関節がないにもかかわらずヌルヌル動ける。

その時は本当に気持ち悪いほどにヌルヌルとダンスを踊っていた。

この世には理解しがたい謎は多く溢れているのだから、なんとも言えないが。

ハルナの朝食が終わるのを待ちながら俺は身支度を整える。

シャツとジーンズを脱ぎ、畳んでしまおうと戦闘服としている服に着替える。

黒のタンクトップに 赤いミニスカートと黒ニーソ。 それに赤い皮の強化ブーツを合わせて防具を身につけて赤のジャケットをはおる。

俺の赤髪に合わせるとどうしてもイメージが赤になってしまおうが、今更だ。

トワライト・ソード  
黄昏の剣を手に取り鞘に収める。

黄昏の剣には自己修復能力があるのだが、夕日に当てるとさらに修復速度が早まる特殊な能力を持つ準神器だ。

切れ味も普通の剣と比べたら月とスッポンと言いたくなるほどの業物だが……神造兵装をお手本にハルナが作り出した原初の剣故に耐久性は高く、夕日を刀身に溜め込んで黄昏の焰を放つことも可能な剣だ（この事実は最近知った

そして、この前のスカルヘッド・ドラゴンとの戦いで折れはせずとも、刃がダメになった銀狼の剣をハルナに託してそれをベースに新たな剣を作り出してもらった。

その銘はサンライズ・ソード聖暁の剣。

神造兵装である約束エックされた勝利カリの剣パをモデルに設計されたらしいこの剣は日光を浴びると3日間かけて鏢に据えられた宝魔石に光を貯蔵する。

そして、最大まで光を貯蔵すると、この剣は光刃を放てるようになる。

輪エクスカリバー・ガラティーン転する勝利の剣とも違うが袈裟斬りに振り抜くと、光の波動斬を放てるわけではあるがその威力はまだ試していないため不明だ。

日当たりのいいかも窓際にかけてあったので、光の貯蔵はMAXまで溜まっているはずだった。

耐久性も抜群なので、試しに行った武器爆破魔法にも余裕で耐えていた。

新たな武器、新たな装いを立て鏡の前でチェックして不備がないかを調べたが問題はなさそうだった。

「よっし、準備完了だ。アンナ、一緒に来るか？」

《はい、私も行くの！》

言いながらアンナは俺の右手薬指にはめられた指輪に取り憑いた。

これはソウルリングといい、魂だけの存在となった幽霊を取り憑かせることができる魔導アイテムだ。

最も、取り憑けるのは無害な幽霊、亡霊に限るけどな。

自分の体の大きさの倍はあるはずのサンドイッチを食べきり、ご機嫌なハルナと合流した俺たちは屋敷を出た。

☆ このすば！！ ☆

カエルの討伐クエスト終わらせてほの達成報告のために俺はギルドに訪れた。ハルナは何やらやることがあるとのことだったので、別行動である。

とまあ、ギルドに訪れたのだが……アレってジャージだよな？

「おいこら、初っ端から挫かれたぞ」

「しよ、しようがないじゃない。急に転移させられてろくな用意もできなかつたんだから！」

緑のジャージを着た茶髪の俺と同じ年くらいの男が青髪の少女に食いついていた。青髪の女についてはなんか見たことがある気が

するんだが、気のせいかな？

「——なあ、アクア。俺たち、なんかあの子にスツゲー見られてんだけど」

「え？ カズマの自意識過剰じゃないの？ クソニートがそんな自信もてるんですか？ プークスクス！ ちよーウケるんですけどー！」

「なんだとこの駄女神が!? ニートじゃねえし！ 出先で死んだからニートじゃないし!? ……どうした、アクア?」

「匂うわ、アンデットじゃないけど。迷える魂の匂いが!」

騒がしい連中だと俺は思った。頼んでいたエール系の酒、クリームゾンビアを呷りジョッキを空にする。

そしておかわりを頼もうと、店員を呼ぼうとしたらあっちで話していた青髪の少女が後ろにいて俺の右手薬指にはめられたソウルリングを指差してこう言った。

心なしかリングが ビクウツ! と震えた気もしたが。

「ちよつと、そのあなた! お金貸してくれない!? じゃなくて、幽霊に憑かれてるわね?」

「おかわりたの……へ? 何言ってるんだあんたは」

「私がすぐにその取り憑いてる幽霊を祓ってあげるから、2000エリス貸してください!」

「いや、まて。大いに待て。確かにこのソウルリングに友達を憑かしてるけど、害はないからお祓いは勘弁してくれ。それとこれ。

連れの人と合わせて冒険者登録料は2000エリスだろうか? 持っていていきな」

とりあえずあまり深く関わらないほうがいいだろう。

「おい、アクア何してんだよ!? もらうわけないよなさすがに!」

「アクア——まさか」

その名前を聞いて俺はピンと来た。あつた気がするわけだ、なるほどなど。

「アクシズ教の御神体がなんでこんなところにいるんですか? 女神アクア様」

「え、あなたあつたこともないのになんで私のこと知ってるの!」

ねえ、なんで!？」

「だあぁっ、何女神だつてバラしてんだこのバカ!？」

「二人とも落ち着け、俺も転生者だ。アクア様に関しては置いといて、ここに来たのやはいつだ？ 日本人くん？」

確信に近いものを持つていた俺はジャージの少年に尋ねて見た。

「てことは、あんたも日本人なのか……! って、蒼崎青子そっくりだな。俺はカズマ。佐藤カズマだ」

「よろしい。俺はハルヒト。剣無ハルヒト——こんななりだが、元男だ」

俺の自己紹介を受けて「え？」と言う目をしたカズマを殴りたい衝動に駆られたが、我慢した俺はアクア様改めてアクア、カズマ（カズマでいいと言われたので）の面倒をみることにした。

白状しとくと、同郷のカズマを見捨てることができなかつたわけだ。

あと、アニオタ仲間は見捨てられるわけがないだろうか？ ……俺の価値観はそんなもんさ。

「ステータスが低すぎて、冒険者止まりだったんですけど……どうなってんだよこれ」

「崇め讃えなさい、カズマ！ 私はアークプリーストよ!！」

「とまあ言うべきかこれは。ようこそ地獄の入り口へ！ なんてな」

こうして、俺は冒険者となったカズマと、レベル1のアークプリーストとなったアクアを自分の屋敷に居候させることにしたのだった……アンナが放って置けなくて購入したそこそこ大きな屋敷だったので、部屋は余ってるからな。

そして、1週間の時が流れるのはあつという間だったが

続く



カズマ達の付き添いを！

「おめえら！ 今日はまだ上がった方がいいぞ！」

「ありがとうございますー！」

『したー！』

大声が城壁の拡張工事現場に響き渡り、俺たちは親方から今日の日当をもらう。

「今日もよく働いたわね、私たち！」

「ああ、そうだな！ 帰って飯食おうぜ！ ……疲れた」

アクアの言葉に相槌を返して俺たちはとある屋敷へ足を進める。

門をくぐり、玄関をノックしてから鍵を使って扉の錠を開ける。

「ただいま〜！ ハルヒ、ごはんできてる!?!」

「今日も働いたぜ……疲れた」

「二人ともおつかれさん。 飯か風呂かどっちがいい？」

屋敷に入り、居間に向かうと、黒のエプロンをつけた赤髪をまとめ括った、いわゆるポニーテールの髪をした少女が俺たちに提案する。

この屋敷の主人のハルヒトと言う俺と同じ転生者だ。

見た目は赤髪で青目な蒼崎青子に似ているが、元は俺と同じ男だそうな。

「じゃあ、風呂には先に入ろう。 アクアは後でいいよな？」

「そうね、ハルヒ。 私は先にご飯食べるわ！」

「了解だ。 そんじやとつと風呂済ましてきなよ、カズマ」

数分後、言われるがままに俺は風呂を済ませてアクアと交代。 晩飯にありついた。

「アクアはお金払ってたか？」

「いつもいつてるが、いいんだぞ？ そんなのは気にしなくて？」

「いや、さすがにタダ飯食うのは気がひけるんだよ。 1,000エリス払ってもらいな、いつも通り」

「わーったよ。 あー、そうだ。 空き部屋2つの掃除しといたから、自由に使ってくれ。 最低限の家具、ベットと机とかはあるからさ」

何から何まで申し訳ない気もするが、遠慮せずそうさせてもらうことにした。

「何から何までありがとうな、ハルヒト」

「なーに、俺の自己満足でしかないよ。ちなみに、この先は資金貯めてホーム買うのか？　しょーじき言つて、うちにいてくれても構わないんだけど」

「俺がヒモになったらどうする気だ。面倒見てくれるのか？」

「アホか。お前がそんな風になるタマじゃないって俺の直感がそう言つてんだよ」

変わった奴だと思うが、この好意的なものに隠れて悪意も見当たらないからこのままで行こうか……いつまでも甘える気は無いが。

「そろそろ一週間経つんだよなあ、こっちにきてから。ハルヒトはいつも何やつてんだ？」

「何やつてると言われてもなあ。どう言う答えを望んでるんだ？」

「ああ、クエストだよ。簡単に稼げるクエストとか知らないか？」

「初心者向けのクエストだと、カエル狩りかゴブリン狩りだな。」

まあ、まだ挑まない方が身のためだと思うぞ？」

「え、強いのか？　カエルやゴブリン如きが」

素朴な疑問をハルヒトに聞くと、少しだけムツとした顔をしてハルヒトはこう答えてくれた。

「カエル如きって言っても、ジャイアント・トードは牛くらいの大きさをしてるし、ゴブリンは中級魔法で脅しても逃げないなかなかタフな精神力と群れて行動するから数の暴力を持つ魔物だ。見た目に騙されて死ぬ駆け出しの冒険者を何人か見てきたから、舐めてかかると死ぬぞ？　まず、ゲーム感覚で魔物を狩れると思うなら冒険者はやめるべきだな……カズマは魔王を倒す気にいるか？」

「え、マジか。魔物が強いってこの街は駆け出しの街だよな？　あと、質問に答えると日本に帰りたかって願いを叶えてもらいたいし、倒せるなら倒したいぜ？」

「そ、そうか。切実な願いだな」

そりゃそうだろうと思う。今でこそ労働の喜びを感じている以

上、あんな部屋にこもってネットゲームに入り浸った不健康な生活はやりたく無い。　が、この世界には娯楽という娯楽が博打、カジノくらいしかない。

本はあるにあるが、一冊一冊が高い上に、ラノベ的なものは無い。この世界そのものがファンタジーだから仕方ないと言えそうかもしれないが、男として娯楽を求めたっていいじゃ無いか!?

だいたい、この世界は魔王軍に侵略されてやばいのではなかったのか? それに冒険者として、血肉湧き踊るようなやり取りはまだ一切やったことがない。　憧れると言えば憧れるけども、俺の貧弱なステータスで武器防具はまだ装備できないしなあ……はあ。

筋肉痛でガタガタの体を鞭打つようにしてがむしやらに働いている今日この頃を見返して思う。　労働基準法のあった俺たちの故郷の日本がどれほど居心地のいい場所だったかをしみじみと思ったのだ。

バイトでも最低賃金は時給で750円→が常識なんだから恐れ多い。

そんな労働基準法はこの世界じゃ何それおいしいの?　扱いで、存在すらしない。

ここはそんな世界なんだ、と諦観するのではなく、俺は前に向かって歩くことを選択することにしたから引く気もないけどな!

「やれやれ。　俺の使ってたお古の剣でよけりや貸してやるぞ?　切れ味とかは保証しないが。　カエルについては金属製の防具を身につけていたら捕食されにくいからな」

「……へ?」

思考にはまっていたが、ふとハルヒトが俺に声をかけてきた。

「はあ、俺も付き合ってやんよ。　明日は狩を休む気だったけどなあ。

——冒険したいんだろ?」

「いいのか!?!　すごい頼もしいが申し訳なくもあるんだけど、本当にいいのか?」

思わず声に出してハルヒトを見据える、否、見つめる。

「そ、そんなにみつめんなよ。　その代わり、ヤバくなるまで手を貸さ

ないって条件を飲めるか？」

「わかった、ヤバくなったら助けてくれよな？　まだ俺は駆け出しなんだしさ!？」

「わーってるって。　そんじや明日の昼にでも行こうか」

その条件を俺は飲んだことを次の日に後悔することになるとはつゆ知らず、俺は意気揚々とベットに入り眠るのだった。

明日は冒険だ！

☆　この　す　ば　!!　☆

「だわあああ!?　助けてくれえええ！」

「おーい、カエルから逃げてばっかりだといつまでも倒せねーぞカズマ」

「こんなのがカエルな訳ねえヨオオオオ！」

「プークスクス！　やばい、超うけるんですけど！　カズマったら、顔真っ赤で超必死なんですけどー！」

カズマの魂底たまそこからの叫びをさらりと流しながら俺は水筒の水を呷った。

俺は普段着の白シャツとジーンズを着てイチイの弓をベルトに引っ掛けてカズマの動きを観察していた。

黄昏の剣を腰に佩てはいるが、抜くつもりはない。

今日ここに、カエル狩りに来てるのは俺とカズマ、そして俺の隣で腹を抱えて笑うアクアの3人だ。

ハルナは多分食べ物の屋台巡りか、ウイズさんの店でお茶でもして世間話に花を咲かせていることだろう。

ちなみに、ハルナ。　最近信仰を集めるようになって来たようで、何人かの冒険者に加護を頼み込まれて幸運を高めるアミュレットを作り、授けたらしい。

信仰のない冒険者のほとんどが勝手に信仰し始めかけていて焦ってるらしい——話が逸れたか。

「こんなに逞しいカエルだなんて思ってもなかったんだヨオオオオ！　助けてくださいいいいい——アクアー！　アクアー!!?　お前もいつまでも笑ってないで助けてろよおおお！　ハルヒトオオオオ！」

マジでやばいから助けてくれえええ！」

「まずは、私をアクアさんと呼ぶところから始めてみましょうか」

「アクア様——！」

カズマはプライドをかなぐり捨てて、アクアに助けを求める。ちなみに、アクアはカエル相手に武器なんて振り回さなくてもいいと、素手である。

舐めプもいいところだが、なんとなくアクアの起こす顛末を読んだ上で、注意しなかったが。

そしてアクアが大声でご高説を垂れ始めるとその声に反応したのか、カズマを追っていたカエルがこちらにやって来た。

俺はとりあえず、巻き込まれるのも面倒だったので、ススツとその場所から離れた。

「しようがないわね——！ いいわ、助けてあげるわよヒキニート！」

その代わり、明日からはこの私を崇めなさい！ 街に帰ったらアクシズ教に入信し、1日3回祈りを捧げること！それから、高いお酒を私に3日に一度奉納する——ヒュグツ!!」

「あ、喰われた」

「アクアー!! お、お前食われてんじゃねえよおおお!!」

捕食して飲み込むために動きを止めたカエルにカズマは果敢に向かっていく。

仲間の女を救うために彼はひたすら走っていた。

そして俺のお古でもある鉄の剣を振り下ろして、カエルの頭蓋を力ち割って倒していた……お見事。

アクアの足を掴んで二人掛かりで引き抜いてやると、カエルの粘液でネットネットになったアクアが泣きじやくりながら俺に抱きついて来た。 うわ、生臭え!?

「ぐすつ、うええええええつ！ ぐすつあぐうつ！」

「よーしよし、怖かったんだな。よく頑張ったよお前は」

「びええええええツ!! 怖がったの、怖がったのおお！」

俺の胸にすがりつくように、泣きついて来たアクアを邪険に振り払うを是、とはできなかつた俺はひとしきり泣いて彼女が落ち着くのを

待つことにした。

カエルの粘液でネチヨネチヨになつて泣くアクアと、カエルの粘液塗れになりつつもそれを抱きとめる俺と言うひどい画図をイメージすると色々萎えるので頭から振り払った。

「ううっ……ぐずっ……ありがと……ありがどうね、カズマ……うわあああああん……!」

礼を言いながらも泣くと言うなんとも器用なことをしているアクアの、粘液まみれの頭をえらいえらいと撫でてやり、慰める。

そしてまあ、カズマはと言うと申し訳なさそうな顔をして俺とアクアを見ていた……なんだ？ 俺の胸あたりもガン見してるよーな。

俺はカズマの視線を追い下を見ると黒い下着が、ブラジャーがシャツツの下からこんにちわをしていた。

「おい、カズマ。 目線が露骨にいやらしすぎだ……さすがに俺も怒るぞ?」

「あ、ごめん! (さすがにガン見すぎた……でも、ハルヒトつて本当につけしからん躰つきだな)」

反射的なカズマの謝罪、しかし、目を逸らさないこの童貞をどうしてくれようか。 一応俺にも羞恥心はある。

裸を見られたわけではないが、なぜか冒険者の男達からエロいものを見る視線をされる時がたまあったことがあり、少しだけトラウマ化していたのだ。

とりあえずアクアが泣き止んだので制裁を加えることにした。

「いい加減にしろ!」

俺は立ち上がり、カズマの元にズカズカと歩み寄ると、尻を蹴り上げた。 顔を真っ赤に染めた俺を見てカズマも啞然としていたようだが、蹴られた直後に

「いつてええええええ!」

尻を単に突き上げるようにしてカズマは突っ伏していた。

「エロい目で女の人見て無事で済むと思つてたの? 世の中そんなに甘いと思つてたの? プークスクス! 超うけるんですけど!」

「ぐぬぬ、正論だが言い方に腹がたつ!」

復活したアクアに小馬鹿にされながらも、カズマは己の非を認めて次には謝って来たので

「さすがに、デリカシーなかったな。ごめん」  
「次はないようにな？」

素直に謝って来たのと、蹴り上げたことでチャラにしてやろうと思っただけ。

「今日のところは、帰ろう。見てて思った。今のお前らには危険すぎるよ、このカエルは」

「大丈夫だったか？ ハルヒトの言うことに俺は賛成だ。今日はお帰ろう。せめて冒険者に見える格好になってから再挑戦しよう」  
「愚問ね！ 女神がたかだかカエルにここまで目の目に遭わされて、黙って引き下がれるもんですか！ 私はもう汚されてしまったわ。今の汚れた私を信者が見たら、信仰心なんてダダ下がりよ！ これでカエル相手に引き下がったなんて知れたら、美しくも美しいアクア様の名が廃るってものだわ！」

日頃大喜びで大量の荷物運んだり（と、カズマから聞いた）、風呂上がりの晩飯を楽しみにして、居間のテーブルに突っ伏しながらヨダレ垂らして寝るあの姿を見れば（少なくとも屋敷ではあられもない姿をしている）今の、粘液塗れのアクアの姿なんて今更な気がする。まあ、アクシズ教徒の大元らしい主神だと思おうが。

「あ、おい待てアクア！」  
カズマの制止を振り切ってアクアは駆け出した。

「カズマ……武器出しとけ」  
「……お、おう」

俺が弓を構えるのを見てカズマは鉄の剣を鞘から抜いた。  
駆ける勢いのままにアクアはその手に光を宿らせてカエルの腹に殴りかかった。

「あなたに恨みほ無いわ！ でも、あなたの同胞が私に与えた屈辱の恨みを代わりに受け取りなさい！ 神の力を思い知れ！ 私の前に立ち塞がったこと、そして神に牙を剥いたこと！ 地獄で後悔しながら

ら懺悔なさい！ ゴツドブローツ！ その効果、相手は死ぬううううつ!!」

かつこいいい口上と共に放たれたアクアの拳はぶよんとカエルの柔らかい腹にめり込むが、殴られたカエルにダメージらしいダメージは無いようだった。

打撃系の攻撃はあまり効果がない。カエルのあの柔らかい体は並みの打撃攻撃が効かないんだよなーと考えながら。

「……か、カエルってよく見ると可愛いと思うの」

アクアの眩きが俺の耳に届く頃にはカエルが獲物を飲み込もうとして動かなくなった。

俺はカズマに協力して二匹目のカエルを倒し、粘液まみれで泣きじやくる女神を連れ、今日の討伐を終えた。

カズマ達の倒さないといけないカエルの数は3体である……先が思いやられる滑り出しだった。

(続く)



中二魔女っ子とあの忌まわしいカエルに爆裂を！

「仲間を募集しましょうー！」

街に戻った俺は、さっさと風呂に入りたいと思い、メインストリートを突っ走った。

屋敷に向かう道中の人たちに、同情のような視線を受けたのは言うまでも無い。

カエルの粘液の生臭い臭いを風呂に入って落とし、外食でもどうか、と2人に声をかけた。 傷心間もない2人には癒しが必要だろう、と考えて冒険者の酒場に足を運んだ。

普段着に着替えたアクア、カズマはカエルのモモ肉の唐揚げを食いながら作戦会議をしていた。

冒険者ギルドは冒険者のサポート組織であり討伐したモンスターの買い取りをしている。

それにモンスター料理のウリな酒場を併設していることから冒険者の溜まり場、待ち合わせ場所になっている。

今日討伐したカエル2匹の肉をギルドに売ったので、2人はそこそこの小遣いを稼ぐことができたと思うが。

あの巨体を持つカエルを俺たちで運ぶことは困難だ……と言うか運べる気がしない。

だがギルドに申請すると、倒したモンスターの移送サービスを受けることができる。

カエルの引き取り価格は一匹につき五千エリスで引き取ってくれる。

ちなみに移送費込みで五千エリスだ。

それが2匹いたので今日の報酬は10000エリスってわけだが……この金額は外壁拡張工事の、カズマたちの日当と変わらん。

この世界の賃金はかなり安い……そりゃ未発達の世界に安定した格差の無い社会なんざ無理だろうけどな。

「カエルがこんなふうまいとは驚いたな」

「案外ゲテモノも美味いぞ？ サンドワームの縁側とかも酒のアテに

はいけるからなあ」

カエルの肉は変なクセも無い淡泊な味がする。日本で言うところの鶏の胸肉みたいでいくらでもイケそうな味なのだ。最初のうちはチョット硬いのが気になるけどな。

この世界に來た当初が懐かしく感じるな。このモンスター料理に抵抗感があったが、定食として出されたトカゲやカエルも食べてみれば味がわかりうまいということもわかる。

俺の隣でカエルのモモ肉を頬張る女神様はなんでも躊躇なくモリモリ食べてはいるが。ちなみに俺がよく調理するのは羊肉や豚肉だ。安くて質のいい肉屋の旦那を鼻肩にしてるからな。

「でもなあ……。仲間だったって駆け出しでろくな装備の無い俺達のパーティーに入ってくれる奴なんているのか？」

「まあ、かずまはさ。最弱の〈冒険者〉とは言えまだまだ伸び代はあると思うぞ？ 自称女神のそこの〈アークプリースト〉は需要があるかもだが」

カズマの疑問も最もだと思う。

「ひよつと、ふおのひひはあわ」

「飲み込め、飲み込んでからしゃべれ」

カズマに指摘を受けたアクアは、その口の中のを飲み込みながらに俺に食ってかかってきた。

「ちよつと、その言い方は語弊があるわ！ 自称女神じゃなくて本物よー！」

「……わかった、わかった。で、募集はどうするんだ？」

「この私がいるんだから、仲間なんて募集かければすぐよ。なにせ、私は最上級職のアークプリーストよ？ あらゆる状態異常の治癒、回復魔法もつかえてその果てには蘇生だってお手の物。カズマのせいで地上に落とされて本来の力とは程遠い状態でもこれだけの力があるのは、私が仮にも女神だからなのよ？ わかったらハルヒ、カエルの唐揚げ一つちようだい！ そのついでに讚えなさいー！」

「今日はちつとも活躍してないお前を讚えるのは抵抗感しかない。だがまあ……ほれ」

喚こうとするアクアの口に唐揚げを放り込み黙らせた俺は、嬉しうにそれを頬張る女神様を、カズマも同じ心境なのだろうか……不安げに眺めていた。

☆このすば☆

翌日の冒険者ギルドにて。

「…人、こないわね」

「…こないな」

アクアが寂しそうに呟いたのに俺は相槌を打った。やはり心配になった俺は普段時のフル装備で2人の仲間候補を見立てることにした。

なお、先ほど求人者の張り紙を出したことに違いはないのだが……誰も見ていないということはないと思う。

まあ、来ない理由も察している。

「なあ、ハードル下げようぜ。俺たちの目標が魔王討伐だから仕方ないっちゃ仕方ないんだが…」

「カズマの言う通りだな。上級職のみの募集はいくらなんでも厳しすぎると思うが？」

カズマたちの目標は魔王の討伐。

俺か？ 成り行きでこいつらを拾ったわけだし、面倒は見ておくべきだと思っっているのである程度までは付き合ったやろうとも思っているが。

まあ、魔王の討伐なんて今の俺にも到底無理だと思っうが。

「うう、だって……」

話が逸れた。

俺の職は現在へマジックソードマンで、この職は中級職扱いになる。

そんな俺よりも確実に強い上級職の人々はガチの勇者候補となる。まあ、もうそろそろジョブチェンジの案内が来ているので、俺も上級職に成るつもりではあるけどな。

アクアの思惑としては、魔王討伐のためにできるだけ強い強力な人材で固めておきたいんだろう。

「このままじゃ誰も来ないぞ？ 大体お前は上級職かもしれないが、俺は最弱職なんだ。 周りがいきなりエリートばかりじゃ俺の肩身が狭くなる……」

アクアにそう言いながらカズマが席を立とうとした時だった。

「上級職の冒険者募集を見てきたのですが、ここで良いのでしょうか？」

気怠そうな赤い瞳に、しつとりとした肩口ほどの長さの黒髪。 俺たちのテーブルの前にやってきたのは黒いマントに黒いワンピース、黒いブーツを履いて身の丈に近い長さの杖を持っている。

その頭にはとんがり帽子を被っている……魔女っ子。

人形のように整った顔立ちのロリっ子だった。

どう見積もっても12〜13歳にしか見えない片目を眼帯で隠した少女が羽織っていたマントを翻しながら……

「我が名はめぐみん！ アークウィザードを生業とし、最強の攻撃魔法を操る者！」

「…冷やかしに来たのか？」

「…なにやってんのさ、めぐみん」

「冷やかしとち、ちがわい！ って、ハルヒトではないですか」

女の子に思わず突っ込むカズマ。 俺は知り合いの登場に思わずずっこけかけた。

「知り合いなの、ハルヒト……ってあなたもしかして紅魔族？」

アクアの問いにコクリと頷く少女が彼女に冒険者カードを渡す。

「いかにも！ 我は紅魔族随一の魔法の使い手、めぐみん！ 我が必殺の魔法は大地を穿ち、岩をも砕く！」

「おい、お前の魔法は……まあいいか」

「と言うわけで、優秀な魔法使いはいりませんか？ あと、凶々しいお願いなのですが、もう3日も何も食べていないのです……面接の前に何か食べさせてもらってもいいですか？」

そう言うめぐみんは悲しげな瞳でカズマを見る。

彼女のお腹からキューと切なげな音になる……またろくなもの食べてないのかよ。

「飯を奢るくらいなら別にいいけど……その眼帯は？」

「はい、この眼帯はマジックアイテムです。      なかなか便利ですよ？」

そうやってカズマに眼帯を渡すめぐみん。

カズマがそれを付けると……

「ほおー……こいつは凄いな。      普通に見えるぞこれ」

カズマが外して俺に手渡してきた……見ておけということか？

まあ前からちよつと興味あったけど……。

「……おお、確かに便利そうだな」

眼帯をつけた方の目は普通見えなくなるはずだがこの眼帯はマジックアイテムの名の通り、目の前にある筈の眼帯が隔てている筈の景色が見えるのだ……透視機能なのだろうかこれは。

さらに加えて、相手との距離が示されたマーカーのようでもある。

距離計測器みたいな機能なのだろうか？

「魔法射程を掴むためのマジックアイテムか？      この眼帯は？」

「ええ。      あると何かと便利なのですが、私は半分ファクションでつけています。」

……なんだそりゃ

ファクションでつけていますって……かなり便利なアイテムだと思うのだが……。

眼帯を付け直したためぐみんを見ながらアクアが説明してくれる。

「……ええとね。      カズマに説明すると、彼女達紅魔族は生まれつき高い知力と魔力を持ち合わせていることから、大抵は魔法使いのエキスパートになるの。      紅魔族は名前の由来となっている特徴的な紅い瞳と……。      それぞれが変な名前を持っているの」

「変な名前とは失礼な。      私から言わせてもらうと、町の人々の方が変な名前をしていると思うのですが」

俺たちの名前の方が変とは……やっぱり変わった感性だな、紅魔族は。

「ちなみに、両親の名前を聞いてもいいか？」

「母はゆいゆい。      父はひよいさぶろー」

『……』

思考停止する俺たち……数秒の沈黙に耐えきれなくなったのかカズマが切り出す。

「とりあえず、この子の種族は質のいい魔法使いが多いんだな？ 仲間にしてもいいか？」

「暫定メンバーのアクアに聞け、仮メンバーの俺に降るな」

「おい、私の両親の名前について言いたいことがあるなら聞こうじゃないか」

カズマに詰め寄るめぐみんに、アクアが冒険者カードを返す。

「いーんじやない？ 冒険者カードは偽装できないし、彼女は上級職の〈アークウイザード〉で間違いないわ」

「おい。 彼女ではなく、私のことはちゃんと名前で呼んでほしい」

抗議してきためぐみんに俺はメニューを渡す。

「まあ、なんか食って落ち着けよ こっちの男がカズマで、こいつはアクアだ」

「はい、しかし。 ハルヒトの知り合いですか、この方々は」

「まあな。 この前拾って以来、面倒を見てる」

「なるほど、そう言うことでしたか……」

「え、ハルヒトとこの子って知り合いなのか？」

俺は軽くカズマにそう言うことだ、と伝えてそれ以降話さなかった……こいつの厄介なところを見てどんな反応をするかが愉しみだからな。

食いつくようにメニューを凝視するめぐみんに俺は小さく微笑んだ。

☆K O N O S U B A ☆

「爆裂魔法は最強の攻撃魔法。 その分、魔法を使うのに準備時間が結構かかります。 準備が整うまであのカエルの足止めをお願いします」

満腹になったためぐみんを連れてカズマたちは忌まわしいカエルに、リベンジに来ていた。 俺はアクアのフォローに回ることにしたが……不安だった。

平原の遠く離れた場所には一匹のカエルの姿が。  
そのカエルはこちらに気がついたのか向かってくる。

「カズマ。 向こうにもカエルがいる…そっちは頼むぞ」

「わかった。 遠い方のカエルを魔法の標的に、 近い方はハルヒトとア  
クアに任せる」

カズマにめぐみんの近くにいてもらい、俺とアクアで近い方のカエ  
ルに仕掛けることにした。

「アクア、この前のリベンジだ。 猪突猛進に突っ込むな…よ…よ…」

「何よ！ 打撃が効きづらいカエルだけど、今度こそ女神の力を見せ  
てやるわよ！ 今のところ活躍のない私でもできるってこ、ひゅぐつ  
！」

俺の言うことを聞かずアクアが突っ込んでいく。

さすがは女神様…身を挺してカエルの動きを止めてくださった  
ようだ。

…学習能力のないアクアに哀れみの視線をむけながら俺は獲物を  
飲み込もうと動かなくなつたカエルの頭部を抜いた剣で斬りつけた。

一撃で頭蓋をがち割られたカエルは絶命した。

じたばたと足をバタバタさせるアクアをカエルの口から引っ張り  
だして救出。

ふとカズマとめぐみんの方を見ると…彼女の持つ杖の先に光が灯  
る。

ヤバそうな、それを例えるのならば光を極限まで凝縮したもので…

まるで小さな太陽だ。 派手さだけは他の追従を寄せ付けないネタ  
魔法には見えんよなあ…

「ヘクスプロージョンっ！」

めぐみんが紅い瞳を輝かせて呪文を、膨大な魔力の塊を解き放つ。

その光はカエルに突き刺さると、その凶悪な効果を発揮した…閃  
光と轟音の後には…

「いててて…。 相変わらずなんつー威力だ…」

泣きじゃくっていたアクアと俺は魔法の起こした爆風ですつ転ん  
で尻を強打した。

粘液まみれのアクアを連れてカズマ達の方に向かいながらその魔法の爪痕である20メートル以上はありそうなクレーターを目の前にして俺は押し黙った。

相変わらぬの過剰攻撃力と内心で俺が感動していると、ポコンッと近くの土が隆起した。

のろのろと土の中から這い出てきたのはジャイアントトードだった。

おそらく、地中で眠っていたのだろう。まあ、最初の頃は雨の降っていないこの平原でどうやって生きているのだろうかと思っていたが：日中は土の中で眠るんだよな、カエルは。

「めぐみん！ 一旦離れて、距離を取ってから攻撃を……」

カズマがそう言う、その途中で言葉が切れる。

カズマの視線を追うように見てみると……めぐみんが倒れていた。

「ふ……。我が奥義である爆裂魔法はその絶大な威力ゆえ消費魔力もまた絶大。：要約すると、限界を超える魔力を使ったので、身動きが取れません」

「やっぱりネタ魔法だな、爆裂魔法は」

俺がめぐみんを背負うと、カズマ達の方に走る。

さすがに2ヶ月間冒険してないから基礎体力や筋力は上がっているんで苦もなくめぐみんを背負える。

「カズマ！ ……にげるぞー…ん？」

逃げるぞ言いつた俺の視界が黒に染まった……

「ハルヒトオオオオ！ お前、何食われてんだよオオオオオ!?」

またしてもカズマの絶叫が聞こえた気がした。

○カズマ視点

「生臭い……。生臭いよう……」

「もう泣くなよ、アクア」

「カエルの体内って、臭いけどいい感じに温かいんですね……。知りたくもない知識が増えました」

粘液まみれのアクアを慰める粘液まみれのハルヒトに同じく粘液まみれのめぐみんは俺の背中で知りたくもない知識を教えてくださいな



がら、めぐみんは俺の背中におぶさっていた。

魔法を使う者は魔力の限界を超えて魔法を使うと、魔力の代わりに生命力を削ることになる、ハルヒトから聞いた話だが、めぐみんの有様を見て俺は把握した。

魔力が枯渇している状態で大きな魔法を使うと命に関わることもあるそうなの。

「今後、爆裂魔法は緊急の時以外禁止だな。これからは他の魔法で頑張ってくれよ、めぐみん」

俺がそう言うと、背中めぐみんが肩を掴む手に力を込めた：何だか嫌な予感がするんだけど、気のせいだよな？

チラツとハルヒトを見るとアイツ：目をそらしたのか？

「…使えません」

「…は？ 何が使えないんだ？」

めぐみんの言葉に思わずオウム返して言葉を返す。

めぐみんが俺に掴まる手にさらに力を込めて、そのまな板のような胸が背中に押し付けられた。

「…私は爆裂魔法しか使えません。他には、一切の魔法が使えません」

「…マジか」

「…マジです」

俺とめぐみんが静まり返るなか、持ち直したアクアが会話に参加する。

「爆裂魔法しか使えないってどういうこと？ 爆裂魔法を習得できるほどのスキルポイントがあるなら、他の魔法を習得していないわけがないでしょう？」

「……スキルポイント？」

疑問を浮かべる俺にハルヒトが説明してくれる。

「あ、そか。カズマは知らないんだな。スキルポイントてのは職業についた時にもらえる、スキル習得に必要なポイントだ。ギルドのお姉さんの話じゃ、優秀な者ほど初期ポイントは多いらしい。このポイントを振り分けて様々なスキルを習得するのだとよ」

「なるほどな。 スキルポイントを振ってスキルツリーを完成させるのか……」

「ちなみに俺はマギリングソードマンって中級職だ…弓も使えるから便利な職なんだぜ？」

「そ、そうか…だから弓を使うのがうまいのか」

「それと、日本にいた頃、たしなみ程度に弓道を習っていたから…」  
ハルヒトは態とらしく、恥ずかしそうに目をそらして、それ以降しやべらなくなった。

「私は爆裂魔法をこよなく愛するアークウィザード。 爆発系統の魔法が好きじゃないんです。 爆裂魔法だけが好きなのです」

めぐみんの独白に俺はもちろん、アクアとハルヒトも真剣な面持ち聞いていた。

「もちろん他の属性のスキルも習得すれば、冒険は楽になるでしょう。 …でもダメなのです。 私は爆裂魔法しか愛せない。 たとえ今の私の魔力では一日一発が限界でも。 たとえ魔法を使った後は倒れるとしても。 それでも私は爆裂魔法しか愛せない！ だって、私は爆裂魔法を使うためだけに、アークウィザードの道を選んだのですから！」

「素晴らしい！ 素晴らしいわ！ その非効率ながらもロマンを追い求める姿に私は感動したわ！」

めぐみんの独白にハルヒトが諦めの顔をしていた。

…まずい、どうもこの魔法使いはダメな系だ。

よりにもよってアクアが同調しているのはその証拠だ。

俺はここ二回の戦いで、どうもこの女神ちつとも使えないのではと思いはじめている。

はつきり言ってアクア1人でも厄介なのにこれ以上問題児は……。

よし、決めた。

「そっか。 多分茨の道だろうけど頑張れよ。 お、そろそろ街が見えてきたな。 それじゃあ、ギルドに着いたら報酬を山分けにしよう。 うん、まあ機会があればまたどこかで会うこともあるだろう」  
その言葉に俺を掴んでいるめぐみんのにさらに力が込められた。

「ふ…。 我が望みは爆裂魔法を放つこと。 報酬などおまけに過ぎず…：なんなら山分けでなく、食事とお風呂とその他雑費を出してもらえるなら我は無報酬でも構わない。 そう、アークウィザードである我が力が、今なら食費ちよつとだけ！ これはもう長期契約を交わすしかないのだろうか！」

「いやいや、そんな強力な力は俺たちみたいな弱小パーティーには向いていない。 そう、めぐみんの力は宝の持ち腐れだ。 俺たちのような駆け出しには普通の魔法使いで十分だ。 ほら、俺なんか最弱職の冒険者なんだからさ」

俺はそう言いながら、ギルドに着いたらすぐ追い出せるようにめぐみんの手を緩めようとする。

「なあ、カズマ。 めぐみんを入れてやったらどうだ？」

俺とめぐみんのやりとりを見ていたハルヒトが突如としてそんなことを言い出した。

「…：お前の考えていることはまあわかる。 めぐみんのフォローは俺が責任持つて行こう。 だからこの子を入れてやれないか？」

「ハルヒト…：でもなあ…：」

「言い忘れてたが、めぐみんは俺の知り合いだ。 そこも踏まえて俺からも頼むよ…：もしめぐみんの面倒を見てくれるって言うなら、俺もお前らのパーティーに入るからさ。 今日の惨状を見たらお前らもめぐみんも放つて置けなくなった」

「見捨てないでください！ もうどこのパーティーも拾ってくれないのです！ ダンジョン探索の際は荷物持ちでもなんでもします！

お願いです、私を見捨てないでください！」

ハルヒトの言葉に抗議したかったが…：それどころじゃなかった。 めぐみんが大声で言うのは必死だからだろう。

もう街中に差し掛かっていたので通行人たちにめぐみんの声が聞こえたようで、ひそひそと何かを話している。

「—やだ、あの男。 小さい子を捨てようとしてる…」

「—隣にはなんか粘液まみれの女の子2人連れてるわよ」

「—あんな小さい子を弄んで捨てるなんて、飛んだクズだね。 見

て！ 女の子全員ヌルヌルよ？ いったいどんなプレイしたのよあの変態」

間違いないならぬ誤解を受けてるぞこれは……！

アクアがそれを見てニヤニヤしているのが憎たらしい。

そしてめぐみんにもそれが聞こえたようで……俺が肩越しにめぐみんを見ると、口元をニヤリと歪めて大声で

「どんなプレイでも大丈夫ですから！ 先ほどのカエルを使ったヌルヌルプレイだって耐えてみせ」

かなりの大声で言うめぐみんの言葉を遮るように俺は

「よし分かった！ めぐみん、これからよろしくな！」

と、こういうしかなかった……仲間が増えました。

(続く)

## 鋼の女騎士とキャベツとの乱戦を！

カエルに食われる体験を久々にした俺は、浴場に来ていた。もはやおぼちゃんとかの裸にいちいち反応しなくなったのは精神が完全に順応したからなのだろう。

カエルは鎧を着た獲物というか人を食わない。基本的に嫌うのだが、寝ぼけていたのかそれとも飢えていたのか…俺とめぐみんの二コイチで量を優先したのかはわからないが食われた。

「やれやれ…：酷い目にあつたな、今日も」

「なんだかんだ言つて、ハルヒもカエルに食べられるのね。親近感を覚えるんですけど」

粘液まみれの俺たちは生臭い。そのためか、カズマに追いやられるようにして俺たちは大衆浴場に来ていた。

まあ屋敷を購入して以来、久々に大衆浴場を使う気がする…が。

めぐみんの視線が俺の胸元に突き刺さっていた。

「相変わらずの大ききさですね…：着痩せしてるんですか？」

「俺に言うな、聞くな。なりたくてこの大ききにしたわけじゃない」

ちなみに、カズマが報酬を受け取ってくるとの事で冒険者カードを預けておいた。

「しかし、ハルヒト。まだ中級職だったのですか？」

めぐみんが疑問を述べるので俺はそれに応えた。

「まあな…：アークウイザードにもなれるらしいが、俺は剣士になりたかったからさ…：たとえ無理だとしても剣を使える方が懐に入られた時に対応できるし」

「なるほど。アークウイザードでも剣は使えるはずですが…：いずれ転職するのですか？」

「めぐみんがいるし、当分は魔法職は必要ないだろ」

そうですか…：とあからさまにしよんぼりするめぐみんに後ろ髪を引かれる思いだが、俺は魔法使い系の職業に転職する気はない。

物理でダメなら魔法で！が売りの魔法と物理の合わさった職って便利だろうか？

俺たちは身体を洗い、汚れを落とした後湯船に浸かる。

みんなと世間話をしていたらちようどいい時間になった

「つばあ！ さてと、私は先にかかるからね」

「おいよ、めぐみんはどうする？」

「私も上がりますよ……ハルヒトはまだ入るんですか？」

アクアが湯船から上がり、めぐみんに俺がどうするのかを聞くと、  
続くように立ち上がる。

「俺はもうちよい浸かるよ。 長風呂は文化だ」

「そうですか？ のぼせないように注意してくださいね、では後で酒  
場で落ち合しましょう」

「はいよー」

俺はめぐみんに返事を返して、湯船に浸かる。

やはり、風呂はいい……身体を清潔に保つ事と、疲れが抜けていく  
感覚は日本人が好むことだ。

数分後に風呂から上がった俺は、清潔なタオルで体の水滴を拭き取  
る。

受付のおばちゃんに頼んでおいた速洗濯の代金を払って服を受け  
取り、着る。

この速洗濯は受付のおばちゃんに頼むと魔法を用いて洗濯から乾  
燥までを一瞬で終わらせるサービスである。

若干服が焦げるのが玉に瑕なのだが、今日はうまいことやってくれ  
たらしい……焦げた匂いがしない。

依頼主の幸運の値に依存すると聞いているが、真偽は定かではない  
……ぶつちやけると、二回ほど衣服が焦げた。

さてと、ギルドに向かいますか。

☆このすば！☆

「なあ、スキルはどうやって覚えればいいんだ？」

カエル討伐の翌日、俺たちは遅めの昼食を取っていた。

俺の眼の前ではうちのパーティーに入るまでろくな物を食べるこ  
とができなかったのだろう。

めぐみんが一心不乱に定食に食らいついており、俺の隣では近くの

店員さんに定食のおかわりを頼むアクア……年頃の女とは思えない食いつぶりである。

「スキルの取り方か？ 冒険者カードの習得可能スキル欄にある好きなスキルを……ってカズマは冒険者だったな」

「冒険者は誰かに、スキルを教えてもらう必要があるわ。例えばハルヒの持つ〈狙撃〉を覚えなければまず目で見て、そしてスキルの使用方法を教えて貰えばいいわ。教えて貰えばカードの習得可能スキル欄に、その項目が現れるからスキルポイントを使ってスキルを習得すればいいの」

俺の言葉をアクアが引き継いでくれたので俺も冒険者カードを見直す。

俺の持っているスキルでカズマでも使えそうなのは……狙撃と弓くらいか……あとは片手剣くらいだろうか？

「それじゃあ、めぐみんに教えて貰えば俺でも〈爆裂魔法〉が使えるようになるってことか？」

「その通りなのです！」

「うおっ！」

カズマの何気ない一言を拾ったためぐみんが食いつく……爆裂魔法の同志を見つけたと言わんばかりだ。

「その通りですよカズマ！ まあ、習得に必要なポイントはバカみたいに必要ですが……。冒険者は、アークウィザード以外で唯一爆裂魔法が使える職業です。爆裂魔法を覚えたいならいくらでも教えてあげましょう。と言うか、それ以外に価値のあるスキルなんてありますか？ いいえ、ありませんとも！ さあ、私と一緒に爆裂道を歩もうじゃないですか！」

めぐみんの熱弁、ずいと寄せる顔が近いのでカズマがテンパっていた。

「ちよ、ちよつと待て！ おち、落ち着けロリっ子！ つーか、スキルポイントってのは今3ポイントしかないんだが……」

「ろ、ロリっ子……!?」

熱弁していたためぐみんはカズマにロリっ子呼ばわりされたためか意

気消沈：相当ショックだったようだな。 いやまあ、ロリには違いないが。

「冒険者が爆裂魔法を習得しようと思うなら、スキルポイントの10や20じゃ効かないわよ？ 十年くらいかけてレベルを上げ続けて一切ポイントを使わず貯めれば、もしかしたら習得できるかも？ つてくらい」

アクアがめぐみんの話を引き継いで説明をくれるが、十年でも取れるのは取れるんだな。

「待てるかそんなもん」

「…それでも、十年くらいで習得はできるんだな」

俺としては至極どうでもいい話なわけだが。

「ふ…。 この我がロリっ子…」

しょんぼり項垂れるめぐみんに俺はあとでネロイドをおごつてやろうと思った。

「しかし、せっかく多彩なスキルを覚えることができる冒険者なんだからなあ…。 色々覚えておきたいわけなんだが…アクア。 お前、なんか便利なスキル持ってないか？ できれば習得ポイントが少ない方がいいんだが」

いや、アクアは確か〈宴会芸〉とか言う戦闘とは無関係なスキルをとつていた気がするが…

「…：…しようがないわねー。 言つとくけど私のスキルは半端ないわよ？ そう誰にでもホイホイ教えるもんじゃないんだからね？」

神妙な顔をして頷くカズマに満足したのかアクアは手に持っていた水の入ったコップを何を思ったのか頭に乗せる。

そして、ポケットから取り出した何かの種をテーブルに置く。

「このコップにこの種を指で弾いて、一発で入れるとあら不思議！ コップの水を吸い上げた種はにきよにきよと…」

「誰が宴会芸スキル教えるって言ったこの駄女神！」

「って宴会芸じゃねえか!? なんでそんなの取る余裕があるのさ!？」

「ええ——!？」

思わず俺も突っ込んだ…いや、立派な支援スキルなだけどき、宴



会芸も。

俺とカズマに突っ込まれてショックを受けたのか、アクアはショボンとしながらテーブルの上の種を指で弾いて転がし始めた。

いやまあ、自慢のスキルを教えようとして突っ込まれたら落ち込むかもしれないが…目立つから頭の上のコップを下ろしてほしい。

「ハルヒトのスキルはなんかいいのあるか？」

「うーん。俺のスキルか…狙撃スキルと弓スキルでも覚えるか？」

俺には関係のないが、使う場合は矢弾代がかかる」

カズマが俺にも聞いてきたので無難なやつを教えようかと思っていると、笑い声が聞こえた。

「あっはっはー。面白いねキミたち！ ねえ、キミがダクネスが入りたがってるパーティーの人？ 有用なスキルが欲しいんだろ？ 盗賊スキルなんてどうかかな？」

隣のテーブルから明るい声が聞こえた。

反射的にそちらを見ると2人の女性がテーブルに腰掛けてこっちを見ていた。

1人は軽装で盗賊風、頬に小さな刀傷がある銀髪の美少女。

もう1人はカズマよりも身長が高そうな、フルプレートアーマーを身に付けた金髪の美女だ。

「えっと、盗賊スキル？ どんなのがあるんでしょう？」

カズマの質問に上機嫌で盗賊風の少女は応える。

「よくぞ聞いてくれました。盗賊スキル発動使えるよー。罠の解除に敵感知、潜伏に窃盗。持ってるだけでお得なスキルが盛りだくさんだよ。キミ、職業の冒険者なんだろ？ 盗賊のスキルは習得にかかるポイントも少ないしお得だよ？ どうだい？ 今ならクリームゾンビア一杯でいいよ？」

「安い…まあ、どうするかはカズマ次第だな」

「よし、その話乗った！」

俺のつぶやき<sup>後</sup>押しにカズマは嬉々として店員を呼ぶ。

「すんませーん、こっちの人に冷えたクリームゾンビアを一つ！」

「あ、そうだ。用事があるんだった。また後でな」

そう言い残して俺は、席を後にする。

☆KONOSUBA☆

ハルヒトはとある道具屋を訪ねた。 カランコロン、とドアを変えた時に音がして、店の奥の方から「はあくい」と彼女には聞き慣れたはずの声、間延びした声が聞こえた。

「いらっしやいませ！ つてアレ？ マスターじゃないですか」「んあ？… なんでお前が店番してんだよ」

ここはへウイズ魔道具店。 色々な魔道具を扱う店で、店主のウイズは引退した歴戦の大魔導士、アークウイザードである…と、それは表向きの情報。 ウイズには裏向きの情報もあるが、ハルヒトはどちらとも知っていたりする。

「えつと、ウイズが、蓄えの砂糖がなくなつて栄養不足に、そのせいか自然成仏寸前で…私が繋ぎ止めてますけど」

「それを早く言ってくれよ!」

ハルヒトはそう言うや否や、カウンターの奥の部屋に上がり込み、そこで目を回している、半透明になりかけた…茶髪の美女の肩を揺すった。

「おい、ウイズ！ 三途の川を渡るにはまだ早いぞ！ へドレインタッチ<して生命力を!」

「は、はひい…へドレインタッチ<っ…」

ハルヒトが女性の手を取ると、淡くその手が光った。

すると、彼女は軽い倦怠感に襲われる。 が、それは彼女にとって、苦になるものではない。 しかし、だんだん目眩の感覚を覚えだして若干焦燥し始めた時に、美女…ウイズの身体ははつきりとした輪郭を取り戻し、半透明になりかけた体も元に戻っていた。

「ごめんなさい、大丈夫？ ハルヒトさん」

「この程度なら問題ないさ…少しばかりクラクラするが」

「うう、ハルナ様から生命力を譲渡してもらえばいいんですが…」

「それをしたらウイズが成仏もとい強制昇天ものですから! 私がものすつごいあと味悪いですから、やめてください!」

ウイズはすこししよんぼりしていた。 先程から成仏だの昇天だ

のの単語が出ているが、ウイズはリッチーと呼ばれるアンデットである。

アンデットの王。リッチーはヘノーライフキングとも呼ばれる大魔導士が禁呪を用いて神の説く理を捨てて不死となった存在だ。

そんなリッチーがなぜこの街にいるか…まではハルヒトも把握していないが、詮索するつもりもなかった。

何せ、ウイズは人を襲わない。それどころか集合墓地の迷える魂たちを天に導くプリーストの真似事までしているため、人類の味方であるとハルヒトは判断しているのだ。

「たく、いつでも頼ってくれてもいいって言ってるじゃねえか。

こっちかって頼るばかりは嫌だって言うのに」

「す、すみません…」

「いや、そこは謝るところじゃないから…はあ、まあいいや。今日も例のアレを頼みに来た」

「あ、はい。〈レベルドレイン〉ですか？」

「ああ、頼むよ」

集合墓地のゾンビの討伐の折にウイズと出会ったハルヒトはその人柄と行動を見て思わず「あんたは天使か」と突っ込んで以来の付き合いとなつている。何より、ハルナが彼女をいたく気に入ってしまった、ハルナはよくこうしてウイズの店に遊びに来ているのだ。

そして、リッチーは最高位のアンデット故に強力なスキルを幾多も有している。その中でもヘタツチ系は他者より生命力を奪ったり、魔力を奪うことも可能らしく、意識して相手に触れると、意識した状態異常を引き起こせるトンデモスキルなのだ。

そして、ハルヒトは定期的にウイズに〈レベルドレイン〉を行使してもらい、レベルを下げている。

実はレベルが下がるスキルや薬品がこの世には出回っている。しかし出回っているが偽物だったり、高価だったりとおいそれと手を出せるものではない。そこでハルヒトはリッチーのウイズにそれを聞き、定期的にレベルを下げらようになったのだ。

と言うのも、レベルが下がることに関して、デメリットが存在しな

いことにある。

レベルを上げれば、ステータスが上昇する。そして上昇したステータスはレベルが下がっても変動しないのだ。

つまり、レベルを下げてまたレベルを上げれば、何度でもステータスが成長するのだ。

応じてスキルポイントも上昇するし、レベルを下げてても蓄えたスキルポイントはそのぶん減らないのだ。

言い切ろう、メリットしかない。リッチーの呪詛の類は確かに体内に流れ込むが、ハルナにそれを浄化して貰えば問題ないので、実際のところはハルヒトにしかできないことなのではあるが。

「今回もレベルを3下げればいいんですね？」

「おう、今日にでも上級職に成ろうと思つてさ…いい加減に中級職からクラスアップしてくださいとルナさんに泣き付かれた」

こうして、ハルヒトはクラスアップに必要なレベルを維持しながら、レベルをダウンさせてもらうのであった。

☆このすば!!☆

俺がギルドに戻ると、カズマもスキルを習得して戻ってきていた。

「公の場でききなりぱんつ脱がされたからって、いつまでもメソメソしてもしょうがないね！ よし、ダクネス。あたし、悪いけど臨時で稼ぎのいいダンジョン探索してくるよ！ 下着を人質にされてあり金失っちゃったしね！」

「おい、まてよ。なんかすでにアクアとめぐみん以外の女性冒険者達の目まで冷たい物になつてるから本当に待つて」

早口で弁明するカズマの声…ぱんつを脱がしただと？

「戻ってきたらなんの騒ぎだ、何やったんだよカズマ…」

「ハルヒト!? どこ行ってたんだよ！」

とまあ、カズマが経緯を俺に話すのだが…搔い摘んで、経緯をまとめると

「なるほど、スキルを習つて実践して相手のものをランダムに取るステイルでクリスさんのぱんつを脱がし、彼女の有り金全部とぱんつを交換したつてことか？」

神妙な顔して頷くカズマ：悪気はなかったと見るか。

「…すまなかった、クリスさん。うちのバカがやらかしたことに  
ついては謝らせてくれ」

俺は彼女に深く頭をさげる…

「いいって、いいって！ あたしが持ちかけた賭けみたいなものだつ  
たし：本当に、気にしないでね？ でも、これくらいの逆襲はしたつ  
ていいでしょ？」

「は、はあ…」

「それじゃあ、ちよつと稼いでくるから適当に遊んでいてダクネス！  
それじゃあ行ってみようかな！」

悪戯な笑みを残してクリスさんはメンバー募集掲示板を見に行つ  
てすぐにパーティーを見つけたのだろう。

ダクネスと呼んだ人に手を振りながら、臨時パーティーと共にギル  
ドを後にしていった。

「えつと、ダクネスさんは行かなくて良かったの？」

俺の座っている場所の真ん前に、自然に座るダクネスつて人にカズ  
マが訪ねていた。

「うむ。私は前衛職だから前衛職なんてどこにでも有り余ってい  
る。でも、盗賊はダンジョンに必須な割に地味だからなり手があま  
り多くない職業だ。クリスの需要ならいくらでもある」

なるほど：職業によって需要があるないはやっぱりあるんだな。

めぐみんの話ではダンジョン探索は朝一からで：おそらく、クリス  
さん達はダンジョン前でキャンプするのだろうと。

「それはそうと、カズマは無事にスキルを覚えられたのですか？」

めぐみんがカズマにそう聞くと、ニヤリと不敵に笑う。

「ふふん、まあ見てろよ？ 行くぜ！ スティール！」

カズマが右手を突き出すように構えるとその手には黒い布が握ら  
れていた。

ぱんつだった

「なんですか？ レベルが上がってステータスが上がったら、冒険者  
から変態にジョブチェンジしたのですか？ …あの、スースーするの

でぱんつ返してください」

てか、めぐみん…意外と過激な下着を身につけてるんだな。黒とは驚いた。

「本当に故意でやってないんだよな？」

やった当の本人の慌てぶりからわざとじゃないとは思いたいが、ぱんつを返すカズマは一層小さくなっていった。

「あ、あれ!? お、おかしいな…こんなはずじゃ…。ランダムで何かを奪い取るスキルのはずなのに！」

周りの女性からの視線は零下を超えた凍える眼差し…全てがカズマに向けられている。

と、突然バンとテーブルが叩かれた。

椅子を蹴って立ち上がったのはダクネスさん…なぜにそんなに目を爛々と輝かせているんだ？

「やはり、やはり私の目に狂いはなかった！ こんな幼げな少女の下着を公衆の前で？ぎ取るなんて、何という鬼畜…！ 是非とも、是非とも私をこのパーティーに入れて欲しい！」

「いない」

「んんっ…!? くっ…！」

カズマの即答に頬を赤らめて体を震わせる…まさかこの人、Mツ気をお持ちで？

「ねえ、カズマ。この人誰？ この人が昨日言った、私たちがお風呂に入ってる間に面接に来た人？」

「ちよつと、この方クルセイダーではないですか。断る理由なんてないのでは？」

カズマがしまったという顔をする。

「…何か問題でもあるのか？」

俺がカズマに直球で聞くと手招きしてきたのでそっちに行く、ひそひそと

「めぐみん、アクアだけでも大変なんだぞ、これから…問題児がこれ以上増えたら俺とお前にかなりの負担になるだろ!？」

こんなことを言ってきた…まあダメなところもあればいいところ

もあるのが人だ…が、うちの面々はその振り切り方が極端ってわけなのだろう。

「組むだけ組んでみたらどうだ？」

とりあえず組んでみてダメなら断る…これでいいだろうとカズマに言う。

するとカズマは裏切り者と言いたげな顔で意を決したように表情を引き締めた。

「実はなダクネス。俺たちはこう見えて、ガチで魔王を倒したいと考えている」

カズマの意図を察した俺は口を出さず見守ることにした。

「ちようどいい機会だ、めぐみんも聞いてくれ。俺たちはどうあつても魔王を倒したい。そう、俺はそのために冒険者になつたんだ。

と、言うわけで。俺たちの冒険は過酷なものになるだろう…：特にダクネス。女騎士のあんたなんて、魔王に捕まったらそれはもうとんでもない目に遭わされる役どころだよな？」

「ああ、全くその通りだ！昔から、魔王にいやらしい目に遭わされるのは女騎士の仕事と相場は決まっているからな！それだけでも行く価値はある！」

「えッ!?!？」

「む？何かおかしなことを私は口走つたか？」

強い同意のダクネスさんに驚いた俺とカズマの声ハモる…同意するところじゃない気がするのだが、あれ？おかしいのは俺たちの方なのか？

「め、めぐみんも聞いてくれ。俺たちの相手は魔王だ。この世で最強の存在に俺たちは喧嘩を売るつもりなんだ。そんなパーティーに無理して残る必要は…：」

それを聞いた途端にめぐみんがガタンと椅子を蹴つて立ち上がる…：椅子に恨みでもあるのか、この連中は。

「我が名はめぐみん！紅魔族随一の魔法の使い手にして爆裂魔法を操りし者！我を差し置き最強を名乗る魔王！そんな存在は我が最強魔法で消し飛ばしてみせましょう！」

ギルド内の視線を集めて、めぐみんがそれはそれは見ていて清々しくも感じる厨二病宣言をした。

自信満々なドヤ顔してんじやないよ……魔王が爆裂魔法一発でノックアウトできるとかどんなイージーモードだよ。

「ねえカズマ、ハルヒ……」

がつくりと項垂れるカズマの袖をクイクイと引っ張るアクア。

「私、カズマの話聞いたら何だか腰が引けてきたんですけど。なんかこう、もつと楽しんで魔王討伐できる方法ない？」

アクアの発言にカズマがこめかみを押さえながら言った。

「むしろ、お前が一番やる気を出せ」

と、その時だった。

「緊急クエスト、緊急クエスト！ 街の中にいる冒険者の各員は至急冒険者ギルドに集まってください！ 繰り返します。街の中にいる冒険者の各員は至急冒険者ギルドに集まってください！」

受付嬢ルナさんの声が街に響き渡る……大音量のアナウンスが流れてきた。

マジックアイテムで音声を増幅拡大しているのだろう。

「おい、緊急クエストってなんだ？ モンスターが街に襲撃に来たのか？」

「もしそうなら緊急事態かもしれないが、おそらくへキャベツかな？」  
カズマの疑問、普通のファンタジーな異世界なら通るベタなイベントだと思う。

しかし、俺やダクネスさん、めぐみんがどことなく嬉しそうな雰囲気、不安を感じている様子はない。

「多分、キャベツの収穫だろう。そろそろ収穫の時期だしな」

「は？ キャベツ？ キャベツってモンスターか何かか？」

カズマが呆然とそんなことを言う。

すると、ダクネスさんとめぐみんが彼をかわいそうな人を見る目で見つめていた……そういや、こいつ知らんよな。

「キャベツとは、緑色の丸いやつです。食べられるものです」

「噛むとシャキシャキする歯ごたえの、美味しい野菜のことだ」



「そんなこと知つとるわああ！　じやあなんだ？　緊急クエストだの騒いで、冒険者に農家のお手伝いさせようつてのか？　このギルドの連中は？」

「いや、サンマの収穫のお手伝いの方が簡単なお仕事だろう…」

カズマがとうとう頭がオーバーヒートしたのか、説明を求めるようにアクアを見ると

「あ…カズマは知らなくて当然よね。　ええつと、この世界のキャベツは…」

アクアがなんだか申し訳なさそうに説明をくれようとするのを遮るようにルナさんが大声で説明を始めた。

「みなさん、突然のお呼び出しすいません！　もうすでに気がついている方もいらつしやると思いますが、キャベツです！　今年も秋キャベツの収穫時期がやってまいりました！　今年の秋キャベツは出来が良く、一玉の収穫につき報酬は一万エリスです！　すでに街中の住民の皆様には家に避難して頂きました！　ではみなさん、できるだけ多くのキャベツを捕まえ、ここに納めてください！　くれぐれもキャベツに逆襲されて怪我をなされないようお願い致します！　なお人数が人数。　額が額なので、報酬の受け渡しは後日まとめとなります！」

カズマの顔に怪訝なものを聞くような雰囲気。　キャベツの収穫？　キャベツに逆襲されて怪我をなされないよう？　そんなことを考えているように見えるが。

「…はっ。」

彼の疑問はさておき、ギルドの冒険者連中は歓声をあげる。　連中を追うように、ギルドの建物を出ると…

街中を悠々と飛び回る緑色の丸いやつ…紛れもなくそれは…キャベツだった。

カズマがことを把握できずに立ち尽くしていると、いつの間にか彼の隣に来ていたアクアが厳かに告げる。

「この世界のキャベツは飛ぶわ。　味が濃縮してきて収穫の時期が近づくと、簡単に食われてたまるものかとばかりに。　街や草原を疾走

する彼らは大陸を渡り、海を越え……最後には人知れぬ秘境の奥でひっそりと最期を迎えると言われているわ。なら、私たちは彼らを一玉でも多く捕まえて美味しく食べてあげようってことよ」

「俺、屋敷に帰って寝ててもいいかな」

呆然とつぶやくカズマの隣を勇敢な冒険者達が氣勢を上げて駆け抜けていく……彼らもキャベツの生き様に感化されて熱く滾る漢達なのだろうか？

俺はハルナに借りている倉庫インベントリからイチイの弓と矢筒を呼び出すと矢筒を腰に固定して左手には弓を持つ。

矢筒には倉庫から一緒に呼び出された石の矢が詰まっている。

「よし、カズマ……。俺はキャベツの収穫に行つてくりゆうっ！」

おそらく俺の目は\$になっているだろう……一万エリス……待ってろよおおお！

「あ、おい待てハルヒト！ お、おいていくなあああ!!」

「あ、待ってよハルヒー!!」

あ、そうそう。

これは余談だが、ダクネスさんは……不器用だった……剣がなかなか当たらないクルセイダーというのも納得。

しかし、硬かった……最硬にな!

☆KONOSUBA☆

「キャベキャベキャベツ！」

キャベツの鳴き声がこだまするその戦場で、ハルヒトは踊る。彼

女が引きしぼる弓の弦はキリキリと不快な音響を鳴らす。

「……狙撃！」

ヒュツと放たれた矢はハルヒトに打撃を加えようとしていたキャベツを射抜き、地に落とす。

「狙撃！」

矢を番え、撃つ……番えて撃つ……

矢弾はハルヒトからしたら無限と言っても過言ではない。

倉庫には有り余るほどに備蓄されているためストックされた矢がまだまだあるのだ。

ハルヒトが矢を放つた際に転がるキャベツはゆうに八十玉を超えていた。

やがて矢筒の矢は尽きるが、ハルヒトは矢筒と反対側に吊るしてあった鋼の剣を抜くとそれを地に突き刺した。

「ちようどいいい……試すか」

ハルヒトは体内に棲まう存在、ハルナを通じて出会った精霊に呼びかける。

「プロムナード精霊回廊を使うのは久々だが……いつちよやってみますか！」

地に刺した黄昏の剣を抜き、天に掲げるようにして構えてハルヒトは詠唱を唄った。

剣を右手に持ち、弓を倉庫に格納したハルヒトは左手を突き出す。

その突き出された手の先には赤い火球が宙に浮いていた。

「全てを焼き焦がす火炎の王よ。 汝に我は願う。 我を滅ぼそうと、我を倒そうとせん彼の敵に終焰を与えよう」

ハルヒトの手先の火球が小さく収縮していく。

「私の願いは汝の、汝の願いは私の願ひ。 永劫の時を焼却せし汝の咆哮を轟かせよう……！」

やがてその火球は徐々に大きくその魔力密度を増して行く……そして……ハルヒトは火炎の王の名と共にその終焰を解き放つ！

「ヘロアー・イフリート・クリムゾンッ！」

解き放たれた焰が、辺りを赤く照らし出す！

着弾点を中心に巨大な火柱と大気が急加熱されたことにより上昇気流が発生……火柱に引き寄せられるようにしてキャベツ達は上昇気流に吸い寄せられていった。

中級魔法の〈クリムゾン〉にハルヒトは炎の大精霊、《炎王イフリート》の力を借り、それを上級魔法に近い威力に増幅させた。

その威力は火炎魔法の中で最強と謳われる〈インフェルノ〉には劣るが、引けを取らない威力になる。

紅蓮の焰が飛来するキャベツ達を包み、焼かれたキャベツ達はいい火加減で火を通されていたのであった。

「……後日を楽しみだ……！」

ハルヒトのつぶやきは近くで呆然と見守っていたカズマとアキラに聞こえることはなかった…。

(続く)

## 旧タイトル版 追いつき次第削除 プロローグ

「剣無春人けんなしはるひとさんと佐藤和真さとうかずまさん、ようこそ死後の世界へ。あなた方はつい先ほど、不幸にも亡くなりました。お二人とも若くして短い人生に終止符を打ったわけで……」

真っ白な部屋の中で告げられるその宣告に俺は「死んだ」と認識する。

事務的な配置の二つ並んだ椅子にいつの間にか腰掛けていた俺と隣に座る同い年か、年下か……な男は何かを思い出すようにぼうつとしていた。

俺たちと向かい合わせに座る一人の女性……いや、人間じゃないこの人は。

自ら光るような艶を持つ柔らかな印象の透き通った腰までの長さはありそうな水色の髪。

年は俺とあまり変わらなさそうで同い年だろうか。

出るところはしっかりと出て無駄のない健康的で完璧な造形美の体は淡い紫色の羽衣に包まれていて神々しさを感じさせてくる。

……女神。

そのワードが頭に浮かんだのは無理もない……そうに違いないだろう？

透き通った髪と同じ色の瞳をパチパチとさせながら俺と隣の男を凝視する美少女をよそに、記憶を手繰り寄せた。

□  
俺は毎日の日課である模造刀だが日本刀の素振りを終わらせて、家の母屋で寛いでいた。

時刻は昼下がりとなったこの日、俺は学校を休んでいた。

理由としては付き合っていた女子との破局が原因で元カノと顔を合わせづらかったこともあり、仮病を使って休んだのだ。

女々しいと笑うのならば笑え。まあ、己の心の中にぽっかりと空い

た穴をふさぐのには少しばかりの充電期間が必要だと思うのだ。

明日からは気分を変えて心機一転、明るく前向きに学校に登校しよう……そう決意しながら俺は近くの河川敷にてランニングをこなそうと家から出た。

この選択が間違いだったのかもしれない……少なくともこの時はあんな事態に遭遇するとは思ってもしなかったが。

川端まで徒歩でそこまでの時間はかからないのだが、足取りは重い。

河川敷で始まったあの恋を引きずるように、歩いていたら無理も無いか？

「あ……春人!？」

「……な、夏海」

いつの間にか俺は未練の残る恋に引き摺られてきてしまった場所には、元カノの……西蓮寺夏海がいた。

何故ここにいるのかを聞いたら夏海も仮病を使って学校を休んだらしい……同じ行動に驚き戸惑ったが……俺たちは自然と笑いあっていた。

「皆勤の春人が仮病ねえ……」

「うるせえよ……大体誰のせいで休んだと……」

「プークスクス！ 女々しすぎよ、春人は」

「わ、笑うな！ 女々しいのは理解してるよ！」

そんな会話から始まり。結局、長電話しているみたいに話し込んでしまい……

「もう4時か……」

「そうね……楽しい時間で本当にすぐ終わるよね」

「あ、ああ。 そうだな……」

楽しいな談笑から急降下して通夜かよ、今日は。

「あの、さ。 夏海」

「何？ 春人」

恐る恐る切り出す俺……

「今回の恋は俺と君の価値観のすれ違いが原因で終わったよな」

「う、うん。そだね」

「だからさ、もしなんだが……俺がもう少し大人になったら……また一緒に……」

俺の決意を話そうとした時……

「おいそこのガキ！ どけえ！」

後ろから大声が聞こえて来たと思ったら直後に俺は何者かによって殴り飛ばされた。

「いつてえ……」

俺が起き上がるとすぐに悲鳴が聞こえた

「い、いや！ やめて！」

「いいじゃねえか、よおな？」

服を裂かれた夏海の下着、その上の白い肌の眩しい鎖骨あたりを見知らぬ男が舌を這わせていた。

よく見ると、その右手には刃渡が12センチほどのナイフが握られている。

最近、町では少女を狙った強姦惨殺事件がよく起きていた……俺と同年代の女子を狙う卑劣で残忍な行為……幾人かの被害者を出しながらも犯人は捕まっていなかった。

目の前のこいつが件の強姦魔……！

刹那に、どす黒い感情が俺の中に芽生えた……ああ、これが「殺意」か……そして並行して……湧き上がってくる勇氣と「護る」という意思。

俺の手元に転がっていた親指ほどの大きさの石つぶてを幾つか拾うと、そのうちの一つを強姦魔のこめかみに目掛けて投げる。

「あ、だ!! いてえ……ぎゃっ!？」

コントロールには自信があつてね……子気味のいい音がなり、遅れて男が夏海から離れて側頭部を押さえながら俺を睨みつけてきた。

「逃げろ、夏海！」

立ち上がった男の脛に突った石つぶてを投げつけてダメージを与えると俺は拾った太めの木の枝を上段に構えて、微動だにしない。

目をつむり、精神を集中させる。

「死ねクソガキがあああー！」

ナイフを両手保持で突き出し突進してくる男……引きつけて……枝を袈裟斬りのように振り下ろした。

バキッ！

枝が折れ、肩口を強打された男がナイフを落としながら悶えるのを確認した。折れた枝を放り、足元に転がっていたナイフを傍に蹴飛ばす。

「大丈夫か、君たち!？」

「ん？ あ、警察を呼んでもらってもいいですかね？ あと、救急車」

駆け寄ってきた近所のおじさんに110当番を頼み、男に気を緩めて背を見せてしまう。

実は、感触的になんだが男の鎖骨を折ってしまった気がする……こりや傷害罪も覚悟しないとな……

「救急車に乗るのは……お前だよクソガキ……!」

どすっ……

鈍い音がした……

そして直後に押し寄せてくる、焼け付くような激しい痛みと「何か」が体から抜けていく感覚を精神論の「ガマン」で押しこらえて俺は最期こチカラを振り絞る……火事場のクソ力とはこのことを言うのだろうか。

「往生際が悪いんだよ、クソ野郎が!」

重心と体重をすべて乗せて振り抜いた拳がダメージが抜けきつていなかったのか、フラついていた男の顎にクリーンヒット。

その体を宙に浮かせた野郎は吹っ飛んだ。

「は、春人!？」

足元を見ると、そこには血溜まりができていた……それと同時に……力が抜けた……膝をつき、地に伏せる。

朦朧とする意識、遠くから聞こえる夏海の声……

救急車とパトカーのサイレンが近づいてくる……

俺の体の感覚はもうない……瀕死なのだろうな……



「春人！ 死なないでよ、春人！」

「バーロー……死ぬわけねえだろうが……この俺が……」

気休めと我ながら死にかけのくせにとんでもないデマカセを言ったもんだよな……血溜まりに沈む俺の体に抱きつく夏海の体は血塗れなのは、当たり前か。

「なあ、夏海。こんな別れになっちまうのは……申し訳ないんだがよお……最期ぐらい笑って過ごそうや……」

「春人……？」

閉じる人生に未練はない……

「ロクな取り柄のない……俺でも……好きな女ヒトを護れるんだな……夏海……今生の別れ故にさ……ひと言だけ……こんな終わりの恋にめげない……幸せを……掴んでくれよな……」

「こんな時に何言ってるのよ、春人！ もうちよつとで救護隊の人が来るからあきらめたらだめ！」

「君！ 諦めてはだめだ！」

背中に突き刺さったナイフを抜いてハンカチと付けていたベルトで止血してくれたオツサンに力ない笑みで礼を言うと、そろそろ限界が近くなってきた……

人生に辛い山道あれば楽な下りの坂道がある。

俺の峠越えはその道半ばで終わったそれまでのこと……だが、夏海のそれはここで終わりじゃない……

「ありがとな、夏海……少し休ませてくれ……」

鉛よりも重くなった瞼を閉じて俺は眠る……思い女の、その胸の中で……永遠の眠りについた。

「春……人……？ 春人、ねえ。春人！ 春人オオオオ！」

■ 最期に、夏海の絶叫が聞こえた気がした。

「あいつはどうなったんだ？」

「もちろん、あなたとの約束を守って幸せになることを誓ったわ。

彼女の人生は薔薇色を超えた黄金色の人生だから安心してあげて。

「これが未来予想図だけど……」

少女が一枚の写真を俺に手渡ししてくる……それは——イケメンが彼女の手を取り、ウエディングケーキにナイフを差し込んでいるところを激写した写真だった。

そうか、幸せになつてくれたのか。

「あの、一つだけ聞いても？」

隣の少年が質問をする……確か佐藤和真だったか？

「どうぞ？」

「あの子は無事なんですか？　俺が突き飛ばしたあの女の子は生きていますか？」

……こいつも思い女を庇って死んだのか？

「生きてますよ？　もっとも、足を骨折する大怪我を負いましたが」

安心したのか胸をホツとなでおろす少年と対照的に少女が小首を傾げる。

「まあ、あなたが突き飛ばさなければ……あの子は怪我もしなかったんですけどね」

「……へ？」

「……ん？　話が見えんのだが？」

俺はこの少年の最期に立ち会ったわけじゃないから何が起こったのかは知らん、知りようがない。

「あのトラクターは本来なら、あの子の前で止まったんですよ。当たり前ですよ。だってトラクターですもん。そんなにスピードなんて出せないし。つまり、和真さん。あなたはヒーロー気取りで余計なことをしたってわけです……プークスクス！」

……は？

「……今なんて？　トラクター？　トラックじゃなくて!？」

「ええ、トラクターですけど。あの女の子だって、大型トラックが迫つて来れば流石に気づくし当然逃げますよ」

……俺はこの会話に口を挟むべきじゃない……空気を読んでここは黙っておくか。

「え、じゃあナニ？　俺の死因はトラクターに耕されて死んだって事？」

「いいえ、ショック死ですけど。トラックに轢かれたと勘違いして、あなたショックで死んじゃったんですよ。私、この仕事長くやってくるけど……こんな珍しい死に方したのはあなたが初めてよ?」

……………ぷっ

「あなたはトラクターに轢かれそうになった恐怖で、失禁しながら気を失い近くの病院に搬送。『なんだこいつ、なっさけねーww』と医者や看護婦に笑われながら、目を覚ますことなくそのまま心臓麻痺で……」

「やめろおおおお! 聞きたくない、聞きたくねえ! そんな情けない話は聞きたくない!」

……………たえろ、堪えろ俺……ぷっ……

耳を塞ぐ少年に近づく少女はニヤニヤと笑みを浮かべながらその耳元で……わざわざ俺にも聞こえるトーンでしゃべる。

「現在あなたの家族が病院に駆けつけましたけど、悲しむよりも先にその死因に家族さえも思わず吹き出して……」

「止めて止めて! なあ、嘘だろ!? そんな情けない死に方ってあんまりだろ!?」

「ぷっ……ぷ……ぷ……ぷ……」

「あんたも笑うなよ! せめて同情してくれよ!」

しゃがみこむ少年にすまないと会釈をして俺は息を整えた……マジで笑い転げるところだった。

「……さて。私のストレス発散はこのくらいにしておいて。改めて、私の名前はアクア。日本において若くして死んだ人間を導く女神よ」

……しかし、この女神……いや、アクアさん——女神らしからぬ性格だよ。

人をからかうのは邪神とか悪神のすることだろうに。

とまあ、いろいろな説明を受けたのだが、天国という名の無間地獄に行くか、赤ん坊に転生するか……もしくは……

「異世界に転生してみない?」

と言われた……

「もちろん私たち神々の親切丁寧なサポートによってなんのリスクもなくその行く世界で読み書きができるようにしてあげるし、財宝でも特殊能力でも、神器クラスの武器でも一つだけあげるわ！」  
「勇者候補になれってことか」

異世界転生……生かされる（誤字にあらす）世界には魔王が存在しており、日々人々はモンスターの脅威に怯えながら生きているそうなので……そこで、俺らのような若者を勇者候補に仕立て上げ、転生させてその地にて生活をさせるとのこと。

……悪い話じゃない。天国が地獄と変わらんのであれば迷うことはいらないだろう。

「和真さん、あなたはどうするの？」

「あんたはどうするつもりなんだ？」

「君が聞かれているんだろうが……まあ、そっちの方が楽しそうなので異世界転生させてもらおうよ」

「なら……俺もそっちでいいや。なんの娯楽もない天国に行くくらいなら」

「わかったわ。じゃあ、この中から持つていく能力や装備を一つだけ選びなさいー！」

分厚いカタログを俺と佐藤に渡して女神はと言うと……椅子に座つてスナック菓子をぽりぽりと食べ始めた……職務放棄はいくなくいぞ、アクアさん。

とりあえず、俺は数ある特殊能力や装備の名称を見ながらどんな能力かを予測する……だつてこのカタログ……武器や能力や性能が数値化されていないイラストだけなんだもん。

やはり、数字にできないほどに反則能力や性能なのだろうか？

「よし、俺はこの『武器鍛製』を持つていくことにするよ」

見た感じの能力予想は武器、防具を作り出せる能力と予想する。

「わかったわ。なら、ちよつと待つてね……ねー、早くしてー？ どうせ何選んでも一緒よ。引きこもりのゲームオタクには期待はしてないから、なんかテキストに選んでサクッと旅立ちちゃつてー」

「オタクじゃないから……」 出かけて死んだわけだし、引きこもり

でもないから……!」

必死な否定にも興味が無いのかアクアさんは枝毛をいじりながら言葉を返す。

「そんな事どうでもいいから早くしてー。この後も他の死者の案内が残ってるからね?」

その返答にカチンときたのか、佐藤は下を向き俯向く。

そして何かを決めたような顔をする……

「じゃあ、決めてやるよ……俺が持つていく「もの」だろ? ……あんた」

彼が指差した先にはアクアさん。

……

……え?

「ん。それじゃ、二人とも。そこの魔法陣の中心から出ないように……今なんて言ったの?」

俺たちに指示を出そうとしてハタと動きを止めるアクアさん……と、その時。

「承りました。では、今後のアクア様のお仕事はこのわたくしが引き継ぎますので」

突然現れたのは天使っぽい羽を生やしたお姉さんだった。

「……え!?!」

青く光る魔法陣ぽいのが俺と佐藤の足元に灯る……おお、なんだこれ。

「ちよ、え、なにこれ。え、ええ、うそでしょ? いやいやいやいや、

ちよつと、あの、おかしいから!?! 女神を連れて行くなんて反則だから! 無効でしょ!?!? こんな無効よね! 待つて! 待つて

!?!?」

涙目でオロオロ、滅茶苦茶に慌てる女神アクア……そりやそうだな。な。

「いつてらっしやいませアクア様。後の事はお任せを。無事魔王を倒された暁には、こちらに帰還するための迎えの者を送ります。

それまでは、あなた様のお仕事の引き継ぎはこのわたくしにお任せ

を」

「待って！ ねえ待って！ 私、女神なんだから癒す力はあるけども戦う力なんてないんですけど！ 魔王討伐なんて無理なんですけど!!？」

泣き続けるアクアさんを無視して俺と佐藤に向き直る天使っぽいお姉さんは柔らかな笑みを浮かべる。

「剣無春人さん、佐藤和真さん。あなた方をこれから異世界へと送ります。魔王討伐のための勇者候補の一人として。見事に魔王を倒された暁には、神々からの贈り物を……どんな願いも一つだけ叶えてさしあげましょう」

「どんな願いも一つだけ……ねえ」

「ねえ待って！ そういうカツコイイ事告げるのって、私の仕事なんですけどおおい!?!」

「まあ、同情はしておくか……この女神様には。」

「散々バカにした男に、一緒に連れて行かれるってどんな気持ち？ ねえねえ、どんな気持ちー?? おい、俺が持つていく☒者☒に指定されたんだ。女神ならその神パワーとかでせいぜい俺を楽しませてくれよ?。」

「いやあー！ こんな男と異世界行きだなんて……いやあああ!」

「さあ勇者たちよ！ 願わくば数多の勇者候補の中からあなたが魔王を打ち倒す事を祈っています。……さあ、旅立ちなさい!」

「わ、わ、私のセリフなんですけどおおい!?!?」

● 厳かにお姉さんが告げると……俺たちは極光に包まれた!

石畳の道を荷馬車が走る。

発展の見えない、中世ヨーロッパを彷彿とさせる街並みに俺はあつけにとられた。

「……マジで異世界だ。……おいおい、本気で異世界だ。え、本当に?

本当に、俺ってこれからこの世界で魔法とか使ってみたり、冒険とかしちやったりすんの?」

「あ……ああ……あああ……」

「落ち着け、アクアさん……あれ？声がなんか変だな……」

隣で頭を抱えるアクアさんの事を落ち着かせようと俺は彼女に話しかける……が、アクアさんで俺と同じくらいの身長だったのか？

それにやけに声が高くなったような……

「えっと……誰？」

「なんだよ、俺の顔を忘れたってのか、佐藤……剣無だよ」

「……嘘だろ？ 君がああ剣無？」

……いや、待て……若干佐藤の方が身長が伸びてる……違う、いやそんなはずは——まさか……！

俺は意を決して、ガシツと自らの胸あたりを掴む。

むにゅうと指が沈む、マシユマロのような柔らかさに対して程よい弾力を感じる夢のように柔らかい感触がそこにあつた……そして……腹の奥が強張るような言いようなない感覚も……！

俺の胸にあるはずのない物があつた——おっばいが！

「なん で 女に なってんだあああああ!？」

俺の絶叫が街に響いたのは言うまでもなかった。

(続く)

## 冒険者登録と工事現場のお仕事を！

○

転生した俺の体は女体化と言う珍妙な不具合を起こしていた……  
辱めよりもひどい仕打ちだと思っぞこれは。

街並みにあつた姿鏡で己の姿を確かめた時はそれはそれは複雑な  
気分になつた。

アクアに負けない艶を持つ金髪のロングヘアに凛々しくも人当た  
りの悪そうな印象の目は翡翠色の瞳。

プロポーションはアクア並み……出るところはボン！と出ているウ  
エストは程よく引き締まっている……そんな体型だ。

身長は160センチくらいの将来モデルもいけんじゃねーかこれ  
？

「もう死にたい……」

「落ち着けて、ハルヒト。ただ性別が反転したじゃないか」

お気軽に慰めの言葉をかけてくる和真にイラつとした俺は

「そうか、ならここでお前の『アレ』を切り落としてやってもいいん  
だぞ？」

「すいませんでした！……てか、アクア。なんでこんなことが起  
こつたんだ？」

「わ、私に聞かないでよ……。まあ、心当たりはあるわ」

「心当たり？」

俺と和真がハモリながら疑問を口にすると、アクアさんがその心当  
たりとやらを語り出した。

ちなみに現在、俺たちは冒険者ギルドに来ていた。

あてもなく街を歩いていたら出会つたお姉さんに話を聞いて教え  
てもらつたのだ。

まあ、和真にはあの年頃のお姉さんに話しかけるのは至難の技とい  
うか公開処刑だろ？

思春期の少年にはハードルが高すぎるのだろう……まあ俺は心が  
男で身は女なのだが……。



ややこしいことこの上ないな全く。

「最近、何人かの勇者候補を送ったわけなんだけどその半数の人が性別が逆転する不具合を確認したの。大概の転生者には特典を渡した後の、神からのサポートは受けられないから、その性別のままに生きていくわね」

……何人かが、俺と同じ境遇のやつがいるってことか。

まあそいつらに関してには同情してやることにしよう……そうでもない俺の精神が保たないからな！

「なんでまたそんなケツタイな不具合が？」

「それがその……。最近の話なんだけど、転生システムに誰かが不正アクセスして以来こんな珍妙なことが起きちゃうようになってね……」

「その誰かとは？」

「私を知るわけないし！ 知ってたら面倒ごと起こしてくれたその誰かをぶん殴ってやりたいわよー」

……神も全能でないという事か。

「わかったよ……つか、その言い分だと他の勇者候補にも性転換の不具合が起き出したのがその不正アクセスが起きて以降確認されたみたいなの……？」

「そうなのよ。だから私も知りようがないってわけ……なんでいきなり「二人いつぺんに送ったらどうなるか」なんて試験運用的なことをやったのかなあ……」

……「試験運用的なこと」……だと？

「まあいい。まずはどうやって金を手に入れるかだよな」

俺たちには現実問題が訪れていた。

……冒険者登録料だ。

この世界では冒険者……とどのつまり何でも屋と言う職業がある。

この世界には、魔王がいる。

その魔王は魔王軍と幹部と思われる強力なモンスターを数体ほど従えているらしい。

冒険者ギルドはそんな魔王に対抗するために人間側が作った組織

である。

で、その冒険者になるためには……お金がいる。

まあ、当たり前といえればそうかもしれない。タダで冒険者になれたら苦労なんてないってわけだな。

お金が必要というわけなのだが、俺たちは無一文なので登録ができないわけで……。

「金目になりそうなものなんてないよなあ……ん？　なんだこれ？」

俺がポケットから引っぱり出したのは封筒……？

なんかよくわからんが赤い蠟に何かの紋章つぽいのが押された封蝋っていうのか？で封がされていた。

「ん？　なんだそりゃ？」

和真も気になるようで……とアクアがそれを見て口をあんぐりと開けている。

「女神のくせに、間抜けな顔してんじゃない。これが何か知ってるのか、アクアは？」

「女神のくせにはひどい！　えつと……なんだろう？」

「しらねえのかよおおう!？」

思わずダブルで突っ込む……いや、ほら……しかたないやん？

いかにも知ってると思わせるリアクションだよ？

「……まあいい。開けてみるぞ」

手紙の封を解いて中身の紙を出した。

そこには……なんだこの字？見たこともないぞ？

「これは神聖文字じゃない……。あんた達には読めないでしょうから、この女神のアクア様にかけてみなさい！」

言うや否やアクアは俺の手から手紙をぶん取るとふんふんと頷きながら手紙を読んでいる。

「なるほどね……あらかたのことはわかったわ。これは補填よ！」

「アプリで言う「運営からの補填」てことか？」

「天界が下界の会社の不具合の補填みたいなものを出すと思う？  
ブークスクス！　ちよーうけるんですけど！」

よし、コイツあとでしばこう……今は女神じゃないんだからな！

「まあいい。何が補填なんだ？」

「えつと、今回の性転換バグの補填と試験協力の報酬としてあなたには初期装備に追加して金一封を送らせていただきますだってさ」

「初期装備？ 金一封？ なんだそりゃ？」

「ほら、このチケットは魔法アイテムでハルヒト宛のものよ？ あとで職業が決まった時にでも使いなさいな。そんでこれが金一封ね」

渡された封筒の中には確かにコインがいくつか入っていたが……この世界では1円＝1エリスとのことだ。

で、数えてみたところ……5万エリスはあるな。

「よし、じゃあ冒険者に登録してくるわ！」

「あの、待ってくださいハルヒト様！ 卑しい私にお布施を……どうか施しを……！」

「オイ、ずるいぞアクア！ ……でもなんだ……その、ハルヒトさん。出世払いでいいですか？」

「……しゃーねーな……ついてこいよ」

「ありがとうございます！ ハルヒト様！」

「その言い方はやめろおお！」

顔を真っ赤にした俺の絶叫が昼間のギルドに響いたのは無理もない……恥ずかしいぜ、マジでよお。

○

「では、皆さんには先ほど説明いたしましたので……確かに人数分のエリスを頂戴いたしました。では、こちらのカードをお持ちください。」

免許証と同じくらいのサイズのカードを手渡してきた受付のお姉さんは俺たちに説明を続ける。

世界に生きるすべての生物には魂があること、然るべくはそれは魔物にも適応される。

そして冒険者にはレベルがある。レベルとは俺的に解釈すると、

魂の強さだと思う。

他の何かの生命活動にトドメを刺すと、その存在の魂の記憶、その一部を吸収できるとのことだ。

……まんまゲームだなこの世界のシステムは。

「では皆さん。この書類に必要な事項をご記入ください。あ、女性の方は体重を記されなくても結構ですので」

言われるがままに俺たちは必要事項を書いていく

身長は目測、体重はわからんでスルーして年は16。金髪に翡翠目……

「はい、ではこの機械に手をかざしてもらえますか？」

俺は指示されたままに水晶の下にいろいろな歯車が噛み合った機械の水晶の上に手をかざした……すると。

カタカタカタツ……

とタイプライターを打つような古風な音と共に光が放出されてその下に置かれているカードに文字を刻んでいく。

コピー機とタイプライターの複合機器みたいだな。

「はい、結構ですよ。ではステータスを確認させてもらいますね」

言いながらお姉さんは機器からカードを取り出すとそこに記されている数値を確かめている。

「え……う？ ええええ!?!」

仰天するお姉さん。なしてだよ、驚く要素がどこにある？

「はい？ どうかしましたか？」

「い、いえ……。筋力が平均より低いのは目立ちますが、他のステータスが平均以上！ 特に敏捷、器用さ、知力のステータスが高くて幸運、体力が平均より少し高いですけど……。といますか、この魔力どうなってるんですか!? 平均以上通り越して異常な数値ですよ!?!」

え、何それこわい。

と言うか、後ろの酒場まで聞こえたのか酒場の方からちらほらと人がやってきてるのが気になる。

いや、これは俺が転生者だからだろう……。補填と思おう、そうしよ

う。

「上級職のアークウィザードも夢ではないですよ！ ていうかアークウィザードが天職でしょう！」

「えっと……物理職でお願いします」

「はい、では物理職の希望ですね！ ……つて、はい？」

驚いてポロリとカードを落とす受付のお姉さん……俺、なにか変なこと言ったか？

「なにか？」

思わず俺が疑問符を浮かべるとお姉さんは引きつった笑みを浮かべながら俺に

「えっと……この筋力だと魔法剣士か盗賊か……軽装の近接職にしか」「魔法剣士!? あるんですか!?」「ひえ!? は、はい！ あります！ ていうか顔が近いですよおお!」

魔法剣士の職業があると聞いた時俺は思わず興奮してしまい、受付のお姉さんの腕を掴んでずっと顔を寄せてしまった……軽率な行動は控えよう、うん。

「あ、すいません……。興奮しちゃって……」

思わず謝罪した……だっってお姉さんの引きつぷりがなんか悲しかったから。

「い、いえ……すこし驚いただけですから。でも本当にいいんですか？ ステータス的にはアークウィザードの方が合っていますが……」

「下手に魔法使いから始めたら後が大変かなーと……それに、転職もできるんですよ？」

「それはそうですが……。いえ、人の決めたことに口を出すのはギルドスタッフとして失格ですね。では、魔法剣士で登録させていただけます！ それでは……ようこそハルヒト様！ 冒険者ギルドスタッフ一同、今後のご活躍をご期待させていただきます！」

こうして俺は〈魔法剣士〉になりました。

ちなみに俺の後ろに見てもらっていた和真は最弱職の〈冒険者〉に、アキラは上級職の〈アークプリースト〉になりました……うん、やっぱり

り女神すげえ。

そんなステータスの格差を感じながら俺と和真改めてカズマ、アクアの3人でパーティを組むのだった。

○

「よおーしご苦労さーん！お前ら今日はこれで上がってもいいぞ！

おい押すな並べ！ 今日分の日当を渡すぞ」

「お疲れっしたー！」

「したー！」

カズマとアクアが元気に挨拶をしながら日当を親方から受け取る  
が俺はフラフラとしながらその震える手で日当を受け取った。

「あ、ありがとうございます……」

「お、おう……。大丈夫か、姉ちゃん」

「たはは……。大丈夫です……」

取り繕いの営業スマイルは、悲しいが若干引き攣ったものだった  
……。

「体が資本なんなら大事にしな」

そう言い残して親方は帰って行った。

とまあ、死にかけの俺の挨拶……。

元ひきこもりでのカズマも元気に挨拶を返しているのがうらめし  
いが、これが男と女の差なんだろう。

疲れた……。心地よい疲れというよりかなりの重労働で死に掛けて  
はいるが……。今日も働いたと思う。

「だらしないわねえー」

いってろ脳筋女神め……。俺と違い、すべてのステータスがカンスト  
しているアクアはこの外壁拡張工事の仕事を楽々とこなしていた。

「おう、綺麗所が揃って……。そっちの金髪の姉ちゃんは本当に大丈夫  
なのか？」

「だ、大丈夫だ……。問題ない……。です……」

親方の声が聞こえたので返事はしておこうと絞り出したような、震

え声で返事を返して地べたから体を起こす。

女の体力でこの仕事ができるわけないと初日にアクアに言われたのがカチンときて今日で2週間だが、気合いと根性で食らいつきやり通してやったよ……仕事をな！

疲れ切った体を引きずるように歩いてやってきたのは公衆浴場である。

日本で言うところの銭湯だな。

「じゃあ二人とも後でな」

「はいはい」

カズマと別れ俺とアクアはカーテンを潜り抜けて女湯に入るのだった。

風呂はいい。

基本賃金の割には割高な浴場の値段だが、風呂には絶対に入りたいのだ俺は。

疲れが取れるだけでなく体を癒してくれるからな……いや、結論は体の疲れが取れるのだが。

「はふう……女つてのは大変だな」

「髪の手入れもそうだけど、お肌の手入れも大変だしねえ」

ザバーツと頭から桶のお湯をかけてシャンプーを洗い流すアクア。

俺もさつさと体を洗い、髪を撫でるように洗う。

「ていうかハルヒ……もう女性に馴染んでない？」

「……言ってくれるな。さすがに慣れたよ、今も心は男のつもりだな」

初日は特に酷かった……思い出すのも嫌だから忘れたが。

そしてこの物臭さ女神は俺にハルヒとあだ名をつけてくれた……苗字か涼宮だったらアウトだったぞこれ。

「しかし……ぐぬぬ」

「……なんだよ？」

ぐるると唸る肉食動物のように俺の胸を注視するアクアに若干引いてしまう。

「この女神である私よりも育ってるわねえ……なかなか！」

髪の毛のシャンプーを落としたりした俺にルパンダイブで飛びかかってきたアクアを避けることができず、そのまま押し倒されてしまう。

そのまま胸の感触を確かめるようにアクアの手が蠢いた……って!?

「んうっ!? どどこ触って……んっ!?」

ちよつと待て!

スキンシップの域を超えて……自然と変な感覚が……!

「へ、変なところ触るな! そんなところ触るな! 触らないで、やめて!」

「ここがいいのか? それともここがいいのか?」

「いかん、この駄女神……調子に乗ってやがる!」

「いい加減に……しろ!」

俺は木のハリセンを生成すると、おっさんになったアクアに制裁を加える。

「あたーっ! 痛い、痛いごめんなさい!」

俺が怒って〈武器鍛製〉の能力で手元にあつた桶を素材にランダム武器生成したら、都合よく木のハリセンが作り出されたので、それで容赦なくアクアに逆襲したのだった。

残念なアクアの知力がこれ以上下がっては困るので、尻を狙ってハリセンを振り回すのだった。

ちなみに、木のハリセンになった桶は元に戻せました。

そんなこんなで風呂を愉しんだ俺とアクアが風呂から上がると、カズマが入り口で待つてくれていた。

「ごめんごめん、待たせたわね」

「すまん、待たせてしまって」

「女は長風呂好きだろ? 気にしてないよ」

若干顔が赤いのは風呂上がりだからなのだろうか? それとも……

「おい、カズマ。 なにか聞こえてたのか、お前?」

「いいえ、何も聞いておりませんよ……」

態度に引つかかるが、まあここは見逃してやるか。

「そんなことよりさ、今日の飯はどうする?」



「私、スモークリザードのハンバーグがいい。あとキンキンに冷えたクリムゾンネロイド!」

「そんなじゃ宿屋のおっちゃんに、スモークリザードのハンバーグ定食三人前頼むか」

「異議なし!」

俺もあのトカゲ肉のハンバーグは嫌いじゃないのでこの二人に乗っっておこうと思う。

それで、定食を平らげた俺たちはやることも特にないし、疲れているので早々に寝ることにした。

荷物置き場に預けていた純白のシーツを受け取り、俺はカズマとアクアが待つ馬小屋に足を運んだ。

「馬糞払っておいでくれたか?」

「もちろん!」

二人が声を揃えているのだから間違いないだろう。俺はシーツを馬の餌用の藁の上に広げて寝床の用意をする。

俺、カズマ、アクアの順でシーツの上に寝転がる。

今日も働いたな……本当に。

「じゃあ、おやすみ」

「二人ともおやすみ。良い夢みろよ」

視界に映る二人におやすみと伝えて俺は眠る。

「おう、おやすみ。——ふう、よく働いたな……」

カズマがそう言ったのを聞き届けて深い眠りに落ちて……

「いや、待ってくれ」

カズマがむくりと体を起こすので目が覚めた。

「どうしたの? 寝る前のトイレ忘れた? 暗いし行ってあげようか?」

「いらんわ。いや、そうじゃなくてな……」

「俺とアクアを起こした理由はなんだ」

「最後まで聞けクソビッチ。俺たち、なんで当たり前に普通の労働

者やってんだって思ってたな」

言われてみればそうかもしれないが……つか。

「おいこら。誰がクソビッチだ、誰が」

ギロリとカズマを睨んでやると見事なジャンピング土下座で俺に謝罪してくるカズマ。

「……スンマセン、ごめんなさい！　口が滑りました、すみません！」  
「まったく、口に気をつけろよ」

「ていうかさー、仕事しなきゃご飯も食べられないでしょ？　ハルビですら工事の仕事いやとは言わずやってるじゃない。まったく、これだからヒキニートは。一応、商店街の売り子とかの仕事もあるけど？」

「そうじゃねえ！　そうじゃなくて、冒険者らしいことやってみたいんだよ！　そもそもこの世界は魔王の侵攻でピンチじゃなかったのかよ!?　平和そのものじゃねえか！　魔王の魔の字はどこいったんだよ、コラッ！」

「おい、うるせーぞ！　静かに寝ろ！」

「あ、すみません！」

……駆け出しの冒険者は貧乏だ。

まあ俺の所持していた資金はもう手元がない。

初期装備チケツトも使ったので荷物置き場を借りるための礼金に吹き飛んだ。

あと、アクアの杖代に貸したのも原因だ。

つか、ここって駆け出しの冒険者の街だよな？　アクアの持つてる杖の名は「世界樹の杖」だと言う……しかも本物だ。マジものなのだ。なんちやってばちもんだと思ったよ最初は。

アクアが触れたら全盛期の力を取り戻したのかのように劣化した樹皮が剥がれおちて純白の杖になるとかなんてファンタジーだよ。

しかもその店の店主が奇跡を見たって言って格安の値段で売ってくれたから買ってきたと言ってたが……どうなることやら。

「わ、私に言わないでよそんなこと。　ここは魔王の城から一番遠い街なのよ？　こんな辺境の、しかも駆け出しの冒険者しかいない街な

んで、わざわざ襲いに来ないわよ。……つまり、カズマは冒険者らしく冒険したいってわけ？　まだろくな装備も整ってないのにな？」

アクアのまっとうな意見にカズマはぐうの音も出ないようで……俺の初期装備は俺にしか使えないから貸しようもないし……そもそも女物の鎧だ。

カズマが付けられるはずもない。

「そろそろ土木作業ばかりやるのも飽きてきたんだよ。俺、労働者なりに異世界に来たわけじゃないんだぞ？　パソコンもゲームもない世界だけど、俺たちは冒険するためにここに来たんだ。魔王を討伐するためにここに送られてきたんだろ、俺は？」

なんの話？と小首を傾げるアクア……それでいいのか女神様

「……まあーそうだな。カズマの言い分にも一理あるぞアクア」

「おお、そんな話もあったわね！　そうよ、労働の喜びに夢中になって忘れてたけど、カズマに魔王を倒してもらえないと私が帰れないじゃない！」

……忘れてたのかよ!?と内心で突っ込んでおく。

「いいわ、討伐に行きましょう！　大丈夫、この私がいるからにはサクツと終わるわよ！　期待してちょうだい！」

「どうせパーティーメンバーは俺も含めるんだろ？　なら付き合っちゃんよ」

「ありがとう。二人とも、そんじや明日は討伐だ！」

「おおーっ！」

「うるせーってんだろこらっ！　しばかれてーのか！」

『すいません！』

他の冒険者に謝りながら俺は少しだけ心を躍らせて眠りについたのだった。

(続く)

## 武器鍛製とカエルとの死闘を！

### ○第三者視点

日の昇る前の明朝。馬小屋の藁の中から燻アッシュんだ金髪ブロンドに翡翠色の瞳を持つ少女が顔を出す。

彼女は寝ぼけ眼の目をこすり、のろのろと立ち上がると馬小屋から少し離れた場所にある井戸に備え付けの桶を落とし、冷たい水で満たされた桶を引き上げる。

水で満たされた桶に手を入れるも、そのあまりの冷たさに思わず手を引っ込めた。

「冷てえ……井戸水ってこんなに冷たいのか」

乱暴な口調の声は女性にしては少し低い声色だった。

先ほどと違い、意を決したように手を桶に突っ込むと冷水をすくい出して顔を洗う。

その冷たさは先よりかは和らいでいたのだろうが、それでも目の覚めるような冷たさには変わらない。

持ってきていたタオルで顔を拭くと完全に目を醒まして朝の日課、やるべきことを成すために彼女……ハルヒトは動き出す。

まず、馬小屋に戻ると荷物から〈冒険者の服〉を出して着替える。連れの2人……カズマとアクアを起こさないように注意しつつ、少しでもだけ衣擦れの音をさせながら服を脱ぐと超重量な……スイカサイズ並みのそれが躍動した。

「女の下着はすごいいな……感心するよまったく」

ハルヒトはブツブツとそんなことを言いながら、着替えをすませると宿の裏手に移動する。

彼女は最近、この場所で早朝に自身の能力である〈鍛製〉の実験をしているのだ。

「そんじゃ、始めるか」

ハルヒトは先日鍛冶屋の旦那から半ばで刃が折れて使い物にならなくなった剣を格安で引き取っていた。

ハルヒトは折れた剣を基本素体ベースに設定すると、素材になるショート

ソードを用意した。

折れた剣と新しくも、比較的安い値段で手に入るショートソードを《鍛製》で加工すると、どうなるのか……？

一定の確率で新たな武器が製造され、もしくは修理完了品が手に入るのだ。

ハルヒトは精神を集中させて、左手の折れた剣に魔力を与える。

折れた剣が基本素材に認識されたので、ハルヒトの手から浮きあがり薄紫色に光る魔力の魔力力場に包まれて滞空する。

次に右手のショートソードに魔力を与えるハルヒト。

ショートソードは空色の魔力力場を纏い、彼女の手から離れて滞空する。

「こつから……」

ハルヒトが追加で魔力を与えると徐々に折れた剣、ショートソードが滞空する魔力力場の中で回転を始める。

この魔力力場の中では、剣の加工が始まっているのだ。

能力のプロセスとしては再鍛製による武器加工は《変換》から《融合》、《鍛錬》、《仕上げ》の4工程がある。

まずハルヒトが行っているのは魔力粒子に《変換》する工程で、一番神経を使う工程である。

魔力粒子とは、この世界において存在するへかたち作るものを万物の根源たる《マナ》の事をさす。

どこにでもあり、どんなものにでもなる《マナ》は通常、ヒトに扱えるものではない。

《マナ》は星の波動とも呼ばれる未知の存在……言うなれば、高次元的存在の《神》だけが行使を許された《物》である。

なぜ人のハルヒトに使えるのか……ハルヒトは《マナ》を間接的に使う権利を持っているということになるのかもしれない。

折れた剣とショートソードが光の粒の集合体となり、魔力力場に溶け込むように霧散したのをハルヒトは確認すると次の工程である《融合》に移った。

両手を突き出すように構え、手の上でふわふわと浮かぶ魔力力場を

ハルヒトは重ねていく。

薄紫の光と空色の光が混じり合い、徐々に色が抜けていく……最後に残されたのは真っ白な純白の魔力力場だった。

《融合》が終わり、次は《鍛錬》の工程になる。

《鍛錬》は魔力力場内の魔力粒子の収束を促す工程で、己の思い描く《武器》を鍛え、収束させる工程になるのだ。

ハルヒトのイメージが固まり、光が収束を始める。

最後の工程である《仕上げ》に入った。

仕上げは《研磨》の工程である。

精錬された魔力粒子のキメを均等にして、《再鍛製》で得られる武器の強度を底上げる重要な工程である。

ハルヒトは魔力力場の中に浮かぶ剣の柄を握ると一気に引き出した。

「お……」

引き出された剣の刀身は朝焼けの光を反射して輝く。

鋼色に、鈍色に光る刀身を一瞥したハルヒトは満足そうに何度か頷く。

「成功だな。 剣の銘は……『鉄の剣 改』でいいな」

彼女は、出来上がった剣を鞘に収めると一息つきながらつぶやく。

「さてと、そろそろあいつらも起きてるかな……」

馬小屋で寝ぼけ眼をしているであろう連れの2人の顔を想像しながら、ハルヒトは広場を立ち去っていくのであった。

○ 雲ひとつない晴天の空。

俺は片手に弓を持ち、とあるモンスターと戦っていた。

時刻は昼を過ぎた頃……俺たちは街から少し離れた平地に来ていた。

冒険者として活動すべく、初めてのクエストという事で初級者向け

のクエストを選んだはずだった……はずだったのだが……

「この世界のモンスター……逞しすぎんだろおおお！」

絶叫しながらも、俺は狙いを定めて左手に装備した弓から〈石の矢〉を放つ。

が、その矢は相手に当たることはなかった。

矢が命中する直前で標的はありえない跳躍で矢を回避したのだ。

それはのしかかろうと真上に落ちてきたが、俺は冷静に落下地点を予測して回避したので下敷きにはされなかった。

俺から少し離れた位置に落ちてきたそれは……牛ほどの巨体を持つカエルだった。

冒険者ギルドが付けたモンスター名は〈ジャイアントトード〉である。

繁殖期には産卵のための体力作りのために人里近くにまで現れてヤギなどの家畜を襲う有害なモンスターである。

農村の子供が行方不明になる事件があるのだが、大概近くに生息するこの巨大カエルの腹を割けば遺骨の回収はできるとも聞くので一般の人にも被害を出している迷惑極まりない奴らだ……モンスターにも無害な奴もいるらしいがまだそこまでの知識は持っていない。

つと、今は戦闘中だな……集中、集中しないと殺られる。

俺は空いている右手から手品でもなんでもない、《鍛製》の能力の一つ、〈倉庫〉から石の矢を呼び出す。

俺の《鍛製》には基本機能の〈鍛製・再鍛製〉に加えて幾つかの機能が備わっている。

この〈倉庫〉の機能は俺が集めた素材を格納するインベントリで、倉庫らしく武具も預けることができるのが便利な機能だ。

そこに俺はランダム生成能力の〈鍛製〉で作り出した武具の〈石の矢〉<sup>ハズレ</sup>を沢山格納しているわけだ。

俺のもらった能力の《鍛製》は実はかなり制限のついた能力だった。いや、まあ「チート能力」と言えばそうなるのかもしれないが、いかなせん使い勝手が悪いのだ。

まず〈鍛製〉は素材を使う割に、俺の思った通りに武器を創り出し

てくれない……どういふ事かというのと、俺の欲する状況に応じた武器を生成してくれないという事である。

《再鍛製》なら狙った武器を作り出せるのだが、コストが高い……剣が折れるたびにショートソードを素材に作り直すのは非効率的だと思わないか？

つまり、維持コストや素材のコストを考えると……燃費が悪いという事だな。

そんな事を考えながら俺は弓の弦をキリキリと絞る。

「今度こそ当てる……《狙撃》！」

俺はアーチャーの基礎スキルである《狙撃》を使う。

標的を射抜く際に幸運と器用さが高ければその補正がかかり、狙った場所を射抜けるスキルだ……狙い通りにカエルの左肩に矢が刺さる。

ん？……なぜ俺が弓を、あまつさえはアーチャーのスキルを使えるのかだつて？

答えは簡単で、《魔法剣士》のジョブ特性に秘密がある。

俺たち魔法剣士は《冒険者》の次に自由度の高いジョブ特性を持っている。

それは冒険者がすべてのスキルを覚えて行使できる事に近い、魔法剣士は近く中距離の戦闘のジョブのスキルをある程度、自由に覚える事ができるのだ。

制限は特殊な職業の盗賊やクリエイターのスキルを覚えることは無理だがな。

あとは生産職と上級職のスキルは覚えることはできない。

《ウィザード》であり、《剣士》の魔法剣士は中級クラスのジョブなのでこのジョブ特性があるのかもしれない。

臨機応変に自分の距離を変えて戦える事が魔法剣士の強みと言う事なのだろう。

なので、俺は現在。

《弓》

《狙撃》



《片手剣》

《集中力》

《筋力強化》

のスキルを覚えていた。

残りのスキルポイントは《中級魔法》など欲しいスキルを取るために温存しておくつもりだ。

ちなみに残りのスキルポイントは5残っている。

「ととつ……。あぶねえなこの野郎！」

食うか食われるか、本当に弱肉強食の世界だなこの世は。

生き物が逞しすぎる、ガチで——カズマじゃないが日本に帰りたいよ。

カエルの舌を避けつつ俺は弓を絞り、矢をカエルの目を狙って放ちながら俺は動いた。

射掛けた矢はカエルの片方の目を貫く。

その痛みにカエルは仰け反り隙を見せてくれたので、俺はカエルの懐に飛び込みながら鞘から抜いた剣を天に向けて……。カエルの顎の下から突き上げた。

脳と柔らかいカエルの頭蓋を貫き刀身は血糊で赤く染まる。

俺が今、来ている服は白基調なので、返り血が付いてスプラッタになっちゃったよ……。言つとくが、サイコ系女子じゃないからな？

「ふう、こっちは仕留めたが……。カズマの奴、一体何やってんだよ」

俺から離れた位置でカズマがジャイアントトードに追われていた。

「ああああああ！ 助けてくれ！ アクアでもいい、ハルヒトオオオオ！ 助けてくれええええ」

「プークスクス！ やばい、超うけるんですけど！ カズマったら、顔真っ赤で超必死なんですけど！」

世界樹の杖を持つアクアがカズマを指差して笑っている。

呑気なもんだなあ……。あいつ。

見てられなので俺は加勢することにして、アクアに声をかける。

「おい、アクア。カズマを助けないのか？」

「あ、ハルヒ。 もう、あのカエル倒したの？」

「もう、とか言うな。 1人で狩るにはキツすぎるよ、あんな大物……もっかいきくぞ？ カズマを助けられないのか？」

「もうそろそろ助けてあげるつもりよ！」

自信満々なアクアの様子……まさか、カエルを瞬殺できるのか——この女神様は？

「アクア——！ アクア——!!？ お前いつまでも笑ってないで助けろよ おおおお！ ハルヒトオオオオ！ マジでやばいから助けてくれえええ！」

「まずは、私をアクアさんと呼ぶところから始めてみましょうか」  
「アクア様——！」

カズマの悲痛な叫びに応えるように俺は、弓に矢を番え構える。

「……《狙撃》」

俺が引き絞った弓から放たれた石の矢はカエルの背中に突き刺さった。

カエルのヘイトをこちらに寄せると同時にアクアがふんぞり返りながらしゃべりだした。

カエルのヘイト、こっちに寄せてるんだが……余裕だなコイツ。

「しようがないわね——！ いいわ、助けてあげるわよヒキニート！ その代わり、明日からはこの私を崇めなさい！ 街に帰ったらアクシズ教に入信し、1日3回祈りを捧げることに！それから——」

「おいアクア……そろそろいい加減に……ん？」

アクアの肩を掴んで危険を知らせようとしたその時……腹に圧迫感を感じた。

アクアと俺が同時に視線を落とすと……ぬらりと光るピンク色の、野太い紐のようなものが腹に巻きついていていた。

「これって、もしかしなくても……」

「……カエルの……ひゅぐツ！」

俺が言うのとアクアが引き継ぎながら……せかいが暗闇に包まれた。

……な、生臭い！ 暗い！ 動けない!?

何だよ、何コレエエエ!?

「アクアー！　　ハルヒトオオオオ!?　　お、お前ら食われてんじやねえよおおお!?」

●　遠くでカズマの絶叫が聞こえた気がした。

○カズマ視点

「ぐすっ…………、うえええええっ…………、ぐすっ…………あぐうつ…………！」

「すまん、助かった。…………あ、ありがとう」

俺の前で地面に膝を抱えてうずくまりカエルの粘液でネチヨネチヨになって泣くアクアと、粘液塗れになりつつも泣かず俺に謝罪してきたハルヒト。

2人の横には、俺に頭を砕かれたカエルが横たわっていた。

「ううつ…………ぐすっ…………ありがど…………ありがどうね、カズマ…………うわああああん…………！」

カエルの口から引っ張りだされたアクアは先ほどから泣きじやくっている。

ハルヒトが背中をさすりながら慰めているのを見てると何だかわいそうに見えてきた。

しばらく泣いたアクアはハルヒトの慰めで幾分か落ち着いたのか…………泣き止んでいた。

しかし、ハルヒトの服が白基調だから目のやり場に困るわけで…………スカートが若干ずりあがってるぞ。

はい。

粘液で塗れたハルヒトの服がスケスケで眼福です。

下着の色も丸わかり…………！」

「おい、カズマ。　目線が露骨にいやらしすぎだ…………さすがに俺も怒るぞ?」

「…………あ、ごめん」

さすがにガン見しすぎた…………でも、ハルヒトって本当にけしからん躰つきだな。

男なら夢見る躰つきだぞ、金髪巨乳少女って。



俺の制止も聞かず、アクアが近くにいたカエルに向かって駆け出した。

「カズマ……武器出しとけ」

「……お、おう」

ハルヒトが弓を無言で構えるのを見て俺もショートソードを抜いた。

かける勢いのままにアクアはその手に光を宿らせてカエルの腹に殴りかかった。

「あなたに恨みほ無いわ！ でも、あなたの同胞が私に与えた屈辱の恨みを代わりに受け取りなさい！ 神の力を思い知れ！ 私の前に立ち塞がったこと、そして神に牙を剥いたこと！ 地獄で後悔しながら懺悔なさい！ ゴツドブローツ！」

かっこいい口上と共に放たれたアクアの拳はぶよんとカエルの柔らかい腹にめり込むが、殴られたカエルにダメージらしいダメージは無いようだった。

……打撃系の攻撃はあまり効果がないはずなのだが……

「……か、カエルってよく見ると可愛いと思うの」

アクアの呟きが俺とハルヒトの耳に届く頃にはカエルが獲物を飲み込もうとして動かなくなった。

俺たちは協力して本日三匹目となるカエルを倒し、粘液まみれで泣きじゃくる女神を連れ、今日の討伐を終えた。

後倒さないといけないカエルの数は2体である……先が思いやられるよ……はあ

(続く)

中二魔女っ子とあの忌まわしいカエルに爆裂を！

○ 「仲間を募集しましょう！」

街に帰還した俺たちは真っ先に大衆浴場に行った。

浴場に向かう道中の人たちに、同情のような視線を受けたのは言うまでも無い。

カエルの粘液の生臭い臭いを風呂に入って落とし、普段着に着替え、俺とアクア、カズマでカエルのモモ肉の唐揚げを食いながら作戦会議をしていた。

冒険者ギルドは冒険者のサポート組織であり討伐したモンスターの買い取りをしている。

それにモンスター料理のウリな酒場を併設していることから冒険者の溜まり場、待ち合わせ場所になっている。

今日討伐したカエル三匹の肉をギルドに売ったので、そこそこの小遣いを稼ぐことができた。

あの巨体を持つカエルを俺たちで運ぶことは困難だ……と言うか運べる気がしない。

だがギルドに申請すると、倒したモンスターの移送サービスを受けることができる。

カエルの引き取り価格は一匹につき五千エリスで引き取ってくれる。

ちなみに移送費込みで五千エリスだ。

それが三匹いたので今日の報酬は一万五千エリスってわけだ。

この金額は……外壁拡張工事の日当と変わらん。

この世界の賃金はかなり安い……そりゃ未発達の世界に安定した格差の無い社会なんざ無理だろうけどな。

「カエルがこんなにもうまいとは驚いたな」

肉に変なクセの無い淡白な味は鶏の胸肉みたいでいくらでもイケそうな味だ……チョット硬いのが気になるけどな。

この世界に来た当初はこのモンスター料理に抵抗感があったが、定

食として出されたトカゲやカエルも食べてみれば味がわかりうまいということもわかる。

俺の隣でカエルのモモ肉を頬張る女神様はなんでも躊躇なくモリモリ食べてはいるが。

「でもなあ……。仲間だったって駆け出しでろくな装備の無い俺達のパーティーに入ってくれる奴なんているのか？」

「うん、それは同感だ。最弱の〈冒険者〉。なんちゃって〈魔法剣士〉。自称女神の〈アークプリースト〉のアクアはまあ需要があるかもだが」

カズマの疑問も最もだと思う。

「ひよつと、ふおのひひはあわ」

「飲み込め、飲み込んでからしゃべれ」

カズマに指摘を受けたアクアは、その口の中のものを飲み込みながらに俺に食ってかかってきた。

「ちよつと、その言い方は語弊があるわ！ 自称女神じゃなくて本物よ！」

「……わかった、わかった。で、募集はどうするんだ？」

「この私がいるんだから、仲間なんて募集かければすぐよ。なにせ、私は最上級職のアークプリーストよ？ あらゆる状態異常の治癒、回復魔法もつかえてその果てには蘇生だってお手の物。カズマのせいで地上に落とされて本来の力とは程遠い状態でもこれだけの力があるのは、私が仮にも女神だからなのよ？ わかったらハルヒ、カエルの唐揚げ一っちょうだい！ そのついでに讃えなさい！」

「ちつとも活躍してないお前を讃えるのは抵抗感しかない。だがまあ……。ほれ」

喚こうとするアクアの口に唐揚げを放り込み黙らせた俺は、嬉しそうにそれを頬張る女神様を、カズマも同じ心境なのだろうか……。不安げに眺めていた。

翌日の冒険者ギルドにて。

「……人、こないわね」

「……こないな」

アクアが寂しそうに呟いたのに俺は相槌を打った。

俺たちは今日半日、この冒険者ギルドにて未来の勇者様候補を待っていた。

求人への張り紙を出したことに違いはないのだが……誰も見ていないということはないと思う。

まあ、来ない理由も察している。

「……なあ、ハードル下げようぜ。魔王討伐だから仕方ないっちゃ

仕方ないんだが……」

「上級職のみの募集はいくらなんでも厳しすぎると思うが……？」

俺たちの目標は魔王の討伐。

アクアを天上界に返して、俺が男に戻るといふ願いを叶えてもらうため……とも考えていたのだが、とうとう体が完全に女になってきている。

女の秘め事ってわけでもないが、とうとう、その……ゴニヨゴニヨが起きた。

ぱんつが真っ赤に染まったのでマジでビビった。

とまあ、もうこのまま女でもいいかなーと思い始めている。

魔王の討伐なんて今の俺たちには到底無理だと思うしな……。

「うう、だって……」

話が逸れた。

俺の職は魔法剣士で、この職は中級職扱いになる。

そんな俺よりも確実に強い上級職の人々はガチの勇者候補となる。

そんな人々は既に他のパーティーに優遇されている。

アクアの思惑としては、魔王討伐のためにできるだけ強い強力な人材で固めておきたいんだろう。

「このままじゃ誰も来ないぞ？ 大体お前は上級職かもしれんが、俺は最弱職なんだ。周りがいきなりエリートばかりじゃ俺の肩身が狭くなる……」



言いながらカズマが席を立とうとした時だった。

「上級職の冒険者募集を見てきたのですが、ここで良いのでしょうか？」

気怠そうな赤い瞳に、しっとりとした肩口ほどの長さの黒髪。

俺たちのテーブルの前にやってきたのは黒いマントに黒いワンピース、黒いブーツを履いて身の丈に近い長さの杖を持っている。

その頭にはとんがり帽子を被っている……魔女っ子。

人形のように整った顔立ちのロリっ子だった。

どう見積もっても12〜13歳にしか見えない片目を眼帯で隠した少女が羽織っていたマントを翻しながら……

「我が名はめぐみん！ アークウィザードを生業とし、最強の攻撃魔法を操る者……！」

「……冷やかしに来たのか？」

「……ふざけてんのか？」

「ち、ちがうわい！」

女の子に思わず突っ込む俺とカズマ。

いや、だって……めぐみんて……。

「あなたもしかして紅魔族？」

アクアの問いにコクリと頷く少女が彼女に冒険者カードを渡す。

「いかにも！ 我は紅魔族随一の魔法の使い手、めぐみん！ 我が必殺の魔法は大地を穿ち、岩をも砕く！ ……と言うわけで、優秀な魔法使いはいりませんか？ あと、凶々しいお願いなのですが、もう3日も何も食べていないのです……面接の前に何か食べさせてもらってもいいですか？」

そう言うめぐみんは悲しげな瞳で俺とカズマを見る。

彼女のお腹からキューと切なげな音なる。

「飯を奢るくらいなら別にいいけど……その眼帯は？」

「はい、この眼帯はマジックアイテムです。 なかなか便利ですよ？」

そう言ってカズマに眼帯を渡すめぐみん。

カズマがそれを付けると……

「ほおー……こいつは凄いな。 普通に見えるぞこれ」

カズマが外して俺に手渡してきた……見ておけということか？

まあちよつと興味あつたけど……。

「……おお、確かに便利そうだな」

眼帯をつけた方の目は普通見えなくなるはずだがこの眼帯はマジックアイテムの名の通り、目の前にある筈の眼帯が隔てている筈の景色が見えるのだ……透視機能なのだろうかこれは。

さらに加えて、相手との距離が示されたマーカーのようでもある。

距離計測器みたいな機能なのだろうか？

「魔法射程を掴むためのマジックアイテムか？ この眼帯は？」

「ええ。 あると何かと便利なのですが、私は半分ファックションでつけています。」

……なんだそりや

ファックションでつけていますって……かなり便利なアイテムだと思ふのだが……。

眼帯を付け直したためぐみんを見ながらアクアが説明してくれる。

「……ええとね。 あなた達に説明すると、彼女達紅魔族は生まれつき高い知力と魔力を持ち合わせていることから、大抵は魔法使いのエキスパートになるの。 紅魔族は名前の由来となっている特徴的な紅い瞳と……。 それぞれが変な名前を持っているの」

「変な名前とは失礼な。 私から言わせてもらおうと、町の人々の方が変な名前をしていると思ふのですが」

俺たちの名前の方が変とは……変わった感性だなおい。

「ちなみに、両親の名前を聞いてもいいか？」

「母はゆいゆい。 父はひよいさぶろー」

『……』

思考停止する俺たち……数秒の沈黙に耐えきれなくなったのかカズマが切り出す。

「とりあえず、この子の種族は質のいい魔法使いが多いんだな？ 仲間にしてもいいか？」

「……別に問題ないと思ふが」

「おい、私の両親の名前について言いたいことがあるなら聞こうじゃないか」

なぜか俺に顔を近づけてくるめぐみんに、アクアが冒険者カードを返す。

「いーんじゃない？ 冒険者カードは偽装できないし、彼女は上級職の〈アークウイザード〉で間違いないわ」

「おい。彼女ではなく、私のことはちゃんと名前前で呼んでほしい」

抗議してきためぐみんに俺はメニューを渡す。

「まあ、何か頼みなよ。俺はハルヒト。こっちの男がカズマで、こいつはアクアだ。よろしくな、めぐみん」

「……いーはい、よろしくです」

めぐみんは照れたようでメニューを開いて赤くなった顔を隠していた。

○

「爆裂魔法は最強の攻撃魔法。その分、魔法を使うのに準備時間が結構かかります。準備が整うまであのカエルの足止めをお願いします」

俺たちは満腹になっためぐみんを連れて忌まわしいカエルに、リベンジに来ていた。

平原の遠く離れた場所には一匹のカエルの姿が。

そのカエルはこちらに気がついたのか向かってくる。

「カズマ。向こうにもカエルがいる……そっちは頼むぞ」

「わかった。遠い方のカエルを魔法の標的に、近い方はハルヒトとアクアに任せる」

カズマにめぐみんの近くにいてもらい、俺とアクアで近い方のカエルに仕掛けることにした。

「アクア、この前のリベンジだ。猪突猛進に突っ込むな……よ……」

「何よ！ 打撃が効きづらいカエルだけど、今度こそ女神の力を見せてやるわよ！ 今のところ活躍のない私でもできるってこ、ひゅぐつ

！」

俺の言うことを聞かずアクアが突っ込んでいく。

さすがは女神様……身を挺してカエルの動きを止めてくださいったようだ。

……学習能力のないアクアに哀れみの視線をむけながら俺は獲物を飲み込もうと動かなくなったカエルの脳天に「鉄の剣 改」を叩きつける。

一撃で頭蓋をかち割られたカエルは絶命した。

じたばたと足をバタバタさせるアクアをカエルの口から引っぱりだして救出。

ふとカズマとめぐみんの方を見ると……彼女の持つ杖の先に光が灯る。

ヤバそうなの……それを例えるのなら光を極限まで凝縮したもの……まるで小さな太陽だ。

「へクスプロージョンっ！」

めぐみんが紅い瞳を輝かせて呪文を、膨大な魔力の塊を解き放つ。その光はカエルに突き刺さると、その凶悪な効果を発揮した……閃光と轟音の後には……

「いてて……。なんつー威力だ……」

泣きじゃくっていたアクアと俺は魔法の起こした爆風ですっ転んで尻を強打した。

粘液まみれのアクアを連れてカズマ達の方に向かいながらその魔法の爪痕である20メートル以上はありそうなクレーターを目の前にして俺は押し黙った。

これが魔法……か……と内心で俺が感動していると、ボコンッと近くの土が隆起した。

のろのろと土の中から這い出てきたのはジャイアントトードだった。

おそらく、地中で眠っていたのだろうか？

魔法の起こした振動と音で目覚めたのだろうか？

まあ、雨の降っていないこの平原でどうやって生きているのだろう

かと思っていたが……地中にいたとは予想外。

「めぐみん！ 一旦離れて、距離を取ってから攻撃を……」

カズマがそう言う、その途中で言葉が切れる。

カズマの視線を追うように見てみると……めぐみんが倒れていた。

「ふ……。我が奥義である爆裂魔法はその絶大な威力ゆえ消費魔力

もまた絶大。……要約すると、限界を超える魔力を使ったので、身

動きが取れません」

まずい、めぐみんの近くにカエルが来ている！

慌てて俺がめぐみんを背負うと、カズマ達の方に走る。

外壁拡張工事で基礎体力が上がっているので苦もなくめぐみんを

背負えたのは予想外だった。

「カズマ！ ……にげるうお!!」

逃げるぞと言いかけた俺の視界が黒に染まった……

「ハルヒトオオオオ！ お前、何でまた食われてんだよオオオオ!!」

またしてもカズマの絶叫が聞こえた気がした。



○カズマ視点

「生臭い……。生臭いよう……」

「もう泣くなよ、アクア」

「カエルの体内って、臭いけどいい感じに温かいんですね……。知

りたくもない知識が増えました……」

粘液まみれのアクアを慰める粘液まみれのハルヒトに同じく粘液まみれのめぐみんは俺の背中で知りたくもない知識を教えてくださいながら、めぐみんは俺の背中におぶさっていた。

魔法を使う者は魔力の限界を超えて魔法を使うと、魔力の代わりに生命力を削ることになるらしい。

魔力が枯渇している状態で大きな魔法を使うと命に関わることもあるそう。

「今後、爆裂魔法は緊急の時以外禁止だな。これからは他の魔法で頑張ってくれよ、めぐみん」

俺がそう言うのと、背中のめぐみんが肩を掴む手に力を込めた……何だか嫌な予感が……

「……使えません」

「……は？ 何が使えないんだ？」

めぐみんの言葉に思わずオウム返しで言葉を返す。

めぐみんが俺に掴まる手にさらに力を込めて、そのまな板のような胸が背中に押し付けられた。

「……私は爆裂魔法しか使えません。 他には、一切の魔法が使えません」

「……マジか」

「……マジです」

俺とめぐみんが静まり返るなか、持ち直したアクアが会話に参加する。

「爆裂魔法しか使えないってどういうこと？ 爆裂魔法を習得できるほどのスキルポイントがあるなら、他の魔法を習得していないわけがないでしょう？」

「……スキルポイント？」

疑問を浮かべる俺にハルヒトが説明してくれる。

「あ、そか。 カズマは知らないんだな。 スキルポイントてのは職業についた時にもらえる、スキル習得に必要なポイントだ。 ギルドのお姉さんの話じゃ、優秀な者ほど初期ポイントは多いらしい。 このポイントを振り分けて様々なスキルを習得するのだよ」

「なるほどな。 スキルポイントを振ってスキルツリーを完成させるのか……」

「ちなみに俺はまだ〈中級魔法〉を覚えてないからなんちゃって魔法剣士だ。 覚えてるスキルは〈弓〉〈狙撃〉〈集中力〉〈片手剣〉〈筋力強化〉を習得してるよ」

「そ、そうか……だから弓を使うのがうまいのか」

「たしなみ程度に弓道を習っていたから……」

ハルヒトは恥ずかしそうに目をそらして、それ以降しゃべらなくなつた。

「私は爆裂魔法をこよなく愛するアークウイザード。爆発系統の魔法が好きじゃないんです。爆裂魔法だけが好きなのです」

めぐみんの独白に俺はもちろん、アクアとハルヒトも真剣な面持ち聞いていた。

「もちろん他の属性のスキルも習得すれば、冒険は楽になるでしょう。……でもダメなのです。私は爆裂魔法しか愛せない。たとえ今の私の魔力では一日一発が限界でも。たとえ魔法を使った後は倒れるとしても。それでも私は爆裂魔法しか愛せない！だって、私は爆裂魔法を使うためだけに、アークウイザードの道を選んだのですから！」

「素晴らしい！素晴らしいわ！その非効率ながらもロマンを追い求める姿に私は感動したわ！」

めぐみんの独白にハルヒトが啞然としていた。

……まずい、どうもこの魔法使いはダメな系だ。

よりにもよってアクアが同調しているのはその証拠だ。

俺はここ二回の戦いで、どうもこの女神ちつとも使えないのではと思いはじめている。

はつきり言ってアクア1人でも厄介なのにこれ以上問題児は……。

よし、決めた。

「そっか。多分茨の道だろうけど頑張れよ。お、そろそろ街が見えてきたな。それじゃあ、ギルドに着いたら報酬を山分けにしよう。うん、まあ機会があればまたどこかで会うこともあるだろう」

その言葉に俺を掴んでいるめぐみんのにさらに力が込められた。

「ふ……。我が望みは爆裂魔法を放つこと。報酬などおまけに過ぎず……。なんなら山分けでなく、食事とお風呂とその他雑費を出してもらえるなら我は無報酬でも構わない。そう、アークウイザードである我が力が、今なら食費ちよつとだけ！これはもう長期契約を交わすしかないのだろうか！」

「いやいや、そんな強力な力は俺たちみたいな弱小パーティーには向いていない。そう、めぐみんの力は宝の持ち腐れだ。俺たちのような駆け出しには普通の魔法使いで十分だ。ほら、俺なんか最弱職

の冒険者なんだからさ」

俺はそう言いながら、ギルドに着いたらすぐ追い出せるようにめぐみんの手を緩めようとする。

「なあ、カズマ。めぐみんをウチに入れてやったらどうだ？」

俺とめぐみんのやりとりを見ていたハルヒトが突如としてそんなことを言い出した。

「……お前の考えていることはまあわかる。だが、俺がいることも忘れてないか？めぐみんのフォローは俺が責任持つて行う。だからこの子を入れてやれないか？」

「ハルヒト……でもなあ……」

「見捨てないでください！もうどこのパーティーも拾ってくれないのです！ダンジョン探索の際は荷物持ちでもなんでもします！お願いです、私を見捨てないでください！」

……めぐみんが大声で言うのは必死だからだろう。

もう街中に差し掛かっていたので通行人たちにめぐみんの声が聞こえたようで、ひそひそと何かを話している。

「——やだ、あの男。小さい子を捨てようとしてる……」

「——隣にはなんか粘液まみれの女の子2人連れてるわよ」

「——あんな小さい子を弄んで捨てるなんて、飛んだクズだね。」

見て！女の子全員ヌルヌルよ？ いったいどんなプレイしたのよあの変態」

間違いなくあらぬ誤解を受けてるぞこれは……！

アクアがそれを見てニヤニヤしているのが憎たらしい。

そしてめぐみんにもそれが聞こえたようで……

俺が肩越しにめぐみんを見ると、めぐみんは口元をニヤリと歪めて……

「どんなプレイでも大丈夫ですから！先ほどのカエルを使ったヌルヌルプレイだって耐えてみせ」

大声で言うめぐみんの言葉を遮るように俺は

「よーし分かった！めぐみん、これからよろしくな！」

と、こういうしかなかった……仲間が増えました。



(続  
く)

## 鋼の女騎士とキャベツとの乱戦を！

○

「やれやれ……酷い目にあつたな、今日も」

「なんだかんだ言つてらハルヒもよくカエルに食べられるのね。親近感を覚えるんですけど」

カズマに追いやられるようにして俺たちは大衆浴場に来ていた。

カズマが報酬を受け取ってくれるとの事で冒険者カードを預けておいた。

「しかし、ハルヒトは魔法剣士だったのですか？」

めぐみんが疑問を述べるので俺はそれに応えた。

「まあな……アークウイザードにもなれるらしいが、俺は魔法の詠唱を覚えられる自信がなくてな」

「なるほど。詠唱が覚えられるならアークウイザードに転職するのですか？」

「それはないな。距離感掴みづれーし武器を使うほうがしつくりくる。だから、今弓を使つてる理由が中距離戦慣れしたいからってわけだな」

そうですね……とあからさまにしよんぼりするめぐみんに後ろ髪を引かれる思いだが、俺は魔法使い系の職業に転職する気はない。

物理でダメなら魔法で！が売りな魔法と物理の合わさった職って便利だろう？

俺たちは身体を洗い、汚れを落とした後湯船に浸かる。

みんなと世間話をしていたらちようどいい時間になった

「つばあー！ さてと、私は先に上がるからね」

「おいよ、めぐみんはどうする？」

「私も上がりますよ……ハルヒトはまだ入るんですか？」

アクアが湯船から上がり、めぐみんに俺がどうするのかを聞くと、続くように立ち上がる。

「俺はもうちよい浸かるよ。長風呂は文化だ」

「そうですね？ のぼせないように注意してくださいね、では後で酒

場で落ち合いましたよ」

「はいよー」

俺はめぐみんに返事を返して、湯船に浸かる。

やはり、風呂はいい……身体を清潔に保つ事と、疲れが抜けていく感覚は日本人が好むことだ。

数分後に風呂から上がった俺は、清潔なタオルで体の水滴を拭き取る。

受付のおばちゃんに頼んでおいた速洗濯の代金を払って服を受け取り、着る。

この速洗濯は受付のおばちゃんに頼むと魔法を用いて洗濯から乾燥までを一瞬で終わらせるサービスである。

若干服が焦げるのが玉に瑕なのだが、今日はうまいことやってくれたらしい……焦げた匂いがしない。

依頼主の幸運の値に依存すると聞いているが、真偽は定かではない……ぶっちゃけると、俺は二回ほど衣服が焦げた。

さてと、ギルドに向かいますか。

○

「なあ、スキルはどうやって覚えればいいんだ？」

カエル討伐の翌日、俺たちは遅めの昼食を取っていた。

俺の眼の前ではうちのパーティーに入るまでろくな物を食べるこゝとができなかったのだろう。

めぐみんが一心不乱に定食に食らいつついており、俺の隣では近くの店員さんに定食のおかわりを頼むアクア……年頃の女とは思えない食いつぶりである。

「スキルの取り方か？ 冒険者カードの習得可能スキル欄にある好きなスキルを……ってカズマは冒険者だったな」

「冒険者は誰かに、スキルを教えてもらう必要があるわ。例えばハルヒの持つ〈狙撃〉を覚えなければまず目で見て、そしてスキルの使用方法を教えて貰えばいいわ。教えて貰えばカードの習得可能ス

キル欄に、その項目が現れるからスキルポイントを使ってスキルを習得すればいいの」

俺の言葉をアクアが引き継いでくれたので俺も冒険者カードを見直す。

俺の持っているスキルでカズマでも使えそうなのは……狙撃と弓くらいか……あとは片手剣くらいだろうか？

「それじゃあ、めぐみんに教えて貰えば俺でも〈爆裂魔法〉が使えるようになるってことか？」

「その通りなのです！」

「うおっ！」

カズマの何気ない一言を拾ったためぐみんが食いつく……爆裂魔法の同志を見つけたと言わんばかりだ。

「その通りですよカズマ！ まあ、習得に必要なポイントはバカみに必要ですが……。冒険者は、アークウィザード以外で唯一爆裂魔法が使える職業です。爆裂魔法を覚えたいならいくらでも教えてあげましょう。と言うか、それ以外に価値のあるスキルなんてありますか？ いいえ、ありませんとも！ さあ、私と一緒に爆裂道を歩もうじゃないですか！」

めぐみんの熱弁……ずいど寄せる顔が近いのでカズマがテンパっていた。

「ちよ、ちよつと待て！ おち、落ち着けロリっ子！ つーか、スキルポイントってのは今3ポイントしかないんだが……」

「ろ、ロリっ子……!?？」

熱弁していためぐみんはカズマにロリっ子呼ばわりされたためか意気消沈……相当ショックだったようだな。

「冒険者が爆裂魔法を習得しようと思うなら、スキルポイントの10や20じゃ効かないわよ？ 十年くらいかけてレベルを上げ続けて一切ポイントを使わず貯めれば、もしかしたら習得できるかも？ ってくらい」

アクアがめぐみんの話を引き継いで説明をくれるが……十年か……

「待てるかそんなもん」

「……それでも、十年くらいで習得はできるんだな」

俺としては至極どうでもいい話なわけだが。

「ふ……。この我がロリっ子……」

しょんぼり項垂れるめぐみに俺はあとでネロイドをおごつてやろうと思った。

「しかし、せっかく多彩なスキルを覚えることができる冒険者なんだからなあ……。色々覚えておきたいわけなんだが……。アクア。

お前、なんか便利なスキル持つてないか？ できれば習得ポイントが少ない方がいいんだが」

いや、アクアは確か〈宴会芸〉とか言う戦闘とは無関係なスキルをとつていた気がするが……

「……。しようがないわねー。言つとくけど私のスキルは半端ないわよ？ そう誰にでもホイホイ教えるもんじゃないんだからね？」

神妙な顔をして頷くカズマに満足したのかアクアは手に持っていた水の入ったコップを何を思ったのか頭に乗せる。

そして、ポケットから取り出した何かの種をテーブルに置く。

「このコップにこの種を指で弾いて、一発で入れるとあら不思議！ コップの水を吸い上げた種はにきよきよ……」

「誰が宴会芸スキル教えろつて言ったこの駄女神！」

「つて宴会芸じゃねえか！」

「ええ——!?!」

思わず俺も突っ込んだ。

俺とカズマに突っ込まれてショックを受けたのか、アクアはショボンとしながらテーブルの上の種を指で弾いて転がし始めた。

いやまあ、自慢のスキルを教えようとして突っ込まれたら落ち込むかもしれないが……。目立つから頭の上のコップを下ろしてほしい。

「ハルヒトのスキルはなんかいいのあるか？」

「うーん……。俺の場合、狙撃スキルと弓スキルでも覚えるか？ 俺には関係のないことだが、お前が使う場合は矢弾代がかかる」

カズマが俺にも聞いてきたので無難なやつを教えようかと思つて

いると……

「あつはつは！ 面白いねキミたち！ ねえ、キミがダクネスが入りたがってるパーティーの人？ 有用なスキルが欲しいんだろ？ 盗賊スキルなんてどうかな？」

隣のテーブルから明るい声が聞こえた。

反射的にそちらを見ると2人の女性がテーブルに腰掛けてこつちを見ていた。

1人は軽装で盗賊風、頬に小さな刀傷がある銀髪の美少女。

もう1人はカズマよりも身長が高そうな、フルプレートアーマーを身に付けた金髪の美女だ。

「えっと、盗賊スキル？ どんなのがあるんでしょう？」

カズマの質問に上機嫌で盗賊風の少女は応える。

「よくぞ聞いてくれました。 盗賊スキル発動使えるよー。 罠の解除に敵感知、潜伏に窃盗。 持つてるだけでお得なスキルが盛りだくさんだよ。 キミ、女子先職業の冒険者なんだろ？ 盗賊のスキルは習得にかかるポイントも少ないしお得だよ？ どうだい？ 今ならクリムゾンビア一杯でいいよ？」

「安い……まあ、どうするかはカズマ次第だな」

「よし、その話乗った！」

俺のつぶやき後押しにカズマは嬉々として店員を呼ぶ。

「すんませーん、こつちの人に冷えたクリムゾンビアを一つ！」

○ カズマがスキルを習いに行ったので暇になった俺は鞘から抜いた  
〈鉄の剣 改〉の刃を明かりに照らす。

カエルのだ頭をかち割った影響か……少し刃こぼれしていた。

「めぐみん、アクア……ちよつと待っていてくれ。 剣のメンテナンスしてくる」

「わかったよー」

「わかりました」

俺が言うと2人はまだいじけているのか少し暗いトーンで返事を返してきたのだった。

ギルドから出て少し離れた位置にある道具屋で〈鉄鉱石〉を購入した俺は宿の裏手、そこにあるスペースにやってきていた。

「再鍛製で剣の強化……してみますか」

俺は〈鉄の剣 改〉を左手に持ち、基本素材ベーの認識を与える。

すると、球体で薄紫色の魔力力場ヴェーに包まれた剣が宙に浮き、手のひらの上で滞空する。

次に素材認識マテリアルを与えるために、右手に幾つかのアイテムを倉庫から召喚して手に取る。

さつき買った鉄鉱石に古道具屋で買った小さなマナタイトの欠片に魔力を与えて素材認識させると、空色の魔力力場に包まれ、滞空する。

そして前と同じ方法で、《変換》《融合》《鍛錬》《仕上げ》の4工程を実行……出来上がった剣は……鈍色の刃が白銀に近い輝きを得て、別の剣に生まれ変わっていた。

〈鋼の剣 魔力+〉という感じの……魔力を少し高めてくれる剣のようだ。

おあつらえ向きだなあ……魔法剣士にはだけど。

そういえば……思い返した俺は冒険者カードのレベルの欄を見てみると、レベルが3になっていた。

保有しているスキルポイントは7……あと1で中級魔法を覚えられそうだな。

冒険者が中級魔法を取ろうとすると、ほぼ2割増しのスキルポイント10でやつと習得できるそうなの。

俺は一応魔法職にも当たるので一割増しのスキルポイントは必要ない。

そのため、元々の必要なスキルポイントは8なのである。

ちようどいいクエストないかなあ……そんな事を考えながら俺は冒険者ギルドに戻るのだった。



○

俺がギルドに戻ると、カズマもスキルを習得して戻ってきていた。「公の場でいきなりぱんつ脱がされたからって、いつまでもメソメソしてもしようがないね！ よし、ダクネス。 あたし、悪いけど臨時で稼ぎのいいダンジョン探索してくるよ！ 下着を人質にされてあり金失っちゃったしね！」

「おい、まてよ。 なんかすでにアクアとめぐみん以外の女性冒険者達の目まで冷たい物になってるから本当に待って」

早口で弁明するカズマの声……ぱんつを脱がした？

「戻ってきたらなんの騒ぎだ、何やったんだよカズマ……」

「ハルヒト!? どこ行ってたんだよ！」

とまあ、カズマが経緯を俺に話すのだが……搔い摘んで、経緯をまとめると

「なるほど、スキルを習って実践して相手のものをランダムに取るステイルでクリスさんのぱんつを脱がし、彼女の有り金全部とぱんつを交換したってことか？」

神妙な顔して頷くカズマ……悪気はなかったと見るか。

「……すまなかった、クリスさん。 うちのバカがやらかしたことに ついては謝らせてくれ」

俺は彼女に深く頭をさげる……

「いいって、いいって！ あたしが持ちかけた賭けみたいなものだったし……本当に、気にしないでね？ でも、これくらいの逆襲はしたっていいでしょ？」

「は、はあ……」

「それじゃあ、ちよつと稼いでくるから適当に遊んでいてダクネス！

それじゃあ行ってみようかな！」

悪戯な笑みを残してクリスさんはメンバー募集掲示板を見に行つてすぐにパーティーを見つけたのだろう。

ダクネスと呼んだ人に手を振りながら、臨時パーティーと共にギルドをあとにしていた。



「えっと、ダクネスさんは行かなくて良かったの?」

俺の座っている場所の真ん前に、自然に座るダクネスって人にカズマが訪ねていた。

「うむ。私は前衛職だから前衛職なんてどこにでも有り余っている。でも、盗賊はダンジョンに必須な割に地味だからなり手があまり多くない職業だ。クリスの需要ならいくらでもある」

なるほど……職業によって需要があるないはやっぱりあるんだな。

めぐみんの話ではダンジョン探索は朝一からで……おそらく、クリスさんはダンジョン前でキャンプするのだろうと。

「それはそうと、カズマは無事にスキルを覚えられたのですか?」

めぐみんがカズマにそう聞くと、ニヤリと不敵に笑う。

「ふふん、まあ見てろよ? 行くぜ! スティール!」

カズマが右手を突き出すように構えるとその手には黒い布が握られていた……

ぱんつだった

「なんですか? レベルが上がってステータスが上がったら、冒険者から変態にジョブチェンジしたのですか? ……あの、スースーするのぱんつ返してください……」

てか、めぐみん……意外と過激な下着を身につけてるんだな……黒とは驚いた。

「本当に故意でやってないんだよな?」

やった当の本人の慌てぶりからわざとじゃないとは思いたい……ぱんつを返すカズマは一層小さくなっていった。

「あ、あれ!? お、おかしいな……こんなはずじゃ……。ランダムで何かを奪い取るスキルのはずなのに!」

周りの女性からの視線は零下を超えた凍える眼差し……全てがカズマに向けられている。

と、突然バンとテーブルが叩かれた。

椅子を蹴って立ち上がったのはダクネスさん……なぜにそんなに目を爛々と輝かせているんだ?

「やはり。やはり私の目に狂いはなかった! こんな幼げな少女の

下着を公衆の前で？ぎ取るなんて、何という鬼畜……！ 是非とも、是非とも私をこのパーティーに入れて欲しい！」

「いない」

「んんっ……!? くっ……！」

カズマの即答に頬を赤らめて体を震わせる……まさかこの人、M気をお持ちで？

「ねえ、カズマ。この人誰？この人が昨日言ってた、私たちがお風呂に入ってる間に面接に来た人？」

「ちよつと、この方クルセイダーではないですか。断る理由なんてないのではないですか？」

カズマがしまったという顔をする。

「……何か問題でもあるのか？」

俺がカズマに直球で聞くと手招きしてきたのでそっちに行く、ひそひそと

「めぐみん、アクアだけでも大変なんだぞ、これから……問題児がこれ以上増えたら俺とお前にかんりの負担になるだろ!？」

こんなことを言ってきた……まあダメなところもあればいいところもあるのが人だ……が、うちの面々はその振り切り方が極端ってわけなのだろう。

「組むだけ組んでみたらどうだ？」

とりあえず組んでみてダメなら断る……これでいいだろうとカズマに言う。

するとカズマは裏切り者と言いたげな顔で意を決したように表情を引き締めた。

「実はなダクネス。俺たちはこう見えて、ガチで魔王を倒したいと考えている」

カズマの意図を察した俺は口をささず見守ることにした。

「ちよつどいい機会だ、めぐみんも聞いてくれ。俺たちはどうあつても魔王を倒したい。そう、俺たちはそのために冒険者になったんだ。と、言うわけで。俺たちの冒険は過酷なものになるだろう

……特にダクネス。女騎士のあんたなんて、魔王に捕まったらそれ

はもうとんでもない目に遭わされる役どころだよな?」

「ああ、全くその通りだ! 昔から、魔王にいやらしい目に遭わされるのは女騎士の仕事と相場は決まっているからな! それだけでも行く価値はある!」

「……………え!?」

「えっ? 何かおかしいことを私はくちばしったか?」

強い同意のダクネスさんに驚いた俺とカズマの声がハモる……………同意するところじゃない気がするのだが……………

「めぐみんも聞いてくれ。相手は魔王。この世で最強の存在に俺たちは喧嘩を売るつもりなんだ。そんなパーティーに無理して残る必要は……………」

それを聞いた途端にめぐみんがガタンと椅子を蹴って立ち上がる……………椅子に恨みでもあるのか、この連中は。

「我が名はめぐみん! 紅魔族随一の魔法の使い手にして爆裂魔法を操りし者! 我を差し置き最強を名乗る魔王! そんな存在は我が最強魔法でけしとばしてみせましょう!」

ギルド内の視線を集めて、めぐみんがそれは見ていて清々しくも感じる厨二病宣言をした。

自信満々なドヤ顔してんじやないよ……………魔王が爆裂魔法一発でノックアウトできるとかどんなイーजीモードだよ。

「ねえカズマ、ハルヒ……………」

がつくりと項垂れるカズマの袖をクイクイと引っ張るアクア。

「私、カズマの話を聞いたら何だか腰が引けてきたんですけど。なんかこう、もつと楽しんで魔王討伐できる方法ない?」

アクアの発言に俺とカズマはこめかみを押さえながら言った。

「むしろ、お前が一番やる気を出せ!」

と、その時だった。

「緊急クエスト、緊急クエスト! 街の中にいる冒険者の各員は至急冒険者ギルドに集まってください! 繰り返します。街の中にいる冒険者の各員は至急冒険者ギルドに集まってください!」

受付嬢ルナさんの声が街に響き渡る……………大音量のアナウンスが流

れてきた。

マジックアイテムか何かで音声を増幅拡大してあるのだろう。

「おい、緊急クエストってなんだ？ モンスターが街に襲撃に来たのか？」

「もしそうなら緊急事態かもしれないが……」

カズマの疑問、俺の予測……普通のファンタジーな異世界なら通るベタなイベントだと思う。

しかし、よく見ると……ダクネスさんとめぐみんがどこことなく嬉しそうな雰囲気、不安を感じている様子はない。

「いや、ハルヒトの予測は違う。多分、キャベツの収穫だろう。そろそろ収穫の時期だしな」

「……は？」

キャベツ？ あの緑の野菜のこと……？

「は？ キャベツ？ キャベツってモンスターか何かか？」

カズマが呆然とそんなことを言う。

すると、ダクネスさんとめぐみんが彼をかわいそうな人を見る目で見つめていた。

「キャベツとは、緑色の丸いやつです。食べられるものです」

「噛むとシャキシャキする歯ごたえの、美味しい野菜のことだ」

「そんなこと知つとるわああ！ じゃあなんだ？ 緊急クエストだの騒いで、冒険者に農家のお手伝いさせようってのか？ このギルドの連中は？」

「いや、収穫のお手伝いの方が簡単なお仕事だろう……元には俺たちは土木工事のバイトもしてたし。でもなんだか嫌な予感がするんだが……」

俺が説明を求めるようにアクアを見ると

「あー……ハルヒとカズマは知らなくて当然よね。ええつと、この世界のキャベツは……」

アクアがなんだか申し訳なさそうに説明をくれようとするのを遮るようにルナさんが大声で説明を始めた。

「みなさん、突然のお呼び出ししません！ もうすでに気がついて

いる方もいらつしやると思いますが、キャベツです！ 今年もキャベツの収穫時期がやってまいりました！ 今年のキャベツは出来が良く、一玉の収穫につき報酬は一万エリスです！ すでに街中の住民の皆様には家に避難して頂きました！ ではみなさん、できるだけ多くのキャベツを捕まえ、ここに納めてください！ くれぐれもキャベツに逆襲されて怪我をなされないようお願い致します！ なお人数が人数。額が額なので、報酬の受け渡しは後日まとめとなります！」

キャベツの収穫？

キャベツに逆襲されて怪我をなされないよう？

……は？

俺の疑問はさておき、ギルドの冒険者連中は歓声をあげる。

戸惑いながらカズマ達を追うように、何事かとギルドの建物を出ると……

街中を悠々と飛び回る緑色の丸いやつ……紛れもなくそれは……キャベツだった。

俺とカズマがことを把握できずに立ち尽くしていると、いつの間にか隣に来ていたアクアが厳かに告げる。

「この世界のキャベツは飛ぶわ。味が濃縮してきて収穫の時期が近づくと、簡単に食われてたまるものかとばかりに。街や草原を疾走する彼らは大陸を渡り、海を越え……最後には人知れぬ秘境の奥でひっそりと最期を迎えると言われているわ。なら、私たちは彼らを一玉でも多く捕まえて美味しく食べてあげようってことよ」

「俺、もう馬小屋に帰ってね寝てもいいかな」

呆然とつぶやくカズマの隣を勇敢な冒険者達が氣勢を上げて駆け抜けていく……彼らもキャベツの生き様に感化されて熱く滾る漢達なのだろうか？

俺は鍛製の機能、倉庫から弓と矢筒を呼び出すと矢筒を腰に固定して左手には弓を持つ。

矢筒には倉庫から一緒に呼び出された石の矢が詰まっている。

「よし、カズマ……俺はキャベツの収穫に行つてくりゆうっ！」

おそらく俺の目は\$になっているだろう……一万エリス……待つてろよおおお！

「あ、おい待てハルヒト！ お、おいていくなあああ！」

「あ、待つてよハルヒー！」

あ、そうそう。

これは余談だが、ダクネスさんは……不器用だった……剣がなかなか当たらないクルセイダーというのも納得。

しかし、硬かった……最硬にな！

### ○第三者視点

「キャベキャベキャベツ！」

キャベツの鳴き声がこだまするその戦場で、ハルヒトは踊る。

彼女が引きしぼる弓の弦はキリキリと不快な音響を鳴らす。

「……狙撃！」

ヒュツと放たれた矢はハルヒトに打撃を加えようとしていたキャベツを射抜き、地に落とす。

「狙撃！」

矢を番え、撃つ……番えて撃つ……

矢弾はハルヒトからしたら無限と言っても過言ではない。

平時、鍛製による加工で作り出される矢が倉庫には有り余るほどに備蓄されているためストックはまだまだあるのだ。

ハルヒトが矢を放つたびに転がるキャベツはゆうに八十玉を超えていた。

やがて矢筒の矢は尽きるが、ハルヒトは矢筒と反対側に吊るしてあった鋼の剣を抜くとそれを地に突き刺した。

「ちようどいい……試すか」

キャベツを倒しているとレベルが上がりスキルポイントを得ていたのだ。

ハルヒトは冒険者カードを操作して中級魔法を習得した。

「プロムナード精霊回廊を使うのは初めてだが……いっちょやってみますか！」

地に刺した剣を抜きハルヒトは詠唱を唄う。

ハルヒトは転生者である。

その肉体は男であったにもかかわらず今は女のものとなっている。ハルヒトの肉体に起こった変化はそれだけではなかった……彼女が精霊との交信が可能になっていたのだから。

剣を右手に持ち、弓を倉庫に格納したハルヒトは左手を突き出す。

その突き出された手の先には赤い火球が宙に浮いていた。

「全てを焼き焦がす火炎の王よ。 汝に我は願う。 我を滅ぼそうと、我を倒そうとせん彼の敵に終焰を与えよう」

ハルヒトの手先の火球が小さく収縮していく。

「私の願いは汝の、汝の願いは私の願い。 永劫の時を焼却せし汝の咆哮を轟かせよう……！」

やがてその火球は徐々に大きくその魔力密度を増して行く……そして……ハルヒトは火炎の王の名と共にその終焰を解き放つ！

「ヘロアー・イフリート・クリムゾン〜ッ！」

解き放たれた焰が、辺りを赤く照らし出す！

着弾点を中心に巨大な火柱と大気が急加熱されたことにより上昇気流が発生……火柱に引き寄せられるようにしてキャベツ達は上昇気流に吸い寄せられていった。

中級魔法の〈ヘクリムゾン〉にハルヒトは精霊の力を借り、それを上級魔法に近い大魔法に昇格させたのだ。

その威力は火炎魔法の中で最強と謳われる〈インフェルノ〉に匹敵する……！

紅蓮の焰が飛来するキャベツ達を包む。

焼かれたキャベツ達はいい火加減で火を通されていたのであった。

「……後日が楽しみだ……！」

ハルヒトのつぶやきは近くで呆然と見守っていたカズマとアクアに聞こえることはなかった……。

(続く)

擬似無双の代償ととある魔剣使いのお誘いと！

○カズマ視点

「へロアー・イフリート・クリムゾン！ッ！」

ハルヒトが叫び、魔法を放つ……その効果はめぐみんの爆裂魔法に劣ると思うが、それでも激烈な炎の渦がキャベツ達を引き込み、焼き上げていく。

「す、すげえ……なんだあれ……」

目の前で起こった事に啞然としてしていると、アクアが我に返ったように俺に説明をくれる。

「あれは精霊魔法よ。 プロムナード 精霊回廊に住まう精霊に呼びかけて、その力を借りることができる魔法なんだけど……イフリートってどういう事よ!?？」

「イフリート？ てか、精霊回廊ってのはなんだよ」

アクアが途中で話を切ったが俺はその聞きなれない単語に再度、質問をする。

「あ、ごめん。説明するとね、精霊回廊は稀に人に宿る特殊な交信能力なの。この世界には精霊がいるのはカズマも知ってるわよね？」

「ああ、それは聞いた気がする」

ハルヒトが精霊とかどうの言ってたのは最近のこと……俺はアクアに続きを促す。

「元来、精霊と人が繋がる事はないの。それに、精霊に呼びかけて精霊魔法を起こすことができるのはエレメンタルマスターだけなの……でも、精霊回廊の能力保有者はそれすら関係なく精霊魔法を行使できるわ」

何それ怖い。

「でも、本来は媒体となる物が必要になるの……ハルヒはそれを中級魔法の魔法を媒体にして精霊魔法を行使しているわ。それに今のは火の元素が、その名を知らぬ者はいない《豪焰の精霊王 イフリート》の力を借りた精霊魔法……これは単純にすごいことなのよ？」

「どういう事だ？」



少し間を空けてアクアは言う。

「そりやそうでしょう？ その属性の、精霊の王なのよ？ 普通はその精霊の名を借りた魔法を行使するなんてできるわけないし、精霊回廊にたまたま精霊王が棲みつくとも限らないし。精霊回廊は要するに、精霊との絆や繋がりが強い者になんらかの原因で現れる身体に精霊を住まわす事のできる特異体質なのよ」

要するにチート能力……ってあれ？

「ハルヒトが持つてるチート能力は〈鍛製〉じゃなかったのか？」

「うーん、その辺はハルヒに最初から宿ってたみたいね。肉体の素質で活性化したと見るべきかも」

偶然目覚めた的な……

「っておい！ ハルヒトが倒れてるぞ!?!？」

「……そんなわけって、えー!?!？ ハルヒの魔力ってかなり高いはずなのになんで!?!？」

ハルヒトは魔力の高い魔法剣士だ。簡単に魔力枯渇を起こすようなやつじゃないのに！

「おい……う、動けない……助けてくれ……」

何やってんだよおおお!?!

てか……キャベツたちのヘイト集めたのだろうか……倒れたハルヒトに奴らが殺到してる!?!

「おい、アクア！ ハルヒトを助けるぞ！」

「ええ〜!?!？ さすがにあの数は……無理でしょ!?!？」

ハルヒトの防御力は魔法使い並みだ……つまりは打たれ弱い！

あんな数でリンチされたら昇天ものだろうが！

俺は頼りない剣を抜いて助けに向かおうとして動きを止めた。

ハルヒトの前にか……あいつがいた……あのクルセイダーが！

●

○

やり過ぎた……魔力枯渇を起こしてしまい、俺は動けなくなってい

た。  
精霊回廊フロムナードの中にいたイフリートに頼んで詠唱を共にしてもらった結果、恥ずかしさのあまりに歩調が乱れて俺だけが魔力を行使した結果、中途半端な火力と大幅な効率ダウンによる魔力浪費で体の中の魔力が綺麗さっぱりにカラになった。

「おい、大丈夫か小僧!? 息はあるんだろうな?」

「大丈夫だ……魔力枯渇しただけ……霊力共振できないとこうなるってことが骨身に染みてわかったよ……」

焦った声が聞こえてきた……それに俺は心話しんわで返事を返す。

今俺に話しかけてきたのは、俺の精霊回廊に住み着いた精霊の……豪焰の精霊王こと、イフリートである。

「全く……だから歩調を合わせると……本来ならお主の全体量、4分の1で済む魔力消費だというのに。焦りすぎだぞ!」

イフリートからのお叱りを受けつつ解説しておこう。

俺は精霊の力を借りる精霊魔法を扱うことができる。

もともと精霊魔法はクリエイターなどの精霊魔法を扱う物しか使役できない。

だが、俺は精霊を住まわせることのできる体質……精霊回廊を有しているので精霊魔法を扱うことができるのだ。

本来なら、この精霊回廊はエルフ族などの妖精系の種族が持つ能力らしいのだが、一部の人間にも稀に発現するらしい……イフリートによればだが。

で、精霊魔法の行使に必要な技能が二つある。

まず一つは心話しんわである。

心話とは己の身の内に住まう存在と会話する法である。

この心話を使えば、精霊回廊に住まう精霊と話すことができるようになるのだ。

次に霊力共振能力だ。

この能力は精霊の霊力と俺の魔力を共振増幅させて1を4に倍加させる技能だ。

今回は俺がタイミングをトチって失敗したから、焰でなく赤い熱風

を生み出す羽目になったがな。

さて……殺到してくるキャベツを迎え撃つこともできない俺は……地に伏したまま顔も上げられない状態だ。

ヘイト管理もできてないとは……つかキャベツにやられて俺の第二の人生は終わるのか？

「大丈夫だ……お前は私が守ってみせる！」

凜々しい声が聞こえた……俺は首を持ち上げてまえを見ると……金髪の髪が見えた。

「ヘデコイ〜ツ！」

その刹那に、殺到するキャベツを受け止めるのはクルセイダーのダクネスさん……だった！

重々しく、鈍い音がこちらに聞こえてくる……

「だ、だめだ……ダクネスさん……俺のことはいいから……引いてく……れ……？」

俺がそう言おうとした時、ダクネスさんの雰囲気がおかしく見えた……だって……

「み、見られている……私のこのボロボロになった服の切れ目から見える柔肌を……！」

……何言ってるのこの人……？

キャベツの突撃を両手を広げて嬉々と、体で受け止めてるためか、鎧が外れてこつちに飛んでき……って!!?

ダクネスさんから外れた肩当がゴツンツ！と俺の額に当たった……メインカメラツ!!?

「く、おおお……」

俺が悶絶しているのに気がついていないのか……荒い息を吐くダクネスさんはその場から一步も引かない。

「お、おい！ ハルヒト！ 助けにきたぞ……アクア、頼む！」

「ふふーん、任せなさいな！」

アクアが俺を起こしてくれて、そのまま背負ってくれた。

「ありがとう、アクア……カズマ。めぐみんは？」

「モンスターへの迎撃に爆裂魔法使ってダウンしてるよ」

なるほど……だからここにいないのか。

「とにかく、撤退するぞ！ ダクネスも来い！」

そう言うとかズマは俺を背負うアクアを連れて正門前に連れてきてくれた。

その後、カズマは習ったスキルの〈敵探知〉〈潜伏〉〈ステイル〉を駆使して、キャベツを乱獲したらしいが、正門前で休んでいた俺が知る由もない。

●

○

魔力枯渇状態なので体のだるさが抜けず、少々クラクラする。

そんな状態の俺は宿を借りて眠っていた。

あれから丸一日経ってようやく魔力も快復したので、宿を出た俺はギルドに向かう。

「おう、ダクネス。みんなもお揃いか？」

ダクネスの姿は、先日見た鎧姿ではなく黒で統一された薄着の服装だった。

その背中には大剣を背負っている。

「いや、もうそろそろカズマ達も来ると思うが……あ、そうだハルヒト。これからよろしく頼む」

「ん、こちらこそよろしくなダクネス」

はい、パーティーメンバーが増えました。

防御専門のクルセイダーのダクネスが仲間に加わり、これでまともなクエストに行けるようになるはずと思いたい俺だった……。

まあ……ダクネスに攻撃力を求めるのは間違いなきがするが。

「ふむ？ 来ていましたか、ハルヒト。そう言えば少し聞きたいことがあるのですがいいですか？」

「ん？ 構わんが何か用か？」

冷えたネロイドをおごってやりながら俺はめぐみんの疑問に応えようと席に座る。

「カズマから聞いたのですが、二重詠唱の魔法を使ったのですか？」

「……ああ、使ったが？」

「……詠唱を覚えられないのではなかったのですか？」

……あ。

「あー……確かにそんなことも言ったな……」

尻すぼみになる俺の言葉を聞き、立ち上がったためぐみんは俺の前に来ると杖でグリグリと頬をつつきながら

「だって明らかにおかしいじゃないですか。　ハルヒトは魔法剣士なのでしょう？」

「そ、そうだ。　俺は魔法剣士だ……が、今回は精霊魔法を使ったわけな……」

頬をつつかれて喋りにくいのだが、俺はめぐみんに精霊回廊についてを話した。

「なるほど。　ということはいつか私と爆裂道を歩むというこ」

「おかしい。　それは色々とおかしいからな!？」

めぐみんの言葉を遮るように俺はツツコんだ。

「ふふ、冗談ですよ。　ちなみに、今のハルヒトの魔力はいくらくらいなんですか？」

俺は無言で冒険者カードをめぐみんに見せた。

めぐみんは興味深そうに見ていたのだが……何だかだんだん震えているような……どうしたんだ？

「……ま、魔力が紅魔族随一の我を超えている……だとおおお!!」

突然、めぐみんが絶叫した……あ、バカやめろ。

「おい、人目があるから絶叫してんじゃねーよ！　つかプライバシーの問題だからな!？」　……って俺の魔力そんなに高いの？」

「こ、これは……ハルヒト。　何で物理職を目指したのだお前は」

めぐみんの手からスツとカードを取り、ステータスを眺めるダクネスは失礼なことを言ってきた。

「おい、どういう意味だ」

俺がダクネスに文句を言おうとした時だった。

「お呼び出しを申し上げます。　ケンナシ　ハルヒト様、ケンナシ　ハルヒト様。　冒険者ギルド受付までお越しく下さい。　繰り返

します……」

ギルド館内に鳴り響くアナウンスは俺の呼び出しのようだ。

「だ、そうだが？」

ダクネスからカードを受け取りながら

「ごまかすなよ……まあいいが。カズマには伝えといてくれ。呼

び出されてるって」

「承知した」

● ダクネスの返事を待つて俺は受付に向かうのだった。

### ○第三者視点

「俺に指名が？」

「はい。冒険者ギルドではレベルが30を超えると様々な特権を得られるはご存知ですよね？」

その言葉に頷きつつ、ハルヒトはアクセル冒険者ギルド看板受付嬢のルナから一枚の紙を渡されていた。

その紙に目を通してながら聞きなれない名を読み返す。

ミツルギ キョウヤという名前を。

アクセルに滞在するほとんどの冒険者は駆け出しである。

冒険者ギルドではある取り組みを行っている。

その取り組みとは、〈パーティーメンバー斡旋〉である。

この取り組みは、高レベルの域に値するレベルが30を超えた冒険者に与えられる特権である。

アクセルの冒険者ギルド職員が吟味した、ダイヤの原石のように才能に溢れる若い新米冒険者をベテランの冒険者が求めることがある。

ギルドにお金を払うことで、低レベル冒険者だを紹介してくれる制度でうまくいけば将来有望な新規パーティーメンバーを得ることができる。

一方で誘われた冒険者は高レベル冒険者についていき、少々危険なクエストも受けることができる。

そして何よりも、安全にレベルを上げれるメリットがある。

「ルナさんの頼みだし、受けてもいいけど……この人……」

ハルヒトの知る名前ではないが、明らかに自分と同じ存在だと彼女は予測した。

その理由は……名前。

「日本人だよな……」

ハルヒトの疑問はルナに聞こえなかった。

「はい、では受理という形で進めさせてもらいますね?」

「ああ、構わない。それで、そのミツルギって人は今この場にいるのか?」

ハルヒトが受付嬢にミツルギの所在を訪ねると

「はい、あちらの席にいらっしやいますよ」

ルナの指先が指ししめす場所には、茶髪の若者が待っているようだった。

「わかった。それでは失礼します」

ハルヒトは受付嬢に礼を言うと言と受付を後にした。



### ○ミツルギ視点

久しぶりにこの街に帰ってきた……魔王軍の怪しい動きありと王宮からの依頼でなければ来ることのなかったこの街に僕はある一種の運命を感じた。

「あんな子がいたとはね……キャベツの騒乱の時に彼女をみて、2人はどう思った?」

僕の問いに仲間のクレメアとフィオは

「うん、すばしっこくてなかなか厄介なキャベツを丁寧に撃ち落としたりしたところを見ても、優秀なアーチャーになることに違いないと思うわ」

「でも、魔法使ってたみたいだけど……どうやったのかな?」

2人の意見はかなり好感触といったところかな?

準備などもしないといけなかったから、実際に僕らが動けるのは二週間後になる。

それならと、新しいパーティーメンバーを探してみようと提案してきたのはクレメアだった。

ソードマスターの僕に、盗賊のフィオと戦士系職のランサーであるクレメアで今までやってきたけど……遠距離攻撃持ちのメンバーが欲しかった。

そして先日 of キヤベツの収穫の時に、彼女を見た。

長い金髪で毛先が青銀髪になっていた不思議な髪色の少女を見た僕は早速ギルドに問い合わせた。

そして、その名が「ケンナシ ハルヒト」と聞いた時は驚いた。

僕と同じ存在である可能性が高い。

おそらく凄い潜在性を秘めているはずだ……と、現在。

パーティーメンバー斡旋のサービスを受けて、彼女にコンタクトを取ろうとしている。

「楽しみね、キョウヤ！……でも、どんな実力なんだろう？」

「私としては、初めて組む後衛職だし……どう支えればいいのか？」

2人は口々に話し合っている……見ていて微笑ましい光景の中、彼女が来た。

「取り込み中失礼する。 あんたがミツルギさんでいいのか？」

振り向くと底知れない存在を感じさせる強い光を宿した美少女がいた。

「確かに、僕はミツルギ。 ミツルギ キョウヤだよ」

「そうか。 俺はハルヒト……ケンナシ ハルヒトだ。 魔法剣士をしている」

「ま、魔法剣士!?」

僕の後ろでクレメアが驚いて声を上げる……なるほど、だから弓と魔法が使えるのか。

「またマイナーな職業を選んだのね……あなた」

「マイナーとは失礼な……まあ、俺以外に見たことがないからマイナーなのかなあ……」

「すまないが、本人かどうか確認させてかれないか？ 冒険者カードを見せて欲しいんだけど」



冒険者カードの掲示を求めると、彼女は迷う事なく懐から冒険者カードを取り出して見せてくれた。

僕は名前の欄を確認してすぐにカードを返した。

「うん、本人で間違いないね。　すまない、疑うような真似をしてしまった」

「いや、別に構わねーよ。　で、世間話でもどうだ？」

彼女の提案で、まずは世間話をすることにした。

それからしばらく、数時間ほど談笑してわかったことが一つ……女子としての隙が大きすぎるのがわかった。

まず、男女の距離感の取り方をわかっていない……普通は距離を測りながら余計なことを教えないようにと自分を隠すはずだが、その素振りがまるで見えない——と言うか、言動が男っぽいのだ。

女子初心者という点を見るとおそらく……彼女は、元男かもしれない。

「じゃあ、一週間ほど僕らのパーティーの臨時メンバーとして参加して欲しい」

「承知した。　じゃあ、明日またこのギルドで合流しよう」

「よろしくね、ハルヒトさん。　私はクレメア。　戦士職のランサーをしてるわ！　危なくなったら私の後ろに隠れてくれてもいいからね！」

「私はフィオです。　よろしくお願いしますね」

ハルヒトさんに自己紹介した2人にハルヒトさんは

「短い間かもしれないが、よろしく頼む」

無難に少しだけ頬を朱に染めて返していたのだった。

さて、受けるクエストは廃鉱山探索に行こうと思っっているが……そこで見せてもらおう。

彼女の真の実力をね！

(続く)

## 交流とドラゴンとの激闘を！

### ○第三者視点

仄暗い廃鉱山の奥地にて、剣戟と魔法の炸裂音が轟く。

「へエアロスラツシャーッ！」

烈風の真空刃が少女の左手から放たれ、巨体を持つ生物の強靱な鱗を切り裂いた。

グオオオンッ！

鱗を甲殻を裂かれ怒り猛り、暴れ狂うその影はその爪をその尾を振り回す。

「くっ……なんでこんな廃坑にドラゴンが棲んでんのよおおお！」

若草色の髪を持つ少女が悲鳴に近い叫びをあげながら、ドラゴンの……振り回される大木ほどの太さのある尾を器用に避けて見せた。

「ちよつと、クレメア！ 避けてないで攻撃しな……きやあああ!？」

「ファイオ!？」

ドラゴンの予備動作なしで放たれた酸性のブレスに桃色の髪を持つ少女が巻き込まれかけたが……その間に割って入るのは金髪の少女。

彼女は羽織ったマントを翻しながら、精霊魔法を行使した。

「龍の息吹をも弾く力を！ 汝の力と我が祈りの元に、顕現させよう

！へエアリアル・スファイア！」

一陣の風が竜巻の様に渦巻き、ドラゴンの吐きだしたブレスを弾き散らす。

「こつちにー！」

ファイオと呼ばれた少女の手を取ると金髪の少女が手を引き、2人は岩陰に身を隠した。

「こつちは僕に任せてくれ！ 来い、スカルヘッド・ドラゴン！」

魔剣グラムを振るい、ドラゴンに斬撃を放つ茶髪の青年。

魔剣の一撃は不快な金属音を響かせ、はじき返された。

「クソッ！ グラムで切れないなんて……何故だ！」

ステップを踏み、振り下ろされる顎<sup>アキト</sup>を避ける青い勇者の鎧に身を包

んだ青年は思わず悪態を吐く。

「キョウヤ！ サポートする！」

「すまない、頼む！」

「奴の弱点は風……さつき解析能力で割り出した！ だから……。」

烈風の女王よ、汝の祝福を我が友に！ 我に与え給え！ へエアリア

ル・エンチャント！」

詠唱の後に、魔剣グラムが風を纏う。

「これなら斬れると思う！ キョウヤ、合わせるぜ！」

「ああ、任せる！」

金髪の少女ことハルヒトは腰に帯びていた剣と、自らの能力で収納していた剣を抜く。

彼女の両手に携えられた二本の剣は風を纏っている。

そんな刹那、ふとハルヒトは思う……どうしてこうなった……と。

○ 俺は完全武装で街中を歩く。

俺の、人からの見た目は桜色のタンクトップの上に白銀のチェストプレート<sup>○</sup>を装備して、スリットの入った浅黄色のタイトスカートの左<sup>●</sup>右に太ももを守るため、魔法金属製の草摺り<sup>フールド</sup>を下げています。

背中には純白の、魔法のマントを装備している。

左手には指先のない白の手袋<sup>オープン・フィンガーローブ</sup>をはめ、右手には矢を引くため薬指と小指以外の指先を保護する白い手袋をはめている。

左腕には金属製の籠手を装備、右手は手首から肘までの長さの、魔符の編み込まれたバンドを装備している。

そして、腰の左側に赤い鞆に剣を納め、それを紐でベルトに吊るし、右側には矢筒を吊るしている。

矢筒には白樺の弓を固定して納めてある。

黒のオーバーニーソックスに真っ白なブーツを履いている。

肩から下げたポーチには回復薬などの道具を詰めておいた。

籠手と草摺り、チェストプレートに魔法のマントは初期装備でそれ

以外はクエストの報酬などお金をためていた貯金を崩して買い揃えたものだ。

ちなみにマントには周囲の万物に宿る魔力を体に少しずつ吸収させてくれる効果があったりする。

「じゃあ、気をつけて行ってこいよ」

「ああ、もちろんだ。見送りありがとうな」

俺は見送りをしてくれたカズマに礼を言いながら正門前で待っていたミツルギの元に行く。

「彼が君の……今のパーティーのリーダーかい？」

「まあ、そんなところだ。で、今日はどこに向かうんだ？」

「時間はあるからね。今日は、魔鉱山でミスリル銀の採掘依頼を受けたんだ」

「敵探知と潜伏は任せてね！ 私が居ればダンジョンとか、洞窟探索は楽にできると思うからね」

「わかった。頼りにさせてもらうよ」

確かに盗賊は必要なのだろう……俺が素直に頼りにすると言うと、フィオは少し恥ずかしそうにはにかんだ笑顔を見せてくれた。

「フィオは盗賊だからね……もし強いモンスターが出ても私の後ろから、ハルヒちゃんやんはモンスターをハリネズミみたいにしちやっつてね？」

「俺の出番がないことを祈つとくよ……まあ、出番がないのも退屈だろうけどな」

そんな事をクレメアに言いながら俺たちはアクセルから出発するのだった。

で、出発してから数時間後。

道なりに進んで森の入り口にてフィオの敵探知に反応があったらしく、一旦止まる。

「なーんか群れてる感じがしますね……」

嫌なものを感じるのだろうか……フィオが眉を八の字にしてしまった。

「うーんと……おそらく、ゴブリンの群れだね……フィオ、クレメア。

「ハルヒトさんを守るフォーメーションで……ってハルヒトさん?!」

「驚くミツルギ……俺が前に出たからだろうけど。」

「二応、俺の実力を見せとくよ」

「いちばん低レベルの俺を守るのは確かにセオリーだろう……だがしかし、俺はその対応にちよつとイラつとしたので敵に八つ当たりすることにした。」

「なんかこう、自分たちの方がレベルが高いと自慢されている気がしたからな。」

「街道の脇にたむろしていたのは……俺たちの目の前にいたのはメジャーモンスターゴブリンの、小鬼の群れだった。」

「大体、10匹ほどか? ん、弓持ちもちらほらと……よーし……吹き荒れ、吹き散らせ! <ウインドカーテン> ツ!」

「俺は最近習得したスキルの<高速詠唱>で短縮した中級魔法のウインドカーテンを使うと次に俺は中級魔法を触媒に、精霊魔法の詠唱を謳う。」

「俺の声に並んで声が響き、二重音声みたく聞こえるが気にしたら負けだ。」

「<全ての空を統べる颯風の女王よ。 汝に我は願う。 我を滅ぼそうと、我を倒そうとせん彼の敵に嵐天の鉄槌を与えよう!」

「俺は<ヘアロスラツシャー>という魔法をベースに精霊魔法の行使を図る。」

「俺の左手、掌の上には短剣ほどの大きさの真空刃が生成されていた。」

「<私の願いは汝の、汝の願いは私の願い。 命刈り取る嵐を、汝の力をここに示そう!」

「俺が頭上に左手を上にかざすと手の上に浮遊していた真空刃が膨張して、球体状態スライアに変化、さらにそれは乱回転を始める。」

「<ヘアリアル・ストーム・ストライク> ツ!」

「手から精霊魔法を放つと、それは手近にいたゴブリンに炸裂した。圧縮された風が暴風の鉄槌となり、ゴブリンの群れを蹂躪した。」

土煙がはけたそこを見ると10メートルほどのクレーターができている、抉られた跡にはゴブリンの血が生々しく残っていた。

血煙と化したゴブリンの遺骸は残っておらず、血だまりは土に還って行く。

切断系の多い風の魔法の性質を丸ごと書き換えて乱回転する暴風の鉄槌でぺったんこに叩き潰したのだ。

「い、今のは……?」

「風の精霊魔法だ。あの程度のゴブリンの群れなら殲滅は容易いよ」

唾然とするミツルギパーティーズの、間の抜けた顔に思わず笑いそうになるが、それを堪える。

「俺はちよつと変わった体質持ちでな……」

俺は理解できない現象を見てフリーズするミツルギたちがかわいそうになったので種明かしよろしく、プロムナード精霊回廊について説明した。

〜少女説明中〜

「なるほどね……という事は君は体に精霊を宿していて、その精霊たちの力を借りて精霊魔法のを行っているというわけなのか」

「ああ。概ね、この仮説は間違っちゃいない筈だ」

もつとも、俺の体に宿ってる精霊はいにしえの、太古の精霊王様方な訳なんだが……規格外もいとところのな。

にしても、何でこんなチート体質になったのだろうか……

まあ嘆いても仕方ないがな……。

「さて、そろそろ出発しようか」

「うん、そうね! 私たちの実力を次は見せてあげるからね、ハルヒちゃん!」

「今回はハルヒさんがMVPです。次は私たちに任せてくださいかね?」

「ああ、わかった。次は休ませてもらうよ……魔力も使ったからな……」

俺は素直に引き下がり、その後も出てくるモンスターを4人で蹴散らして進む。

● そして、3日の時は流れた……。

○ 「あれが廃坑か？」

「間違いない、あれが今回の依頼の、ミスリル鉱石が取れる廃鉱山だね」

アクセルの街から北西に徒歩で3日目かけて、着いたそこは閉鎖された鉱山だ。

閉鎖された理由は……人の手に負えない猛獣が棲みついたかららしいが、どんな猛獣が湧いたのかは知られていないらしい。

と言うのも、偵察隊が深刻な被害を出して帰還する事が多いからだとか……物騒な、嫌な予感がしやがる。

「踏み込むのは明日の朝一番からにしよう。今日はここでキャンプだね」

手分けして俺たち4人は野営の準備を進めた。

「燃え上がれ。〈クリムゾン〉！」

俺は中級魔法の火属性のクリムズンを火種にして、薪に火をつける。

もちろん、魔法制御で威力を殺しているから暴発はしない。

「いやー、ほんとハルヒちゃんうちに来てくれない？」

「そうだな……今日までいっしょに旅をしてわかったが……案外いいパーティーだと思うぞ？ あんたらのパーティーは」

素直な感想にクレメアが嬉しそうに笑っている……が

「が、しかし。俺には帰るべきパーティーがある事を忘れないでくれ……とだけ先に言っとくぞ？」

「う、ぐ。そこはわかってるよ……ほんとだよ!？」

ジト目で俺に睨まれたクレメアはバツの悪そうな顔をする。

「ふっ、冗談だよ」

俺は悪戯な笑みを浮かべてクレメアをからかっていると、彼女はしてやられたという顔になり、フィオに泣きついていた。

そして時は流れ……。

夜の帳が下りて、野營の見張りは交代交代で行う。

寝息を立てているのはクレメアとフィオだ。

冒険者カードを懐から取り出すと、その欄を薪の明かりを頼りに眺める。

この3日間で俺のレベルはかなり上がった。

出発の前はレベル5だったのだが、今はレベル14……出てきたモンスターは個体個体の強さはかなり上がっていたし、これも納得だと思ふ。

得たスキルポイントは9……どう割り振るか……

今日までに習得したスキルは〈狙撃〉、〈弓〉、〈片手剣〉、〈筋力強化〉、〈集中力〉、〈中級魔法〉、〈高速詠唱〉の7つだ。

これに新たなスキルを覚えるかな……うーん、悩むな。

俺が首をひねっていると……

「どうしたんだい？ 難しい顔をして」

暇を持て余したのだろう……見張りのミツルギが話しかけてきた。

無視するのも失礼だと思うので、俺は

「いや、どのスキルを覚えようかなーとな……」

「近接職なら軽業アクロバットを勧めておくよ。回避率に上方の補正が掛かるしね」

「なるほど。 と、言うことは…… ってなかなかコストが高いな。

必要なスキルポイントが3か……軽業は」

「その分スキルの有用性が高いのさ。 ジャンプして滞空中も動けるようになるからね」

そいつは使えるなど相槌を打ちながら俺はスキルポイントの割り振りを終えた。

〈弓+1〉、〈狙撃+1〉、〈片手剣〉、〈筋力強化〉、〈中級魔法+2〉、〈高速詠唱〉、〈軽業〉の割り振りで強化した。

軽業と高速詠唱は強化なしでも十分な効果を出してくれるようなので強化は後回しでもいいだろう。

冒険者カードをポーチに直すと、俺は警戒を緩めないように弓を手



に取っておく。

「ハルヒトさん。君は僕たちのパーティーをどう思う?」

「クレメアにも聞かれたなそれ……まあ、悪くないと思うぞ? 少なくとも俺はだが」

ミツルギは嬉しそうにそれはそうだろうなという顔をしている……ので俺は水を差すことにした。

「ただ、メイン火力……ミツルギだけだよな?」

「……そ、そうだね……僕がとどめをさすことが多いからレベルも一番高いわけで……」

少し困ったように、頬をかきながら俺に言ってくるミツルギ。

「ミツルギ。あんた、自分が強いと思うか?」

俺は彼に聞く……その本心にある言葉を

「まあ、そこそこじゃないのかな……どうしたの、ハルヒトさん?」

「お前が強いんじゃないよ? その魔剣が強いんだぞ?」

「……へ?」

俺は今日までの道中で見てきた事を、ど直球でミツルギにダメ出しをした。

「その魔剣は確かにミツルギを所有者に認めている。それだけのこと……。グラムの真価をまだ引き出しきれてないぞ、あんたは」

「ち、ちよつと待ってほしい……グラムの真価って? いや、その前に僕が強いのでなくて魔剣が強い……?」

「落ち着けミツルギ。確かにステータス的に見たら、あんたは強い。

俺よりも遥かにな……。だからと言って傲慢や驕りを持つのは良くないって言ってるのさ俺は」

ミツルギがショックを受けているので、俺は一応フォローを入れる。

「1つ1つ整理しておくか。あんたも俺と同じチート持ちの日本人だよな? 女神にその魔剣を授けられた……日本人のミツルギキョウヤさん?」

「という事はやっぱり君も……日本から来た……」

「おうよ、改めて自己紹介しとくな。俺の名前はケンナシハルヒト。

体は女だが、精神は男だ。信じられないかもしれないがな……。俺の能力は〈武器鍛製〉つって、素材を使い武器や防具、装飾品から道具までを作る事ができる能力だ」

「まだ能力があったのか……。いや、〈武器鍛製〉がチート能力という訳なのかな？」

「そう言うことだ。精霊回廊は後天的に何らかの事情が絡んで得た能力と俺は思ってるが」

俺はミツルギに今までの経緯を話した。

今のパーティー仲間も日本人で、女神アクアを持っていける《もの》としてこちらに連れ込んだことも話しておいた。

「なるほど……。最初は君も苦勞をしたんだろうね……」

「同情するなら、俺と同じ体験をしてからにしろ。見かけだけの同情は癪にさわるし、腹立つし、胸糞悪い」

「あはは、辛辣だなあ……。でも、噂は本当だったのか」

「ん？ 噂？」

と言うかミツルギは王都に住んでいるのか……

「ああ、王都に高名な預言者がいてね。その人がアクセルの街に〈大きな光〉と〈精霊王を従える者〉が現れると予言したと……。僕がアクセルの街に来た理由は王宮からの依頼でその〈大きな光〉と〈精霊王を従える者〉についてを調べていたんだ」

「へえ……。魔王軍の動きを調べるのも依頼のうちか？」

「まあそんなところさ。魔王軍にも預言者がいるんだ。そして、王都の預言者と同じ予言を出したらしい……。で、僕らはその因果関係の裏取りをするために王都からアクセルに来たという訳だ。そして、来てみたら精霊魔法を使う君と出会った訳だけどね」

「まあ確かに、精霊王は従えているけど……。〈大きな光〉はやっぱりアクアの事か……？」

「その辺については僕もどうとは言えない。君のことかもしれないし、アクア様の連れのサトウカズマかもしれないし、僕のことかもしれない……。ってそんな目で見ないでほしい！ 確かに自意識過剰かもしれないけど！ 可能性もない訳じゃ……。ごめんなさい、すいませ

んでした！ そんな冷やややかな目で、痛い奴を見る目はやめてください！」

俺の、零下の視線を浴びたミツルギは調子に乗ってすいませんと謝罪。

視線を元に戻してくださいと懇願してきた。

「まあ、いいけどよ。で、そろそろ話を本題に戻すか」

俺はミツルギに対して真剣に向き合う事にした。

「さっき俺はあんたが強いんじゃないと言ったよな？」

「あ、ああ。あれはどういう意味なんだい？」

俺はもったいぶらずに即答する。

「魔剣グラムの強さがあるから今のあんたが居るって意味だ……」。

ミツルギは魔剣に頼りすぎてるって事さ。この3日間あんたたちのパーティーにおいてみた感想だよ。グラムはあんたを所有者と認めてるだけ。その真価を、全てを使えてないよ」

「それを言われると確かに……心当たりがあるかな……」

心当たりがあると言うミツルギに俺は

「使えてないなら、グラムに認めてもらえよ。真の伝承者として

さ」

「と言われても……。グラムのメンテナンスは欠かさずやってるし、暇があれば労いの意味も込めて油を塗って磨いているんだけどなあ……」

「いや、そう言う問題じゃない。〃剣技は申し分ない。勇者を自

称するならばその心構えから正せ〃だつてさ」

昨日の午後に少しグラムを鍛製の能力の一つである〈解析〉をした時に、偶然に剣の心に触れた。

「今のは……剣の心なのかい？」

「正確には昨日の晩、グラムを触らせてもらった時に感じたんだけどな……さてと、そろそろ見張りの交代の時間だな」

俺はクレメアと交代する予定だったので、彼女を起こしにかかる前に、ミツルギに助言みたいなのを与えておく事にする。

「弱者を救う理念を掲げるなら、常日頃から勇者であろうと努力し

ろってコトだと俺は思うけどな」

ミツルギにそう言い残して俺はクレメアを起こし、仮眠に入る。

「勇者であろうとするなら……か……」

ミツルギのつぶやきを聞き流して俺は眠るのだった。

○

翌日、俺たちは朝一から廃坑に潜った。

ちなみにミツルギとはギクシャクすることなく、普通に接している。

で、今俺は……

「せつ！」

モン●ンよろしくピッケルでひび割れた岩盤を叩き、鉱石を岩盤から剥がす。

俺は現在、魔法剣士から炭鉱夫にクラスチェンジしていた。

「よし、これだけ集めれば十分だろう。そろそろ引き返そう」

ミツルギの指示通りに俺たちは集めた鉱石を鞆に詰める。

そして、鞆は俺が預かった。

「重いだろうし、俺の能力を使うよ」

俺は倉庫の能力で鉱石を詰めた鞆を収納。

それを見たフィオとクレメアが驚きの声を上げる。

「え!?? どうやったの!??」

「質量的に無理でしょ!??」

「できるから仕方ないだろうが……ん? どうした、フィオ?」

俺が声をかけるとフィオがビクツと身体を強張らせた。

見るからに顔色が悪い。

「なんか嫌な予感がするのよ……。今、敵感知に引つかかったのよ

……何が……ッ！」

フィオが言い終えた直後のことだった……。

その刹那に轟音と地響き、振動ともに俺たちの後ろに、このただっ広い洞窟の奥の空間に……ソレは落ちてきた。

光沢を持つ黒と白の鱗が覆う肉体は猛々しく、猛烈な存在感と殺意を隠すことなく溢れさせながらギリリと俺たちの持つ松明の明かりを反射する鋭い爪。

白の鱗の配列はまるでその屈強な骨格を表すようになっており、頭部の鱗の並びはまるで龍の頭骨がむき出しになっているようにも見えた。

「な、なんで……スカルヘッド・ドラゴンがこの廃坑に……!?!」

それはクレメアの悲鳴に似た声……スカルヘッド・ドラゴン……そう、ドラゴンだ……!?!

「な、よりにもよって退路に……これじゃ逃げれないよ!」

フィオがそう叫ぶとミツルギが剣を抜く。

グラムの白刃が松明の火を反射して輝いた。

「二人はハルヒトさんを連れて逃げろ! 奴は僕が相手をする!」

そんなことを言うミツルギに俺は呆れながら、留めていた矢筒から弓を外すと左手に持つ。

「アホかお前は。相手は最強生命体の名をほしいままにしてるドラゴンだろうが! お前一人でどうにかできるわけねーだろ! 退路確保したらトンスラ。生きて帰る、これだけでいいだろうが!」

ミツルギに罵声を浴びせつつ、俺は矢を放つ……狙撃!

俺の放った矢はドラゴンに当たるが、当たり前のようにドラゴンの鱗に阻まれ火花が散り弾かれる。

「ハルヒトさん!?!」

「ハルヒトでいいぞ。だがまあ……やっと勇者らしくなってきたじゃねえか、キョウヤツ!」

俺に、苗字でなく名前と呼ばれたキョウヤは目を見開いてぎよつとしていた。

「ボケつとしてないでちゃんと指示出せよキョウヤ。そんじゃ……いくぜ!」

俺は次弾を番えると、咆哮を上げるドラゴンに矢を放った!

とまあ、ここから冒頭に戻るわけなのだが……今回は俺……生き残れるのかなあ?

(続  
く)

勇者（笑） 卒業とあの暴龍に永遠の眠りを！

○

「クソツ……なかなかしぶといな」

「相手は最強生命体のドラゴンだから……ね……」

俺たちは、かれこれ一時間ほどスカルヘッド・ドラゴンと戦っていた。

その巨躯を支える力強い四肢には剣と槍に突かれた痛々しい傷が幾重にもつけられているにもかかわらずその機動力は衰えることを知らずにいた。

動き方とかの予備動作がどことなくティガ●ックスに似ている。

なのでなんとか俺とキョウヤは現世の知識をフル動員して攻撃パターンを予測して、攻撃の合間の隙を見て魔法を撃ち込んだり剣で脚を痛めつけている。

フィオとクレメアも大体の動きを把握してきたようなので危なげなく、尾のムチのような一撃も振り下ろされる鈍のような爪も避けてはいた。

しかし、スタミナの関係上俺たちがへばるのも時間の問題だ。

俺の付与した精霊エンチャントの祝福も効果が切れてしまっている。

今、俺の魔力は大体七割ほど残ってはいるはず……俺の精霊魔法は《クリエイター》や《エレメンタルマスター》の使うそれとはもはや別物だ。

彼らは、下位精霊に働きかける事で精霊魔法の効果を発揮させる。

だが、俺の精霊魔法は精霊との契約でその効果を起こす。

契約は俺の魔力を効果の規模ごとに取り決められた全体魔力の数%を精霊に与えないといけない……例えば、イフリートの使役の際は、咆哮系ロアーの精霊魔法を行使する際は、俺の魔力を100%の数値であらわすと……その4分の1である、25%の魔力をイフリートに与えないといけない。

差し引きすると、75%の魔力が手元に残るってわけだ。

それに、俺の魔力が上がり、上限許容が上がっても、この割合に変

わりはない。

絶対の数字として、この「25%」の割合が変わることはないのだ。その分強力なので、納得はしてるんだけどな。

……つまり、咆哮系が最大でも4発しかうてないのはそういうことである。

グオオオアアア！

目の前にいるドラゴンは咆哮を上げると、突進してきた。

俺たちはまとまることを是とはせず……

「みんな、散会だ！」

キョウヤの指示で、俺たちは散る。

あのドラゴンの鱗の硬さは希少鉱石のアダマンタイトを含む鉱石を主食とするためか、アダマンタイト並みの硬さを待っている。

加えて、下位のドラゴンとは言えその身に宿す魔力の量は尋常ではない。

ドラゴンは鱗の表面に魔力で構成された保護膜のようなものでその身を覆う事で魔法の威力を減衰させる能力を持つ。

それは通称「ドラゴン・ウォール龍壁」と呼ばれる。

膨大な魔力にものを言わせ、ドラゴンは常時展開しているのだ。

「さすがは最強生命体のドラゴンだな……」

「教えた通りだ。ドラゴンを倒したければ、あの龍壁を無力化した上で弱った鱗にグラムの一撃を与えれば……ダメージは通るだろうな」

俺はイフリートに心話で話しかけつつこうつぶやいた。

「それなんて無理ゲー……」

俺は右手の剣を鞘に収め、左手の剣を倉庫内に収納した。

そして、俺はえい白樺の弓を倉庫から引き出して鉄の矢を束にして掴み、引き出して矢筒にぶち込んだ。

ぶち込みながら三本ほどの矢を取ると弓に番える。

そして、ドラゴンの目を狙って放った！

そこに合わせるように、キョウヤが駆けてドラゴンとの距離を詰める。



その背後からジャンプしたフィオが彼の肩を蹴り、さらに高く飛ぶ。

「くらえええ！」

フィオが突き立てるようにダガーを龍の鱗の隙間めがけて振り下ろし、突き刺した。

キョウヤはグラムの刀身をスカルヘッド・ドラゴンの背中に深々と突き立てた。

俺の放った矢はドラゴンの目に突き刺さっていたので命中したのだろう。

ゴアオアアアアアアア！

スカルヘッド・ドラゴンは怒りの咆哮を響かせる。

奴の目の周りが赤く、怪しく光りだした。

怒ると、その機動力が増すのはモンハンでもお馴染みだな。

俺は暴れまわるドラゴンから距離をとりつつ、クレメアと並ぶ。

「ねえ、そろそろ逃げないとまずいんじゃない？」

「ああ、位置的にもそろそろ逃げれると思うが……」

退路の前で暴れまわるドラゴンを見て俺たちの表情は曇る。

キョウヤとフィオは剣を抜き、すぐに離れていたので被害には合っていないようだ。

「ここまで痛めつけても、まだ動けるって……どんだけタフなのよ……ドラゴンって！」

「ああ、全くだ……」

こちらに戻ってきたキョウヤたちの顔にも疲労が見え始めていた。

「やっぱりグラムでもそこまでのダメージが無いみたいだ……」

「全然刃が入らないですね……硬すぎです」

だがしかし、諦めたらそこまでだ。

「キョウヤ。グラムを覚醒させれるか？」

「いや、やったことなんてない……」

「無茶振りっていうのはわかってる！でも、それを今やってくれ！

龍壁は俺がなんとかする！」

そう、なんとかしないと全滅だ。

全員、仲良くあの趣味の悪いドラゴンの腹の中だ……何より、俺はまだ死にたくないんだからな！

俺はへエアリアル・ストーム・ストライクの詠唱を開始した。

『全ての空を統べる颯風の女王よ。 汝に我は願う。 我を滅ぼそうと、我を倒そうとせん彼の敵に嵐天の鉄槌を与えよう！』

エアロスラッシャーを起動した俺の手には圧縮された真空刃が手の上で変質を始める。

『私の願いは汝の、汝の願いは私の願い。 命刈り取る嵐を、汝の力をここに示そう！』

左手を頭上に掲げて変質した真空球を圧縮し、それは乱回転を始める。

『へエアリアル・ストーム・ストライクッ！』

俺の手から放たれた暴風の鉄槌はスカルヘッド・ドラゴンの体を捉え、斬り潰そうとのしかかる。

龍壁を切り刻む、小さな真空の嵐は確実にダメージを与えている。

脚を踏ん張り、ドラゴンは暴風に耐えている……まさか……

グオオオオン！

ひととき大きな咆哮が洞窟に響き渡った。



### ○ミツルギ視点

ハルヒトの放った精霊魔法は龍壁を無力化していた……しかし、その異変は突如として起こった。

「な、何アレ……!?」

ファイオの絞り出すようなその声……

「……まずい……あれは……」

ドラゴンは莫大な魔力の塊、龍壁はそれを封じるための殻だとしたら……?

漆黒のオーラを纏い、ギラつく殺意を宿した赤い光を宿す瞳は本能的な恐怖心を引き起こす……。

元来、龍壁を破られたドラゴンは著しく弱体化する。

しかし、なんらかの偶然が引き起こす悪夢も存在している……

「ドラゴン反転体……実在してたのね……!?」

クレメアのつぶやき……ドラゴンの、その身に宿す魔力が極限のストレス状態を超えさらに龍壁を破られた時にまれに起こる異変をへドラゴン反転」と言う。

性質が別物の魔力となるため、驚異的な進化を起こすようなもので……危険度の高いモンスターであるドラゴンがさらに凶暴性を増し規格外の攻撃力を持つ……!

ゴアオアアアアア!!

ドラゴンは咆哮を上げるとこちらに突撃してきた……疾い!?

とつさに、僕はクレメアの手を引くと退がる。

「バカ！ ぼけっとしてんな……!」

フィオが怖気つき動けなくなっていたところを狙われて接近を許していた!

ハルヒトがフィオをかばいながら、バックステップを踏むが……一瞬、ドラゴンが嗤ったように見えた。

ハルヒトの焦ったような声が聞こえた……ドラゴンの狙いに気がついたのでろう。

「水よ、流転せよ！望むは水の守護！へアクアヴェール……ッ!」

振り下ろそうとしていた爪を止めて、その場で反転。

ドラゴンは帰ってくる尾で二人を吹っ飛ばしたのだ!

「ぎやあああ!?!」

「フィオ！ ハルヒちゃん!?!」

クレメアの悲鳴……しかし、吹き飛ばされた二人は徐々に減速して地に降りた。

ハルヒトがとつさに保護魔法を使い、威力を殺してくれたようだ。

「ハルヒトさん、フィオ！ 大丈夫!?!」

「私は平気……それよりもハルヒさんが……!」

クレメアが駆け寄り、二人の容態を確認する。

「くそつたれが……腕が折れた……」

颯め面でハルヒトは腕を押さえている……利き腕の右手が折れた

らしい。

彼女がゲガをした以上、これ以上戦闘に参加させない方がいいと僕は判断した。

「フィオ、クレメア。　ハルヒトを守ってくれ」

僕は行く。

背中を任せられる仲間にはハルヒトを託して。

「キョウヤ!?　何する気だ!」

「そんなの簡単なことだよ……。　自分よりも儂い人を守る。　今の

僕のそれは自己満足な蛮勇かもしれないが、いつかこの出来事が人に伝わって……。勇敢なる者と呼ばれたらそれはそれで嬉しいかもね」

ハルヒトの表情が変わる。

絶望的な状態でも彼女の瞳には強い光が……。諦めていない強い光が見えた。

「一人で勝手に行くなよ、キョウヤ。　俺たちは臨時でも仲間だ……。それでも行くってんなら、リーダーとしての責務を果たせ!」

「今、僕に死ぬ気はない……。　必ず勝つよ!」

僕はグラムを八相に構えると、僕は魔力を高める。

あの女神様から授かったこのグラムで斬り伏せてきた難敵の数はしれず。

それでも今の今まで僕はこの剣をただ振り回していただけだった。

グラムよ……。君が僕を伝承者として認めていないのはわかった。  
テイルキーパー

でも、今だけ応えてほしい……。仲間を守りたい僕の意味に伝えてくれ……。!

あのドラゴンを倒すためには……。お前の力が必要なんだ!

―主よ……。汝は誓うか?―

僕は魔力を通して微かながら剣の心を捉えた……

ああ、誓ってやるとも!

僕は勇者(笑)、自称勇者を辞める!

何処にでもいるソードマスターのミツルギキョウヤだ!

自らを讃える残念勇者にはならない!

―お主……。気にしておったのか―

グラム……慰めはいいから！

今は力を貸してほしい！

「フハハッ！ よかろう。一時的に汝を伝承者に認めようぞ……さあ、我に戦場いくさばを超越せミツルギよ！」

グラムの刀身が青白い極光を放つ。

迸るそれは今の今まで見たことのない莫大な力だった！

「我はドラゴンスレイヤーでもあるが故にな……さあ、主よ。存分に戦うが良い！」

「あんな光見たことないんですけど!?!」

「希望の光……キョウヤ、やっちゃえー!」

「土壇場で覚醒させたのかよ……!?!」

三者三様の反応、新鮮だね……!」

「覚悟しろ、スカルヘッド・ドラゴン！」

僕は駆ける。

振り下ろされる爪を顎を紙一重に避けながら。

彼女たちの声援を受けて……

「くらえ、へブレイブスラッシャー!」

両手剣のスキル、必殺技系の一撃を僕は繰り出す!

ドラゴンの懐に飛び込み、放った一閃はドラゴンの胸を裂いた。

グゴオオオ!

その咆哮はドラゴンの断末魔ではなく、スカルヘッドドラゴンの赤い目がさらに爛々と輝いていた。

心臓に達する前に本能的に身を引き致命傷を避けた……とでもいうのか!?

「キョウヤ、危ない!」

クレメアとファイオが僕の元にかけてくる。

スキルを使用したあとは0.5秒の硬直時間が課せられる……それは戦いの中で、致命的な隙になる……

ドラゴンが嗤う……顎門を開き、僕を噛み殺そうと……



○第三者視点

「させるかよ」

キョウヤの窮地になる手前。左手を突き出して構えるハルヒトの姿が見えた。

『零下氷雪統べる女帝よ。 汝に我は願う。 我を滅ぼそうと、我が友を葬ろうとせん彼の敵に蒼き氷雪の裁きを下そう！』

突き出された、左手の前には氷の結晶が浮いている。

『長く悠久の時を、永遠の名の元に氷結させる氷<sup>コキユートス</sup>獄の息吹をここに誘え！』

氷の結晶は膨張と収縮を繰り返し、姿を変えていく。

『私の願いは汝の、汝の願いは私の願い。 永劫の時を凍てつくす氷雪の名の元に！』

氷の結晶は研ぎ澄まされた氷麗<sup>ツララ</sup>となる。

ハルヒトは詠唱を済ませ、いつでも撃てる状態に持っていく。

「キョウヤ、危ない！」

キョウヤの危機を悟ったハルヒトは躊躇いなく……

『ヘテイターニア・ジャツジメント・ランス！』

ドラゴンが、大きく開けた顎めがけて精霊魔法を打ち込んだ！

膨大な氷結属性の魔力を収束させ、一本の氷麗に変えたそれは……

断末魔を上げる間もなく、ドラゴンの頭部を氷結させた。

「……二段詠唱……消費魔力……50%か……」

言いながらハルヒトはその場に倒れた。

「う、ん……？」

誰かに背負われている……揺られている感覚を感じて俺は目を覚ました。

「あ、ハルヒちゃん！ 目が覚めたの？」

俺をおぶってくれているのはクレメアだった。

「あ、ああ」

「いきなり倒れるなんて、驚いたよー？ 本当に」

俺は小声ですまないと言うと礼を言っただけで降ろしてもらい、自分で歩く。

「キョウヤとフィオは？」

「もうすぐ街だからって先に走って行ったの。宿の予約を取っておくだつてさー」

「そうか……これは夢じゃないんだよね？」

「右手折れてる状態で言うことじゃないね！」

俺はあて木にくくられて固定された右腕を見て何があつたのかを思い出す。

「ドラゴンはどうなったんだ？」

「ああ、アスナイの街の冒険者ギルドに急ぎ報告しないといけないからって先にキョウヤ達は街に行ってるの。すごいよー？ あのドラゴン、ハルヒちゃんの魔法で冷凍保存されてるから」

「は？」

クレメアから話を聞くと俺の放った精霊魔法はドラゴンの頭を凍らせた後、全身も氷漬けにしたとのことだ。

おかげで、ドラゴンの体が腐ることなくその場に残っているとのことだ。

「アスナイの街が廃坑の、今後について取り決めると思うよ？ 猛獣も駆除されたわけだしさ」

「まあそうだな……」

俺は今回の旅を振り返る。

正直言つてこのパーティーの連中はいい奴ばかりだ。

キョウヤに関しては常識は知ってるが、アレなところがあるイケメン……でも根はいい奴だ。

クレメアは天真爛漫で、槍の腕も確か。

フィオは少し腹黒いところもある策謀家で少々毒舌な部分も見られた。

だが……俺にはカズマ達の元に戻りたいと思ってしまう部分もある。

ハチャメチャで、賑やかな彼女らと別れたくはない。  
はあ……どうするかなこれは……

●  
○??? 視点

「はい、やはり精霊王を従えているようです」

「そうか。では、引き続き監視を続ける」

「委細承知いたしました。では、魔王様……御機嫌よう」

【貴様の手腕に期待しているぞ……幹部候補のドラゴンテイマー殿】

さるお方との通信念話を切り、私はその目に見た少女の可憐さに見惚れたことを思い出した。

腹ただしい……人ごときはこの私が見惚れるなど……！

そして私の大事な骸龍を葬ったこともいつか後悔させてやろう

……！

骸龍の亡骸は完全に凍り付き、復活も不可能だろう……この子はここで果てた。

それまでのことだと私は言い聞かせる。

「ケンナシハルヒト……貴様だけは私が葬る……ダークドラゴンテイマーのゼダン様がな！」

●

○ アスナイの街に戻った俺たちは宿に着くとまず冒険者ギルドに向かった。

で、ギルドの受付にクエストの報告を済ませてスカルヘッド・ドラゴンを倒した事も俺の冒険者カードを見せて証明した。

ギルドにいたプリーストに金を払ってヒールをかけてもらい、腕を治すとすぐに街の大衆浴場に向かった。

最近、2日以上風呂に入れないなんてことがあるとストレスを感じるようになってきた……なんてだろうか。



で、フィオとクレメアがなぜか驚いていた。

主に……俺の胸を見てだが。

その後、女子同士のスキンシップと題して二人に揉みくちやにされた……羨ましい！妬ましい！と言いながら弄ばれたが、俺なんかしたのか？

……まあ別にいいか。

街によらず3日間弾丸で廃坑に向かったから、補給によっただけで風呂に入れなかったからな……たまに体を拭いてなんとか誤魔化した、サラシを巻いてるからストレスになった……かなりのな。

これは余談だが、サラシを解いた普段着姿の俺を見てミツルギがびつくりしていたのはなぜか……俺が知るはずもないな。

で、今現在……俺たちは冒険者ギルドにいる。

「キョウヤ。ここで答えを出すよ……」

俺はキョウヤ達と対面する形にテーブルに着く。

そして、ギルドの席で答えを出した。

「本当なら、アクセルでもいいんだけど……君の意思を尊重するよ。

さあ、君の答えを僕たちに聞かせてほしい」

「あたしとしては一緒に来てほしいけど……」

「はい、私もクレメアと同じ気持ちです。」

クレメアとフィオの正直な気持ちには本当に申し訳ないが……俺は

「ありがとう、二人とも。でも、俺は元のパーティーに戻りたい。

あいつらは待つてくれると思うんだ……俺の帰りを」

「これが俺の正直な気持ちだ……キョウヤには悪いけどな……」

「なんとなく……なんとなく感じてたよ。君が出す答えはこうなるってことは」

「でも、今回の旅は本当に楽しかった。いい経験にもなったし……

俺はお前らと組めたことを忘れない。本当にありがとう」

俺はキョウヤに礼を言う。

「うん、帰るべき場所があるのだから僕らにそれをどうこう言う資格はない。むしろ、引き離すような真似をした僕の方こそ無粋だった

と思うんだけどね……」

「いや、そんなことはないぞっ」

俺は冒険者カードを出してキョウヤに見せた。

そこに記されたレベルは……17の数字。

「貧者冒険者を、ここまでにしてくれたんだ。文句なんて言えるわけないだろ？」

俺はキョウヤに微笑みかける。

あのドラゴンの討伐で得た経験値は莫大な量だった。

とどめを刺した俺のレベルは一気に3も上がったしな。

そして、後日報酬が払われるそう……額が額だけにすぐに用意できないらしい。

「しかし、あのドラゴンは一体なんだったんだろうな……まあ二度とドラゴンとは戦いたくない」

「その辺については調査中みたいだね……ところでハルヒト……君に預けたいものがあるんだけどいいかな？」

キョウヤが俺に頼み事……？

「一応内容を聞かせてもらおう。預けたいものって？」

「この魔剣グラムを君に預けてもいいかな？」

……はっ

「キョウヤ……なんでそんなことを……？」

「いや、別に深い意味はない。君になら安心して預けることができるところから」

何言ってやがるこいつはという顔をしているのがばれたようで、キョウヤは裏表もない顔で普通に言い放ってきた。

「僕らも、君と同じ苦労を知ろうと思っっているのさ」

「あたし達ってハルヒちゃんとは比べたら恵まれてるなーって思ったの。キョウヤに頼りつきりだしね」

「なら、いつその事グラムを一時的に放棄してしまおう……ということになるとなります」

「オーライ、言いたいことはわかる。が、なんで俺なんだ？」

俺が聞くと、キョウヤは

「簡単なことだよ……君に認めてもらいたいからさ」

「はあ……わかったよ。ならこの剣を預かる」

俺はそれを聞いてこいつは引き返さないと悟る……だから、魔剣グラムを一時的に預かることにした。

倉庫に魔剣グラムをしまおう。

「俺が預かっても所有者はお前のままだからな？」

「ああ、わかってる。いつか僕を君が認めてくれた時に返して欲しい……」

「わかったよ……今日で勇者(笑)を卒業。勇者(真)を目指せよ！」

「もちろんだ！ その時に君を……いや、なんでもない」

クレメアとフィオの視線が冷たくなっているのに気がついたキヨウヤはしりすぼみになり、最後の方の言葉を聞き取れなかった。

まあなんだかんだ言つて大冒険は幕を閉じた。

これは後日の話なのだが、あの骸龍は廃坑の魔獣を食った拳句、鉞脈二つを食い荒らしたことがわかったので……賞金が60000万エリスとなっていた。

四人で山分けしたので……俺……小金持ちちゃん……

(続く)

報酬とご近所さんの襲来と！

○第三者視点

「これは一体何をしたのだろうか……」

仄暗い坑道の奥で白衣を着た学者風の男が呟いた。

アスナイの街から離れた位置にある廃坑には、王都より魔法スキルへのレポートで転移して来た魔法使いと、多くの学者達が潜入していた。

奥に当たる空洞には芯まで凍り付いたドラゴンの遺体が鎮座していた。

「聞く話によると、このドラゴンを倒したのはソードマスターのカツラギのパーティーだと聞いていますが」

「教授。カツラギでなくミツルギ氏です」

部下の指摘にそうだったなど教授と呼ばれた初老の男は顎を撫でながら思案の海に意識を沈める。

魔法に強い龍壁を破り、反転体となったドラゴンを凍結させるような魔法はこの世界にはない。

さらに報告では一抹の可能性を持つ〈アークウイザード〉はいなかったとされている。

可能性を持つ者は、その場にいたソードマスターのミツルギと共に行動していた駆け出しの魔法剣士の名前のみだった。

「ケンナシハルヒト……か……」

「教授。一応、調べてみますか」

教授の部下は好奇の目を資料に向けていた。

人には成し得ないドラゴンの巨体をまるまると氷漬けにしたその魔法に興味を持っていたのだから無理もない。

その後も、商人や学者達は狂喜乱舞することになるのは後の話である。



「じゃあ、ここでお別れだね」

「ああ、お互いに頑張ろうな……本当に俺に預けたままで行くんだな？」

俺は短かったような、長かったような一週間の冒険を終えてアクセルの街に帰ってきた。

「うん。グラムのことを頼むよ」

イケメンスマイルで微笑むキョウヤに俺は、冷たい視線で返す。

ニコポナデポが効かないのは俺が「男」だからなんだろうな……才カマじゃないけどな！

どうでもいいことは端に転がしておくか。

「ああ、任されてやんよ」

俺の返しにキョウヤは苦笑いをしていた。

「それじゃまたね、ハルヒちゃん！」

「お元気で……まあ、私たちはまだ街にはいますからたまにはお茶に誘いますね？」

クレメアとフィオが名残惜しそうにしながら俺から離れていく……そんな二人の姿を見て俺は、少しだけ寂しく感じたのは内緒だ。

○  
●  
キョウヤ達と別れ、俺は久々に見る顔ぶれとの再会……する前に持ち物を整理していた。

今の俺の所在は冒険者ギルドだ。

まず今回のクエスト報酬だが、150万エリスを四当分して37万5千エリスだった。

危険な廃坑への潜入と採掘だったので、相場としてはちようどいくらいだろう。

そして、ザブの報酬は採掘したミスリル鉱石の10%が俺たちの手元に来たが、必要なのは俺だけだったのでキョウヤが全部譲ってくれた。

それで、今回討伐したドラゴンに関してだが……まずその賞金だ。

なんと6千万エリスの賞金首として計算されていた。

ドラゴン単体で4千万で、出した被害がアダマントタイトを含む鉞脈二つを食いつぶしてダメにしたことから2千万エリスの追加報酬だった。

それでドラゴン討伐の戦利品は外皮の鱗とドラゴン肉だ。

あのドラゴンの鱗にはどういう理屈かはわからないが、純度の高いアダマントタイトが滲み出て表面がコーティングされている。

ゆえにこの鱗で武具を作ればアダマントタイト製の武具も作ることが容易になるらしい……で、それを20枚ほど貰った。

それと、ドラゴン肉。

これに関しては高級食材とも聞いていたので、実食が楽しみで仕方が無い。

まあ、ドラゴンの肉なんて食ったことが無いのだがな。

とまあ学術的に見ても珍しい個体だったからか、ドラゴンの遺体の買取見積もりも来ていた。

肉と鱗やらの外皮、内臓や骨……その合計で一億三千万エリスだった。

で、今回のリザルトは報酬の37万5千エリスとドラゴンの賞金の半分である3000万エリス。

そしてドラゴンの買取価格の一億三千万エリスから7500万引いて残る5500万エリスが俺の手元に来た。

これに関してはキョウヤが譲らなかつた……俺は最初断つたんだぞ？

全額を纏めて四当分すれば良い物を俺に報酬のほとんどを渡したと言ってきたのだ。

『今回の旅は君がいないと全滅していたかもしれない。君はMVPなんだ。だから僕たちからの気持ちってわけだよ』

というわけで今回の獲得エリスは……8537万5千エリスだった。

……どうしよう、こんなのは予想してない、想定外のお金が転がり込んできやがった……！

そう、俺はにわか成金に成ってしまったのだ。  
どう報告しようかな……これ。

●  
○カズマ視点

なんだか久々な気もするが……そこは置いておくか。  
ハルヒトが旅に出て一週間がたった頃。

先日のキャベツ収穫の報酬が出されると言うことで俺たちは冒険者ギルドに集まっていた。

ダクネスの自慢の鎧姿を貶して、ダクネス以上の変態と化しているめぐみんをどうするかと頭を悩ましていた時にアクアの声が聞こえた。

今回のキャベツ収穫しての報酬は各自の捕まえた分をそのまま報酬にしようとアクアが言い出した事だったので……

「なんですってええええ!?? ちよつと、これはどういう事なのよー!」  
受付嬢ルナさんの胸ぐらをつかむアクアが喚いている。

おお、もうちよつとであのたわわな胸がこぼれ……ありがとうございます  
います、ありがとうございます。

だが、こぼれなかった……無念。  
「なんで五万ぽつちななのよ! どれだけキャベツを捕まえたと思ってるの!?!? 十や二十じゃないはずよー!」

「そ、それが申し上げ難いのですが……」  
「何よー!」

アクアのいちゃもんはまだまだ続きそうなので視線を外して見て  
見ぬ振りをしていると……あいつが帰ってきた。

「アクアは何時も騒がしいな……ただいま」  
「おう、おかえり……ちよつと痩せたんじゃねえのか?」

普段のタンクトップとスカートの姿でなく、完全武装の鎧を身につけた状態のハルヒトがそこにはいた。

「……俺に対して、褒め言葉でもないぞそれは。変わりなかったか?」  
そう言ってきたから俺は適当に今までであった事を話した。

例えば、リッチーのウイズとの出会いとかな。

「ふーん……そのリッチーも災難だったんだな」

ハルヒトは苦笑いを浮かべてその場にいなかった事を後悔していたのかもしれない。

「お、ハルヒト。呼ばれてるぞ?」

「……お、おう」

浮かない顔のハルヒトは受付に行った。

で、アクアの襟首をつかんでルナさんから引き剥がし、あいつに何か囁いてから報酬を受け取って……?」

「では、ハルヒト様に報酬の授与です!」

やけにルナさんの声が張り上げられていた……ハルヒトの袋が大きい気がするのはいのせいかな?

「アスナイの街から感謝状も届いています! 読み上げさせていただきますね!」

ルナさんの読み上げた内容を要約するところだ……

ハルヒトはミツルギと言う冒険者のパーティーと共に廃坑のモンスターを駆除。

さらに大ボスのドラゴンを討伐して廃坑を鉱山として再び経営可能とした功績を称える。

と言う内容だった。

ドラゴンの討伐……どんな大冒険だよ……!?

「では今回の報酬です! お受け取りください!」

ハルヒトは重そうな袋を受け取ると肩に背負いアクアの手を引いてこつちに来た。

「金なら貸すから落ち着けよアクア」

「はい、ハルヒト様!」

「だから、ハルヒト様っていうなあ!」

ハルヒトと呼ばれて恥ずかしいのか、赤い顔をして涙目になるハルヒト……か、かわいい……中身が男じゃなけりやなあ……

ハルヒトは袋の中からいくつかのエリス貨幣を出すと、小袋にそれを入れてアクアに手渡していた。



「ちやんと考えて使えよ？ 本当に」

「わかったわ。 もう無一文は辛いからやだし」

言いながらアクアは近くにいた男にお金を渡していた……借金作ってたのかよ、あいつ。

「他のパーティーに行ってたが……まだ俺の籍はあるよな？」

「当たり前だろ？ お前は大事なその……なんだ……」

そういえばなぜこいつは俺たちといてくれるのだろうか？

あのままカツラギとかいうやつパーティーに行った方が、こいつのためだったのかもしれないのに。

俺がどう返事を返すべきか悩んでいたら、ハルヒトは苦笑しながら

……

「とまあ…… ただいま」

と、小さく呟いた。

その返しに俺たちは、声を揃えて言ってる。

『おかえりー！』

● 俺たちは改めてハルヒトをパーティーに迎え入れた。

○

キヤベツ収穫の報酬が支払われて、めぐみんの提案でクエストを受けようとしたが物の見事に高難易度クエストしか残っていなかった……理由はキョウヤの持っていた案件である魔王軍の幹部がこの町付近の廃城に住み着いたそう。

アクアに貸した金は帰ってこなくてもいいと思うくらいのお金だったが……それでも無一文になりそうだな、あいつ。

カズマとめぐみんは街の外をうろついてくると言っていた。

ダクネスは実家にて筋トレをしてくるらしい。

テ…… アクアはバイトをするらしい……知力がないのにムチャシヤガツ

いた。俺は現在、手元に必要なだけのお金を残してあとは銀行に預けてお

高難易度クエストも受けるのも良いかもしれんが、俺1人では無理だ。

カズマやみんなも乗り気にならん様なので俺は基礎筋力ステータスを上げるために、〈鍛製〉製の剣で素振りをしている。

それと並行して……俺自身のレベルが上がって〈武器鍛製〉の一部機能が使えるようになったのでその実験中である。

通常の鍛製でない、〈模造宝具鍛製〉の機能だ。

こいつにはかなり厳しい素材を要求される代わりに、確定で自分の作りたいものを生み出せる能力……と仮説を立てている。

と言うのも、剣鍛製とかのアーカイブがあるのでそういうことなのだろうと思いたい。

で、それでいくつかの宝具の模造品を作ってみた。

不滅の性質を持つ剣。

断絶の性質を持つ剣。

安寧の性質を持つ剣。

無重の性質を持つ剣。

それぞれには銘がない……あるはずがない。

模造宝具なのだから銘はないのだ。

四本の剣を作るために変異ドラゴンの鱗やミスリル鉱石の在庫が  
一気に半分に減った……これ以上何かを作る気はないがな。

ちなみにこの剣は全て欠陥品だ……それぞれの能力がピーキーで意味わからん。

もしもこれらを束ねることができれば……凄い剣が作れると思うが。

不滅の剣はただ頑丈なだけの鈍だ。

断絶の剣は斬れすぎる剣……関係なく全てを断つ。

安寧の剣は死者を導く聖剣のようだ。

無重の剣は重さを感じない剣。

おそらくだが、不滅の剣以外の3本は耐久力が低い……底辺だろう。

市販の剣を使う方が賢いと思うな。

とまあ、そんな事をしていたら時間が経つのは早い。

俺たちパーティーは思い思いの日課を過ごしていたら、いつの間にか一週間が経っていたのだから。

そして、報酬の支払いから一週間が立った今日の朝。

そのアナウンスは突然に聞こえてきたのだった。

●  
○第三者視点

「緊急！・ 緊急！・ 全冒険者の皆さんは直ちに武装し、戦闘態勢で街の正門に集まってください！」

緊迫したアナウンスが街に響き渡る。

ハルヒトは手際よく鎧や武器を身につけると、カズマ達と共に正門に行く。

何事かと街を走り抜け駆けつけるが、彼らは正門前に集まる冒険者と共に立ち尽くした

正門前に佇むその存在感は大きい……凄まじい威圧感を放つ騎乗した騎士がそこにいた……。

その左脇には兜が抱えられているが、その騎士には顔がない。

デクラハン。

不条理な処刑で命を落とした騎士が怨念により蘇り、肉体の全盛期をはるかに超えた身体と特殊能力を持つ。

そして、人に死の宣告を行い絶望を運ぶ首なし騎士だ。

漆黒の鎧を身につけた騎士は手の上に脇に抱えたフルフェイスの兜で覆われた首を差し出すようにして、そこからはくぐもった声が放たれる。

「俺は、つい先日……。この近くの城に越してきた魔王軍の幹部のものだが……」

穏やかに自身の紹介をしたかと思うと、その手の上に乗る首がプルプルと震え出し……

「まま……毎日、毎日、毎日毎日っ！ おおおお、俺の、俺の城に毎日欠かさず爆裂魔法を打ち込んでいく頭のおかしい大馬鹿は、誰だアアアアアー!!」

● 魔王の幹部の絶叫が響いた。

○

ずっと何かに耐えていたが堪忍袋が弾け飛んだような勢いでブチ切れてしまったようなかわいそうな叫びに俺たちの周りの冒険者達がざわついた。

デユラハンが襲ってきたのかとも思ったが、よく見るとやつのは配下も思われそうなモンスターがいない。

「……爆裂魔法？」

「爆裂魔法といえば……」

「爆裂魔法を使えるやつって言ったら……」

俺の隣に立つめぐみんへ、自然と周りの視線が集まった。

そのめぐみんは隣にいた魔法使いの女の子を見た。

見られた女の子に視線が集まると……。

「ええ!? あ、あた、あたし!?? なんであたしが見られてんの!??

爆裂魔法なんて使えないよ!」

突然濡れ衣をなすりつけられて、慌てる魔法使いの女の子。

いや、なんで爆裂魔法がデユラハンの城に撃ち込まれてんだ?

めぐみんの仕業にしても……あ、カズマと一緒に行動してたな。

「どど、どうかしましたか、ハルヒト?」

「え、俺に惚れちゃったの? こんなタイミングで?」

すつとぼけたことを抜かす2人を俺はじつと見て……その手を掴むとズルズルと引く。

「ちよ、ええ!? 何してるんですかハルヒト!」

「お、おい! バカやめろ!」

「自分たちのやったことだろうが! これ以上人に迷惑かけれるわけねえだろうが!」

これ以上他の冒険者に迷惑をかけるわけにもいかん。

渋る2人を引いて俺はズンズンと進む……その後ろからはダクネスとアクアがついて来た。

「おい、お前の所望の魔法使いはこいつだ。あんたは話が通じそうなやつだから、こうやって引つ張つてきた。殺しはしないと約束してくれるか?」

デュラハンとの距離はだいたい10メートルほど。

この距離なら俺のインレンジだ……万が一に剣を交える事態になればこいつらだけでも逃がせるような立ち位置で俺は仲介する。

「俺はデュラハンだ……魔に身を落とした今も騎士としての誇りは持っている。安心しろ」

「モンスターが相手だから安心はしたくないが」

「ふん、ならこうするか?」

デュラハンは首なし馬から降りると、俺の目の前に来て長大な両手剣を地に突き立てる。

「ここに剣を刺す意味はわかるな? 交戦の意思がないことを意味する儀式みたいなものだ……わかったなら貴様も剣の柄から手を離せ……もつとも、貴様に切られてもダメージなどないがな」

「ちげえよ」

俺も抜いた剣を地に突き立てた。

「これでフェアだ。怒るなりなんなりしてくれ」

「豪胆な女だな……まあいい」

俺から視線を外してめぐみんに向き直るデュラハンは叫んだ。

「お前が、毎日俺の城に爆裂魔法を打ち込んでいく大馬鹿者でいいのだな?」

俺が庇うような位置にいたのでめぐみんは少しだけ安心している気がした。

そして、めぐみんは黒いマントを翻して……

「我が名はめぐみんアークウィザードにして、爆裂魔法を操るもの……!」

「……は? めぐみんてなんだ。……バカにしてんのか?」

「違うわい！ 我は紅魔族の者にしてこの街随一の魔法使い……」  
めぐみんが補足のように名乗り返すとデュラハンはどこか納得したような雰囲気です。

「ほう、紅魔の者だったか。なるほど、そのイカれた名前が本名という訳か」

「おい、両親からもらった私の名に文句があるなら聞こ……あいたツ!?」

ヒートアップするめぐみんの頭を叩いて落ち着かせる。

ちなみにデュラハン俺たちのようなひよっこ冒険者は眼中にないのだろう。

「めぐみん、とりあえず謝っとけ……荒波をわざわざ立てる必要はない」

俺はめぐみんに優しく言い聞かせようとするが……

「……フン、まあいい。俺はお前らのような雑魚にちよつかいかけにこの地に来たわけじゃない。この地に落ちてきた「大きな光」と「精霊王を従えし者」の調査に来たのだ。確かに、俺もご近所さんの貴様らにんの挨拶もないのは失礼だと思った。が、だからと言って爆裂魔法を叩き込まれて毎度毎度結界を貼り直すこちらの苦労も考えてくれ！」

後ろではデュラハンの悲痛な声が聞こえた。

「なんかこう……うちの仲間が本当にすいません」

「いたたまれない空気に俺は自然と頭を下げていた。

「……いや、わかってくれたならいいんだ！ こっちは強者の責任で我慢しました。爆裂魔法を叩き込まれて敵襲かと思ひ、城門を開き急ぎでてみれば誰もいない……悪質なピンポンダッシュよりも酷い爆裂ダッシュは今後やめてくれるだけでいいから!」

「待ってください。紅魔族は毎日一回、爆裂魔法を撃たないと死んでしまうのです……」

『そんなわけあるかあああ!?』

俺とデュラハンの人のツツコミがハモった……本当に見事に。

『……あ……』

俺とデユラハンは互いに見つめ合い……フィツと視線を外した。

「ゴホンッ！ あー……。 どうあつても爆裂魔法を撃ち込むのはやめないんだな？ 俺は元は騎士だ。 自分より弱い者を刈り取る趣味はない。 しかし、だ。 これ以上城の近辺であの迷惑行為をするなら、こちらにも考えがあるぞ？」

「迷惑なのはこっちです！ あなたが来てから私たち冒険者には仕事がないんです！ 仕事奪っておいて何様ですか！」

「そうよ、そうよ！ だいたい魔王の昆布だか金平糖か知らないけど、この私がいるときに来るとはいい度胸じゃない！ アンデットのくせに、力が弱まる朝からこっちに来るなんて浄化してくださいって言うてるようなものだわ！ 私だってバイト先の店主に何度も怒られたくないわよ！ でもこれってあんたのせいなんですよ？ あんたをサクツと浄化すれば私たちの問題は解決！ さあ、覚悟はいいかしら!?？」

まくしたてるように言うアクアがこっちに来た……本当にお前はトラブルを起こすのが好きだな……

「おい、店主さんに怒られるのはお前の仕事ぶりのせいだろ……」

「ハルヒ！ 言わないでよ、そこはもうスルーして！ 言わないでよ！」

涙目で俺に反論してきたアクアを、手の上の首を差し出してまじまじと観察しているデユラハンは

「ほう……。 これはこれは。 プリーストでなくアークプリーストか？ この俺は仮にも魔王軍の幹部だ。 こんな駆け出ししかない街の、低レベルのアークプリーストに浄化されるほど落ちぶれてはいない。 それに、アークプリースト対策もしっかりしているのだが……。 そうだな、ここはひとつ、紅魔の娘を苦しめてやろうか！」

そう宣言してデユラハンはめぐみんに指を突き立てる。

「おい、交戦の意思はないとか言ってなかったか？」

さすがに揚げ足をとるのはかわいそうだと思っただが……

「フン、きちんと謝れば呪いを解いてやる。 それでいいだろうが！ こっちは何日も安眠できてないんだ！ これくらいの報いは受け

てもらおうぞ紅魔の娘！ 汝に死の宣告を！ お前は一週間後に死ぬだろう!!」

アクアが浄化魔法を唱えるよりも早く、デユラハンが叫んだ。

まあ、それよりも先に間にいた俺が身代わりになったがな……なんせ俺には……

「ハルヒト!?!」

「おっと、これはこれは。少々予定が狂ったが……は?」

俺の前には輝く小さな妖精が飛んでいた。

背中ほどの長さの、赤いリボンで止めた闇色の髪を逆立てて黒い光の呪いを受け止めているのは……

「私がいるからって無茶すぎだよ、ハルヒトくん」

「すまん、ハルナ。手を煩わせて」

妖精は呪い濃密な怨念を簡単に、完全に霧散させて振り向いた。

俺の後ろではアクアがポカんとその妖精を注視している……

「なんでこんなところに……抑止力の子が……!?!」

紅紫色の瞳を持つ彼女の名は織斑ハルナ……時の旅人にして俺の精霊回廊プロムナードに棲まう最後の精霊……いや、精霊神王殿だった。

(続く)



## 精霊の説教と冒険の交渉と！

### ○カズマ視点

どうしてこうなった……と思う俺は悪くない。

魔王の幹部が襲来してきて、めぐみんに呪いをかけようとしたところにハルヒトが割り込んで身代わりになったはずだった……のだが……

俺の目の前で練り広げられる光景は……

正座をさせられているハルヒトとデュラハンの人だった。

そして、あいつらを見下ろすような位置で見下ろし、説教しているのは……

「大体ですね、先ほど言っていた強者の余裕ってのはなんだったんですか？ 報復に死の呪いってそっちの方が頭おかしいんですか？

呪いを解くって言ってましたけど、それって本当に解けるものなんですか？ もし解けたとしても、いささかやりすぎじゃないんですか？」

輝く翅をひらひらとさせて、不思議な色合いに煌めく光のドレスを身に纏う闇色の髪を持つ……見るもの全てを惹きつけるような雰囲気を持つ美少女な妖精だった。

サイズで言えば15センチほどなのでほんとに妖精だ。

隣ではダクネスがあれば妖精なのか!?と目を輝かせていて、アクアはなぜか怯えている……なんでだ？

「おい、アクア。 何怯えてんだよ?」

なんとなしに聞いてみたら、アクアが俺の背中に隠れるようにして回り込んできた……ほんとになにやってんの？

「な、ななな、なんで神殺しの抑止力セイヴァーがこんな辺境に出現してるわけ!?

もしかして私を抹消するために世界が動いたって言うの!?! ねえ、カズマ様! あの妖精をやっつけて! 怖いからカズマがやっつけて!!」

「お、おい！ 落ち着けて！ 大体なんだよ、抑止力つてのは」

アクアはチラチラと向こうを盗み見ながら俺に説明をくれた。

「あの妖精みたいな子は神殺しの力を宿す通称、ユグド・セイヴァー世界樹の抑止力と呼ばれる神化した英霊の一種なの。あの子とはある神を消滅させた咎を背負い、神化した神の代行者でこの世界とは別の世界樹を管理しているはずの存在……」

「そんなのがいるのかよ!? どんだけ物騒な世界なんだ、ここは!?!」

「うるさいわよ、ヒキニート！ あんたこそ落ち着きなさい!」

「こいつ、自分のこと棚に上げて……!」

「見たところ、本来の力は制限されて発揮できないみたいね……でもほんとになんてこんなところに……ハルヒに宿ってるのかしら?」

「簡単なことです。私が存在できるプロムナード精霊回廊はハルヒトくんの物だけでしたから……それにしても随分な言われ様ですね、アクシズ教が御神体。水の女神のアクアさん?」

「ぎにやああああ!?!」

ビビるアクアが素っ頓狂な声を出して盛大にひっくり返る。

いつの間にかこっちに来ていたのか、位置関係の高低差のせいでアクアを見下ろす位置にいる妖精におずおすとダクネスが話しかけた。

「君は……?」

「こちらに視線を寄越した、セイヴァーとやらの少女は

「あ、これは失礼いたしました。私は、ハルナ。織斑ハルナと言います。以後よろしくなのです」

「日本人か? つと、俺はカズマだ、よろしくな」

意外な、フレンドリーな返答に面食らうが……ふと、視線をハルヒトに向けてと——足を押さえて悶絶していた……30分間ずっと正座させられてたもんな。

「私はダクネス。よろしく頼むぞ、ハルナ」

「我が名はめぐみん! アークウイザードにして……」

「はい、めぐみんちゃん正座!」

めぐみんの厨二名乗りを遮ってハルナとやらが、にこやかな笑みとこめかみに青筋のコンボで言いようのない威圧感を醸し出していた。

「ちよ、名乗りの最中……はい、すいません」

と、ハイライトの消えた目でこつちを見て笑うハルナ……こ、怖っ!?

マジで怖い！ なんなのあれ、目が笑ってないよ目が！

「ついでに、カズマくんも正座……」

「は、はい」

ひらひらと翅を羽撃かせてハルナがさっきのハルヒト達を説教していた高さに舞い上がる。

「さて、二人に正座をしてもらった訳は、その心当たりがありますよね？」

「はい、大いにございます」

「なら結構……では——」

● そこから俺とめぐみんはハルナに10分間説教を受けたのだった。

○

「ひ、酷い目にあつた……貴様に、あの精霊の制御はできんのか？」

首なし馬にもたれかかるように、生まれたての子羊のように足をプルプルさせているデュラハンがそんなことを言ってきた。

「制御したくても、向こうの力の方が上回ってんだぞ？ 無茶言うな」

つか、あいつが目覚めたのもホントに最近のことだったし……制御できるわけないだろうがよと言う、俺の心のうちのボヤキがデュラハンに通じるわけもないか。

「貴様といい……俺の呪いを打ち消すあの精霊といい……ほんとに何者なんだ？」

「何者でもねえよ、そこらにいるただの冒険者だ……」

ぺたりと、俺は尻を地に着けて正座を崩すようにして座る、屈辱的な人魚座りで座っていた。

足が痺れて動けないからな……この状態の俺に手を出さないのもハルナの説教がよほど堪えたからだろうか？

「とにかく、あの紅魔の娘に伝えておけ……しばらく、爆裂魔法を城に

撃ち込むなとな……あと一週間もすれば調査も終わる。 ……俺の方から出て行ってやるからと」

……なんだか可愛そうだなとも思えてきたが、魔王軍の幹部だし慈悲はかけるべきではないと思うがな。

「わかった、きちんと伝えとくよ……また俺も、ハルナに説教されたくないからな」

俺はそう伝えると首なし馬に乗ってデュラハンは闇のゲートを開いて帰っていった……人に呪いをかけるなど、30分も正座させられた拳句。

ハルナの、無意識に発動する神の祝言交えた説教と……長い時間、陽の光に晒された結果弱体化させられたから呪いをかける余力もないとか言ってたな……

さて、足の痺れも和らいできたわけだが……ふと見た光景に、俺の思考が停止した。

……ハルナがめぐみんとカズマを正座させて説教していた。

「なにやってんだよ……ハルナ」

フラフラと俺が近づくと、ハルナがこつちを見て

「お二人に道徳というものを説いていたのですよ。 因みにですが、ご近所迷惑が今回の騒動の原因だったので……私とハルヒトくんが付き添うと言う条件でカズマくんめぐみんちゃんには、デュラハンさんに謝りに行くと約束してもらいました」

俺も巻き込まれるのかよ……てか……なんかこいつフラフラしてないか？

「……大丈夫か？」

「も、もう限界です……」

フラフラと飛ぶハルナがそう言うと言ったと背中から輝きが消える。

そして……ふんわりと滑空しながら俺の頭の上に着地してきた。

「以外と呪力が強かったみたいなので、全力で潰した結果……一週間まともに動けません。 なので、マナを貯め直すのでしばらく頭の上

に置いておいてください……ハルヒトくんからマナを補給するしか、  
快復の方法がないのです……」

「わかった。さすがに風呂の時は離れてくれよ?」

「その辺はわかっているですよ……それと、本当に命は大事にして  
くださいね、ハルヒトくん……今回は利害が一致したので、特別に助  
けてあげましたが……次は自力でなんとかしてくださいよ?」

ハルナは悲しげな、辛そうな声でそう言ってきた……

それを聞いて俺は、彼女の夢物語を思い出した。

ハルナのそれは……とても印象的なものだった。

なぜ、俺やデユラハンの人に長々と説教をしたのか……それは彼女  
がたどってきた道の中で、彼女自身が絶対にしてはいけない「後悔」が  
あるから……

数日前に遡るが、寝ている時に精霊との思念波干渉で起きる〈記憶  
の共振〉が起こってしまった。

記憶の共振で見たハルナの断片的な記憶では、彼女はとある機動兵  
器のパイロットだった。

〈インフィニット・ストラトス（以下 IS）〉と呼ばれるそれは宇宙

での活動を想定した多目的強化外装……その世界にいた天才が生

み出し革命的なものだったのだがそれは女性にしか扱えないと言う

欠陥を抱えていた。

するとISが世に出回った途端に、世界では女尊男卑の風潮が流れ  
てしまうのは仕方のない事だったのだろうか?

どんな男も女性の奴隷でひどい人になると、道行く男に突然小間使  
いとしてこき使わらしい……どこまでいったんだよ女尊男卑は。

まあ俺なりに、正直に言えば理解不能ってわけだがな。

やがてハルナは実の姉で、世界最強の称号である〈初代ブリュンヒ  
ルデ〉の持ち主の織斑千冬の背中を追うように、何故かISを起動さ  
せることのできた実弟の織斑一夏と共にISのパイロットを養成す  
る〈IS学園〉に入学したそう。

そしてそこでの、数々の出会いは彼女を大きく成長させた……迫り  
来る脅威を、幾度となく退けながら彼女は強く成長していった。

そして次元を越えた出会いもその成長を促していたのだ。

オレンジ色の髪を持つ少女に、自身の弟と平行存在の少年との出会い。

そして特には風の獅子と名付けられたISを操縦していた少年はハルナに大きな影響を与えたらしい……。

どんな影響かは俺にはわからんがな。

そして、どう経緯でそうなったのかはわからないのだが……ハルナはその世界を壊そうと、人類を抹消しようと目論む管理者『』に単身で立ち向かったようなのだ。

ただの人であるハルナがその存在に勝てるはずもなく……彼女のISもボロボロになっていった。

生命維持機能でかろうじて生きている状態までに追い込まれながらも彼女は諦めなかった。

そして、そのキセキは起きてしまった……途切れていく意識の中でハルナは祈った。

『私はどうなつてもいい……私自身でなくみんなを守りたいから……だから……ダカラ……モウ、ナニモコワクナイ』

ハルナの意思に應えるように、ハルナのISが進化したのだ……そしてハルナの身もそれに応じるようにして神化する。

因果を捻じ曲げる言霊の力を覚醒させたハルナは自身に備わった〈無限の可能性〉を用いて全ての世界の技術を駆使して自らのISを神化させ、DEUS EX MACHINA 機 動 神 器 を 生 み 出 し て し ま っ た の だ 。

その機動神器は『』を逆にフルボッコにした拳句、〈縮退砲〉によって存在を因果の果てまで抹消した。

そう、ハルナは管理者を倒してしまったのだ。

その後ハルナは管理者を倒した咎を背負い、管理者の代行者としてその世界の存在した〈世界樹の抑止力〉として存在することを創生神に命じられたようだ。

ちなみに俺たちのいるこの世界はハルナの管轄外の世界なので、抑止力としてここにいるわけではない。

時の旅人として自身の出身の世界を探す旅行中だったようで、次元

の壁を突破しようとして失敗……この世界に落ちてしまったようなのだ。

仮にも人神なハルナは、こっちの世界で普通の状態で存在できるはずもなく自身の神格をワザと落として精霊レベルに落としているらしい。

それでも四元精霊王からは精霊神王と呼ばれてるそうだ。

そしてこの世界の意思との契約で、60年以内に退去しなければこの世界に縛り付けられると言う。

持っていた機動神器も封印状態で使えず、素の状態でも魔王をワンパンできる実力も今はない。

何故なら俺の精霊回廊に入った時に、圧縮して封印している状態なのだとか。

だから今のハルナは俺から少しづつ力を引き出しているようなのだが今の最大出力は全盛期の2%……今週末には4%になるらしい。

「散々、説教されたんだ。そこらへんはわかってるし、もうお前を頼るような事はしないよ……悪かったな」

「わかってくれたのなら結構なのです。私、お腹空いちやいました

……すかー……」

くてつとハルナはだらしなく俺の頭の上でうつ伏せに寝そべって寝てしまっている。

「お、おい……ハルヒト……そいつかせ、仕返ししてやる！」

説教された恨みか、足がしびれて動けなさそうなカズマが俺にそう言うってくるが……それを俺は手で制した。

「おい、やめとけカズマ。ハルナは以外と根に持つタイプの性格だから仕返しなんかしたら……後で大変な目にあわされるぞ？因果

逆転で女体化させることもできるとか言ってたし」

……まあそれやられたらキャパシティオーバーで俺が死ぬわけだが。

それを聞いたカズマはグヌヌと言う悔しそうな顔をしながら「それは困る」としびしび引き下がった。

「むにゃ……焼きそばパン美味しいれすう……」

頭の上で緩やかな寝息を立てるハルナをダクネスとめぐみんが恐る恐るハルナを指で突いてる。

「触れるってことは……実体を持っていますね、この精霊。しかも魔力が私の倍々はあるはずですよ……ハルヒトはこんな子を身に宿してたんですか？」

「か、かわいい……なんなんだこの愛らしさは」

ダクネスとめぐみんのそれぞれの感想を聞いていると、アクアが

「デュラハンも帰ったことだし、ここはひとつ……勝利の花鳥風月うす！」

歓声に沸く冒険者たちにアクアがセンス二つを手に持って水を出していた。

頭にはコップが乗っており、そこにセンスの水が入ると……中の種が水を吸い、一気に成長して綺麗な花を咲かせていた……

宴会芸か……なんかすごいな……と言うかなんかとしか言いようがない。

あれが花鳥風月？

……なんだか体に力がみなぎってくるような気がする……気のせいだよな？

そんなこんなで、デュラハンの撃退(?)の緊急クエストはクリアされたのだった。

○

デュラハンの襲来から何事もない平穏な日々が流れ、一週間の時が経ち、冒険者ギルドにて俺たちカズマパーティーは駄弁っていた。

「クエストよ！ クエストを受けましょう！」

「えー……」

カズマとめぐみんの不満げな声を聞いてアクアが

「もう借金に追われる生活は嫌なのよお〜！ ハルヒもなんとか言つて！」

「まあ、借金に追われるのはアクアの自業自得だが……高難易度でも



クエストをクリアしておくのも悪くないと思うぞ?」

「私も別に構わないが……」

ダクネスは乗り気でないカズマとめぐみんの様子をうかがっている。

「まあ、ハルヒトくんはお金持ちですしねえー……」

相変わらず俺の頭の上でくたつとなるハルナにもみんなが慣れていた。

最初はおっかなびつくりと、アクアもギクシャクしてたが最近はどう慣れている。

ダクネスがどこから持ってきたのかは知らないが、人形の服をハルナに着せていた。

今の春奈の服装はノースリーブな白いワンピース姿だ。

背中が前回に空いていて、翹を出すこともできるとハルナは喜んでいた。

前着ていた光のドレスっぽいものはハルナの力で編み出された精霊装とよばれる精霊力の結晶化したものだそう。

まともに飛ぶのはまだできないようで、フラフラと飛んでいるのはよく見る。

まあ、明日の午前中0時には今現在の力が完璧に戻るようだ。

「ねえ、私全力で頑張るからあー! お願ひよ、カズマ様! もうコロツケ売りたいくないのおおお! 売れ残ると店長が怒るからもうバイトが嫌なのよおお!」

その必死な様に、カズマとめぐみんが顔を見合わせて

「わかったよ、なんか良さそうなのあればついて行ってやるから」  
カズマがそう言うときアクアは嬉々としてかけて行った。

……高難易度クエストしか残っていない状況だし、気になるので俺はアクアの後ろについていくことにした。

アクアが眺めているクエストには危険度を示す赤ドクロのスタンプが大量に押されているものばかりだった。

その中からアクアが選んだのは……

「よう」

「ちよい待ち、ちよつと見せろ」

すつとその手にした紙を取ると目を通す。

「マンティコアとグリフオンの同時討伐……無理に決まってるだろ、俺らのレベルじゃ無理だ」

取り上げた紙を依頼ボードに戻そうと思った俺は、はたと動きを止める。

「アクア。お前がきちんと頑張るならこのクエスト受けてやってもいいぞ?」

カズマ達を言いくるめて、俺はツテを頼りにこのクエストを受けようと思った。

● 俺はハルナに頼んでとある男に手紙を運んでもらった。

### ○第三者視点

「マンティコアの討伐を僕たちが引き受ければいいんだね?」

「ああ、頼む。王都に戻るのは明日なんだろう?」

「そうなるかな……相手が魔王軍の幹部だとさすがに僕単身では太刀打ちできないからね……」

苦笑いする茶髪の青年ごと、ミツルギはハルヒトと談笑していた。

「よろしくお願いしますね、キョウヤくん」

「わかっているよ、ハルナさん。大船に乗った気分です任せてほしい!」

頼もしいですね〜とハルナは言いつつ、ハルヒトの肩に乗って足をぶらぶらさせている。

その手には茶菓子の欠片が抱えられており、一心不乱に食べていた。

「しかし、ハルヒトもどこまでも規格外なんだね……」

「よせよ、そんな褒め方されても嬉しくない」

ムスツとした顔をするハルヒトにたじたじしているキョウヤを眺めるのはカズマ一行だった。

「あれがミツルギキョウヤか……」

眺めながらカズマは言う。

彼らのパーティーと合同で狩れば問題ないだろうと、ハルヒトが提案したのだ。

報酬は折半と提案してハルヒトが話をまとめたようだ。

イケメンのミツルギにリア充の気配を感じたカズマは微妙な顔だ。

「ふむ、かなりの手練れのようなだが」

「はい、強そうな人ですね……」

「あの人どっかで見えた気がするんですけど……」

三者三様の反応で……ミツルギを見ていた。

そしてその日の午後、合同パーティーは街を出発した。

(続く)